

love laughs at locksmith. - 年の差恋愛の始め方、続け方 -

ワイニスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Love laughs at locksmith - 年

の差恋愛の始め方、続け方 -

### 【Zコード】

Z1832T

### 【作者名】

ワイースト

### 【あらすじ】

34歳の男。17歳の少女。倍の年の差の恋は、果して恋愛に発展するのか？

雇われシェフの廣瀬トオル。彼が腕を振るう『カーサ・エム』は、小さい店ながら地元では多くの人々に慕われていた。おかげでこの店のカウンター席はいつもなんとなく賑わっているのだ。たつた一枚の板。挟んだ向こうのトオルと隣り合つ新たな出会いを、皆、今日も楽しむために。

少女の姉である美空の頼みから、『カーサ・エム』のカウンター右隅の席は彼女 四方美純のためのリザーブ席となっていた。

今夜も彼女の視線は、一枚板の向こうを見詰める。ゆっくりと形になり始めた、一つの思いが伝わることを願つて。

## “Boyled” meets Girl

もうすぐ時刻は、深夜12：00を回る。街はいつも通り静かだつた。ネオンやサインは見当たらない。明かりといえば街灯と信号機の赤・黄・青。毎晩通るこの国道。この時間はほとんど人通りがない。だから、彼はいつも気持ちよく自転車を漕ぐ。風を切って滑るように、速く。速く。水無月の夜風は、田中と比べてやや涼しかった。湿気を帯びた風はすれ違うと彼のシャツや髪をしつとりと撫でるように通り過ぎる。それがこそばゆいようで。何だかちよつと気持ちいい。

彼の名前は廣瀬トオル。

この、『都会じゃない街』で暮らす、ごく普通の男だ。歳は今年で34歳になつた。現在バツイチ、彼女ナシ。

仕事はこの街で、雇われのイタリアン・シェフをやつている。まあ、シェフといつても、従業員は彼しかいない小さな店なのだが、それでも人口における高年齢層の多いこの街で、いわゆる『洋食』で生き残つしていくのは大変なことなのだ。需要の少ない媒体であることは間違いない。そんな中で“6年目”的の店『カーサ・エム』は、地域では1・2を争う人気店である、とひそかに自負していた。毎朝7時には家を出て、買い出しと仕込み。終わるのは早いときで10時頃。常連さんが来たり、仕込みが多かつたりすると、日をまたいでしまうこともある。労働時間は、長い。そのせいで飲食就業者は、気が付くと休みの日も含め『家～職場・職場～家・時々コンビニ』という生活ゾーンが固定化されがちだが、まんまともつて彼は固定化されていた一員であった。決して出不精というわけではないのに、休みの日は外に出ていても、『生活ゾーン内』でしっかりと済ませてしまっている。それはカフェも、スーパーも、本屋も、美容院も、全部がゾーン内にあるのもいけない理由の一つなのだろう。

うけれど、もう一つ言えるのならば、そのことを指摘してくれる身近な人間がないのもまた問題なのかもしれない。

今夜は、親しい友人が奥様の誕生日を祝う会を催したいとの事だつたので、場所の提供に一肌脱いだ。

おかげでまあ、こんな時間だ。

和気あいあいに弾んだ会話。うまい料理に、楽しいお酒。なかなか見つからない落とし所は、気が付くと日付が変わる勢いだつた。片づけが終わつて、売り上げの計算、明日の発注、残りの仕込み……。やることは、結構ある。一人でやつていると慣れてはいてもそれなりの時間になる。それも仕方ないことだとわかつてはいるけれど、こうしてだれも歩いていない夜道を帰宅することになると、ちよつと物悲しい気分にもなつたりもする。

#### 100mおきに足元を照らす街灯。

そのたびに広がる、直径数mの小さな光りの輪は、まるでスポットライトのよう。上から注ぐ光でできたちつちやな世界は、歩道沿いにポツン、ポツンと、規則的に続く。誰もいない何もない、だけど無機質に照らされたその場所は、まるでテレビで観たことのある宇宙飛行士の降りた月面のように、生命のない世界みたいだつた。

その光景も、またちよつと物悲しく。

ちよつと沈んだ気持ちになりそうな自分を、振り払つようにトオルはさらにスピードを上げて自転車を走らせた。視界も、彼と同じスピードを上げて進む。足元を照らす街灯の明かりが、明・暗、名・暗、と柔らかなシグナルのように点滅する。肌に触る風もざわざわと音を変えてゆく。こんな間に誰もいるはずがないから、普段だったら出さないような速度で自転車は走らせた。年甲斐もなく胸が弾んだ。

ふと、視界に影のようなモノが映つた気がした。街路樹の葉でも

揺れたのかと思い目を凝らす。

しかし、何もない。

気のせいかとトオルが視線を逸らした次の瞬間、まるで息でも殺していたかのように樹の幹の影から再び何かが飛びしてきたのだ。

(えつ？ 女の……子ツ？！)

その影は暗がりから飛び出した。白っぽいブレザーに縁と黄色のタータンチェックのスカート。明るい色の制服姿だから、顔までよく見えなくても高校生くらいだとわかった。ヒュツ、とトオルは息を呑んだ。深夜、急に目の前に現れた少女。しかも彼女はなぜか数歩、こちらに踏み出してくるのだ。そしてトオルが警戒して身を固くした瞬間、

突然、彼の自転車の前に飛び出した！！

(なつ、避けられないッ！)

トオルは慌ててブレーキを力一杯引いた。

キィイイツと聞いたこともないくらいの甲高い音が響いて、自転車はコントロールを失う。少女を避けようとした拍子にタイヤは横滑りして、瞬間、視界がぐるっと回った。

「キヤア——ツ！」

悲鳴が聞こえた。けれど、頭がそれを悲鳴と認識するかしないかのうちに、トオルの体は右肩から地面に打ちつけられる。アスファルトの上に激しく擦りつけられる右半身。摩擦で皮が削れる。それでも殺しきれない勢いに、トオルの体は何度か地面を転がった。世界が、彼を中心に回る。

「…………。いててて

ようやくはつきりしてくる意識。そしてトオルはゆっくりと体を起こす。

自転車は……あつた。数m先の街路樹に激突して止まっている。

自分は、と思つて全身をそつくり見回してみると、こつちは自転車以上にだいぶ酷かつた。ジーンズは膝の部分が切れてボロボロ。その下の膝からは血がにじみ出でている。右肘のところも大きく擦れて血がにじんでいた。

「はあ～、あちこち傷だらけだあー」

ため息交じりにトオルは呟いた。今夜のシャワーは痛いんだろうな、と想像した。それでも不幸中の幸いか、骨折やらの大きな怪我には至らなかつたようだ。あの勢いで転倒した割にこのくらいの怪我で済んだというのはツイっているほうなのかもしれない。

(もういい大人なんだから、あんなスピードで走るのはやめないと、(な)

心の中で自分を戒め、ゆっくりと立ち上がるトオル。そして、痛む足を引きずりながら自転車を起こす。

持ち上げた視界に白い影が入つたおかげで、ふと、思い出した。その子の存在を、すっかり忘れていた。

街灯の明かりの下、長い髪の少女がぺたりと尻餅をついている。口は悲鳴を上げた時のまま閉じるのを忘れ、顔色は暗い夜道でもわかるくらいに蒼白になっていた。トオルが自転車のスタンドをかけて止め、ゆっくりと彼女の方へ近づいていくと、彼女の虚ろな目だけが彼の姿を追つた。トオルが少女の真横に辿り着き、屈みこんだ。出来る限り警戒させないよう努めて明るく振る舞う。

「ごめんね。大丈夫だった?」

トオルが声をかけると、少女はまるで後ろから声をかけられた猫のようにビクッとした。

「あー。あの、さ……」

「は、ひやい……」

震える声で少女は初めて言葉を吐き出し、失敗した。

「大丈夫、かな?」

「は、ひやい……」

彼女の「言田は、一言田とまつたく同じ失敗をした。表情もこわばったまま、まるで使い回しのアニメーションのように寸分たがわぬリアクションだった。それが、何だかトオルにはちょっとツボだつたのだ。今のこの場の雰囲気。戸惑つた顔の少女。不謹慎かもしれないけれど、どうしてもおかしくつてトオルはつい笑つてしまつた。

「く、くくくーまつたくおんなじリアクションつて……。ははは、い、痛てててつ！」

彼は、くの字に腹を抱えて笑い出した。そのせいで曲げた体のあちこちが激しく痛んだ。苦痛に顔を歪めたが、それでも笑いが止まらなかつた。あんまりにあつけらかんと笑うトオルをぼんやり見ていた少女の目は、けれど次第に色を取り戻していく。その表情も青白いのから赤いのへ変わつていく。目尻がキッと釣り上がる。

「ちょっと、何、笑つてんのよ！」

「はははっ、……くつ、何？」

急に話しかけられて、彼女の言葉が耳に入らなかつたトオルは素つ頓狂な声で聞き返した。だが、彼女はそれがまた氣に入らなかつたようだ。

「何がおかしいのよ？！　へらへら笑わないでよ！　いいから黙れつ、て言つてんのよつ！－」

少女は自分の言葉じりを捕られたのが余程氣に入らなかつたらしく、血相変えて怒鳴り出した。

清楚な雰囲気さえ感じさせる長い黒髪、最近の子にしては控えめなメイク。スカートこそ今どきの子達と同様にちょっと短かめだけれど、おそらく学校指定の制服を指定のまま着こなしているのだろう。見た目だけだったらお淑やかと表せそうなその少女の口から出た言葉は捲し立てるように荒っぽく、だいぶギャップがあつた。

トオルは最初キヨトンとして、それから今度はちょっと控えめにだがやっぱり笑つてしまつた。

「くくくー、凄いね。『黙れ』だつて……」

そのトオルの言葉でハツとなつた少女は、急に小さくなつて目を伏せた。自分の口から出でしまつた言葉に気付いたおかげで、今まで借りてきた猫のように、急に居心地悪そうに俯いてしまう。その様子がすぐ可愛らしかつた。

トオルは一呼吸小さく入れて、笑いはお終いにする。それから少女の顔を覗き込むと言つた。

「ごめん、ごめん。悪いのは、俺のほうだつた。ぼーっとして自転車を走らせた。君を撥ねるところだつた。それに笑つたのも……ごめん。俺が悪かつた、謝るよ」

トオルは自分の無礼を詫びる。彼女は俯いたままだ。

しばらく、トオルは黙つていた。彼女の気持ちが整理が付くまでは待つていようと思つた。ちょっとすると少女は顔を上げた。ついていたお尻を持ち上げて、スカートの裾を手ではたいた。

「……別に。気にしてません、大丈夫です」

言葉とは裏腹にたっぷりと気にしてたままの複雑な表情をする少女。そんな様子もまた、ちょっと可愛らしかつた。トオルは今度は自分の胸の内だけで微笑んだ。

「そう……、ごめんね」

トオルもゆつくりと立ち上がる。

「いててつ……」

右の膝がミシミシ言つた。血が固まり始めたのか、筋肉を痛めたのか、動きが鈍い。トオルは何度か右足だけ屈伸して自分の体の様子を確かめる。その仕草をみた少女の視線が、彼の気にする場所に注がれた。

そして、また青くなつてしまつた。

「あつ」

少女は言葉を失つた。何事だろうと思つたトオルは彼女の顔を覗き込む。

目が、合つた。それは震える目をしていた。その目がトオルの目元に何かを見付けてさらに見開かれ、ますます震える。急に潤い出

した少女の瞳に、トオルはギョッとした。

「私、そんな……。ごめん、なさい……」「めんな、さい、ごめんなさい……」

少女は突然、何度も何度も謝りだした。

「ちょっと、別にキミは悪くないって！ 謝らなくてもいいんだよ」「い、い、……ごめ、ごめんな……」

何度も、何度も、何度も。彼女は顔を抑えたまま、何度も謝った。途中から、涙と嗚咽で言葉にすらならなくなつたが、それでも唇はずつと謝罪の言葉を紡いだ。

何を言つても、何をしても、少女は首を振つたままだつた。トオルはどうすることも出来なかつた。

慰めようにも理由はわからない。動搖してなのか、ちつとも彼の声は届かない。

トオルは深夜の国道に佇む。隣には、一人の少女。  
どうしたもんかな、と頭をかくのだ。

道沿いの植え込みにペタンと座り込んで、トオルと少女は黙りこくっていた。

だいぶ落ち着きはしたもの、少女はまだ涙をポロポロこぼし続けている。隣に座ったトオルは、居所なくぼんやりと空を見上げるしかなかつた。

気が付くとトオルは星を数えていた。

『この年になるどどうでもいいことは気にならなくなる』なんて年寄りじみたことは言いたくないけれど、こつやつてぼんやりと夜空を見上げるなんて一体どれだけひさしぶりなんだろう、とトオルは考えた。最近忙しいのにかまけていろんなことをおざなりにしている気がする。気持ちに余裕がなかつたとも感じる。これまでずっと生きてきてその存在を知らなかつた筈はないのだから、自分にとつてそれがどうでもよいことのように思つていたのだろうか？ だからこんなにも驚き、新鮮に感じてしまうのではないか？

夜空には見渡す限り満天の輝きがあつた。それは荘厳なまでに美しい。散りばめられた星々が、彼の頭上の街灯と街路樹の葉先に向こうにどこまでも続いていく。数えても、数えても、あとからあとから溢れてくるみたいに無限のまたきが空に生まれる。

トオルは時間を忘れてその星々を数えていた。こんな時なのに、自分はもつと日々の小さなことを大事にしなければいけないと反省もした。どうでもいいことなんて、ないのだ。隣に座る少女のことだつて、そうだ。

駅からそれほど離れた場所ではないにしろ、終電後のこの時間帯に一人の前を通る人影は全くない。時計を持つていなかつたので今が何時かわからなかつたが、いい加減高校生が出歩いていてよい時

間でもないだろ？トオルはゆっくりと腰を上げた。

「んん…」

初夏とはいえ夜はまだ涼しい。しばらく座っていた体は硬直していた。腕を伸ばし、首を鳴らし、歩き出す準備を整える。そんな彼の気配を感じたからか、少女もゆっくりと顔を上げる。まだ涙の跡の消えない彼女にトオルは声を掛ける。

「…行こつか？」

少女は無言のまま頷いた。

聞けば、彼女の家は駅でいえば一つ隣だった。

けれどここは『都会じゃない街』。都内と違つてひと駅ひと駅の間はかなり距離がある。ひと駆歩けば小旅行、ふた駆だったら帰宅難民だ。だからこの時間、彼女を家に送り届けるにはタクシーを利するほかはない。

「駅まで、歩ける？」

コクリ、と頷く。

トオルは自分の自転車を取りに行くと、それを手押ししながら進んだ。少女はそのちょっと後ろを見てくてくと付いてくる。一人は駅までの道のりを無言で歩き始めた。カラカラカラツ、と自転車の車輪が廻る渴いた音が響く。一人の足音がカツカツと鳴る。世界は静かだ。時折、街灯がジジジッとなるくらいでほかに音は聞こえない。規則正しくカツカツと鳴る一人の足音。しばらくすると信号機が見えてきた。あの交差点を左に曲がれば、駅はすぐそこだ。

ふと、気が付くと足音の一方が遅れ出していた。カツツ、カツツ、カツツ、と。

振り返ると、さつきまですぐ後ろにいたはずの少女がずいぶん離れて歩いていた。トオルは立ち止まつた。少女も、立ち止まつた。そして辺りは再び静寂の海に沈み込んだ。不気味なくらいくつきりと、信号の点滅する音がカチカチ聞こえた。じつと二人は立ち止まつていた。

トオルははずつと感じていた。多分この子は、こんな時間に外を出歩くタイプの子じやない。おそらく何か事情があるんだろう、と。けれどそれを解決してあげるなんて気は彼にはなかつた。第一、解決できるかも怪しい。10代女子の悩みなんて大抵の男は専門外だ。だから彼は待つことにした。彼女が自分で考えてどうするかを待つ。30過ぎのトオルに出来るのはそれくらいの気がしたのだ。くたびれたオジサンの意見は、現役女子高生には必要ないはずだ。

少女は、まだ立ち止まつたままだつた。

トオルは彼女の顔を見たが、俯いた彼女がどんな表情をしているかまではわからない。声をかけるべきか、かけないべきか迷つたが、結局待つことにした。トオルは自転車のスタンドを立てた。カタんツと鳴つたその音に、少女はビクンツと反応した。臆病な娘なのかな、とトオルは思つた。

けれど、そんな娘がこんな時間に一人でこんな場所にいる……。その理由はきっと些細な事ではないのかもしれない、とトオルは推測した。

少なくとも、彼女にとつては。

何分たつただろうか？　このままでは埒があかない、……そう思えた。

トオルはとうとう待つことを諦めて、自分から少女に歩み寄つた。トオルが近づいてきても、少女は立ち止まつたままだつた。彼はあつという間に彼女の前まで辿り着いた。

「…………！」

トオルは少女の手を取つた。少女はまたビクンツと反応したが、トオルは気にしない。片手で自転車を押し、片手は彼女の手を引き、そして再び前へ歩き出す。次第に駅が近づいてくる。ゴールはもう目の前だ。ふと、繋ぐ手にぐつと力が入るのを感じた。それでもトオルは黙つて歩き続けた。

「……何にも」

そして急に、少女が言葉を紡いだ。少女が先に足を止めた。

「うん?」

「何にも……訊かないんですね。何でこんな時間に一人でいるか、とか、何であなたの自転車の前に『飛び出した』のか、とか」

「…………」

トオルも足を止めた。そして、繋いでいだ彼女の手をそつと放す。その手はほんの一瞬だけ空中で何かを探しかけて、しかし結局は彼女の脇に帰っていく。ほんの刹那、音のない世界に一人は佇む。けれど、ロータリーを走り抜けていくタクシーのエンジン音が、二人をすぐに音のある現実に連れ戻した。

少女の口から出た言葉は確かにそう聞こえた。『飛び出した』と。そしてそれは嘘でも、トオルの聞き間違いでもないのだと、彼女の俯く顔が語る。

「キミは……」トオルはポツリと言つた。

実際、彼に驚きはなかつた。多分、そうだろうと思つていた。思ひ当たる節はあつた。少女はあの時、一步を踏み出した。トオルのことをその目に認めた後で。

「キミはどうしたい？　問い合わせられたい？　非難されたい？」

「…………」

「それとも、慰められたい？」

その一言に少女は強く反応する。顔を上げ、かぶりを振つた。

「そつ……そんなんじゃつ、ない！　私、そんなふうに思つてなんか……ない」

「そ。でも、どうしたらいのかなんて俺にはわからないよ。俺はオジサン、キミは高校生。これだけ年も離れてたらキミが何を考えていかなんて、悪いけど俺にはわからない」

トオルは苦笑してみせる。

「だから、訊いたってわからないよ。それに、ごめん。興味もないんだ」

顔を背けるトオルに、少女は俯きながらもつ一言こぼした。

「けど、あなたはそれでこんなに大怪我を……。私、そんなつもりじゃなかつた……」

そしてまた、涙をこぼし始めた。

駅の時計を見て、トオルはちょっと驚いた。もう深夜三時だつた。そんなに時間が経つていたとは思わなかつた。そしてこんな時間だからこそ、乗り場にタクシーは一台も停まつていなかつた。駅前は閑散としていて、覗き込むと駅構内もほとんど電気が消えていた。ただ駅名の看板だけが煌々と明るく暗闇に浮き出していた。

「は～、まいつたなあ」

トオルは立ちすくんだ。これはちょっと計算外だつたのだ。頭を搔いた。駅に着いたら少女をタクシーに乗せ、運転手にいくらか渡せば御役御免のつもりだつた。一体こうなつたら、どうすればいいんだろう？　まさか、彼女をほつて帰るわけにはいかないし、かといつて何時まで待てば次のタクシーが来るのかなんて、ちょっと見当も付かない。明け方までこうしてゐる訳には絶対にいかない。

これが男だつたら、自分の店に連れて行つて椅子でもどこでも好きに寝ろつ、てこともアリなんだろうけれど。

そうしてトオルはチラッと少女を見た。まだ、ポロポロと涙をこぼして下を向く少女。

ナイな、と思う。それはナイ。倫理的にも、人的にも。ましてや成人男子としては絶対にNGだ。

ますますもつて困り顔になる、トオル。

「う～ん……」

呟いて、胸のポケットをまさぐつた。悪癖だ。しかし、ない。そうして気付いた。煙草は止めたのだ。1・5倍近く価格の上がつた

時に、愛国心よりエンゲル係数を取つた。そこまで高額納税者を気取る必要はない。けれど、こんな時は体が何かを要求する……。そんなちつちつな世界での葛藤を繰り広げていた時、トオルの頭をちらりと過るモノがあった。

自転車。そうだ、その手が……！

「ねえ、キミ！ 自転車の後ろ、乗れる？」

トオルは少女の方を見て、言った。彼の自転車は、いわゆるママチャリだが、荷台のついていないタイプだった。つまり、一人乗りするには後ろのタイヤ横のフレームに足をかけて、立ち乗りしなければならない。女の子には難しいだらうか？

しかし、彼女は首を縦に振った。

「ほんとっ？ ジャあツ！！」

トオルは二コチンの助力を借りずにこの事態を解決することができそうだと、なんだか意氣揚々としてきた。

再び走りだした、自転車。最初は、ゆっくりとした安全運転。それでも人も車もない深夜のサー・キットなら、ストレス・フリーでぐんぐんと疾走することができる。いつも走るこの道が同じ景色の違う世界みたいに感じる。ファンタジー的な言い方だけれど、表と裏の世界の裏側の、自分達一人しかいない場所にいるみたいな非現実的な気分。トオルは何だかちょっと気分が高揚していたらしい。深夜の街を我が物顔で走るからか、いつもよりも遅くまで起きていることで顔を出したアドレナリンの仕業か、……それとも背中から

漂う、ほんのり甘い少女の香りのせいか。

目の前に丁字路が迫ってきた。

「ねえ、どつちつ！？」

トオルが背中に向かって叫ぶ。

「左っ！！」

少女が左手のひとさし指をかかげて答えた。

「了解！！」

キヤプテンの指示に従い、舵をきるトオル。水無月の夜の空気をいっぱいに浴びて。しつとりとした風に撫でられて。二人は街を走り抜けた。人気のないトンネルを、莊厳な雰囲気の神社の脇を、誰もいないコンビニの前を、静まり返った踏切を、走り抜けた。

「ねえっ！」

首をちょっとだけ傾けて、トオルは少女に声をかけた。

「何っ！？」

「名前っ！」

「えっ？」

「名前！　何ていうのっ！？」

風に遮られて聞き取り辛いせいで、一人の会話は短い単語を大きな声でキャッチボールしているみたいだった。少女はちょっと黙っていたが、トオルの頭の上で何かをもごもごと言った。けれど、彼にはそんなこと聞こえなくて、もう一度大声をはる。

「ねえっ、名前っ！！」

「もうっ、……美純！……四方美純っ！……」

ちょっと不満そうに言つて、ムスッとした顔をする、美純。それを横目に見て満足そうな顔をすると、トオルは自分も名乗りを上げた。

「俺は、廣瀬トオル！『トオル』はカタカナッ！」

「何それっ！変なのっ！オジサンみたい！」

ツンとした表情の美純は、腹いせみたいにちょっと強い口調で言う。するとトオルは、何故か突然急ブレーキをかける。

「わっ！？」

美純はビックリして大きな声を出してしまった。

急停止する自転車。勢いで美純の体はトオルの背中に突つ伏してしまった。

「ちょっと、あぶな……？！」

「……オジサンでも、何でも。キミが覚えてくれるなら、それでいいや」

トオルは彼女の顔を下からじっと見つめて言つた。ちょっとしたジョークのつもりで言つた。けれど、美純はハツと息を飲んだ。突つ伏して彼の背中に抱きつくみたいな格好になつていておかげで、ビックリするくらい近くにあるトオルの顔。ちょっと細い、人の良さそうな目。すっと通つた鼻筋。優しそうな口元。ちょっとこけた頬。

美純は急に恥しくなつて、彼の背中を思い切り押し返す！

「何ソレ、ばつかじやないつ！！ 言い返しなさいよ、オジサンなんて言われてるんだからっ！」

「はははっ。実際、おじさんだからねえ。……いつも見えて34だし」「さ、34つ！？ 私の倍じやないつ！？ それじゃ、『オジサン』通り越して“オジイサン”だわっ！…」

くつくつ、と笑いながら、トオルは再び自転車を走らせ始めた。

「いいよ、何でも。美純の好きに呼んでくれて」

そう言つてトオルはスピードを上げる。美純は答えなかつた。彼女の頭の中は、他のことで一杯になつてしまつていた。頬をちょっと紅く染めて、辻闇にも高鳴つてしまつた自分の心臓の音が、背中越しの彼に気付かれていなか気になつてしまつていた。

彼女の家に到着すると、トオルは第一声が「おーっ！」だつた。立派な門。そこから玄関までの長い距離。暗くてよくは見えないけれど、隣、近所の1・5倍くらいはありそうな建物のシルエット。

言葉通りの豪邸に、しかし娘の帰宅をいまかと待つ温度は感じられなかつた。

「……ご両親は？」

「今日は仕事だから、居ないんです。そ、それに姉が一人いますが、き、き、今日は仕事へ」

急に他人行儀な喋り方に戻そつとする美純に、トオルはまたちょつと笑つてしまつた。

「くくく。ほんと面白い娘だよね、美純は。どうしたの？ 使えないなら、敬語なんか使わなければいいのに……」

そう言われて美純は顔を赤くする。

「ち、ちょっと、あなたつてほんと失礼な人ね！ 折角、お礼を言おうと思つてたのに、そんなんじゃ、感謝する気も失せるじゃないつ……」と、怒鳴りつけてくる。

「……別に。礼なんて言われるほどのこともしてないし」

そういつて、トオルは踵を返そつとする。

「無事に送り届けたし。……じゃあ、行くよ」

「あつ……！」

トオルは彼女の顔を見つめ返した。美純はまだ何かを言い足りなそうな顔をしてトオルと、それから組んでモジモジとした自分の手を交互に見返していた。その美純の表情を、トオルはじつと覗きこむ。

しばらくは、待つた。彼女の決意が言葉になるには時間がかかつた。

「あつ、あのつ……！」

切り出した美純の言葉を、トオルの言葉が遮る。

「あのせ、『カーサ・エム』ってイタリア料理店にいるから。じゃ、またね」

そうしてトオルは美純と別れた。

多分もう会うことはないと思ったけれど、トオルは彼女に敢えて

サヨナラとは言わなかつた。それはなんだか違つような気がしたのだ。トオルはまた自転車をこぎ出した。空は次第に明るんできて、トオルはちょっとだけ難しい顔をしていた。色々あつた夜だつた。けれど夜は明け、新しい一日はもう始まり出していた。

全身、傷だらけ。襲つてきた眠氣に頭はふらふら。

さて、どうしたものか。トオルはまたニコチンの助けがほしくなるのだった。

The rain came down .she came up to me

キャプテン・○ーロックか○ラック・ジャックか。

頬にビツて走る傷跡。

あの時、美純が見てびっくりしていたのはこれが、ヒトオルは納得した。鏡に映る自分の顔を覗き込んで、触つてみる。右目の下あたりから頬に向かつて擦り切れた傷跡は、血が渴いて赤黒い色になつて残っていた。正直、かなり目立つた。

昨日の夜（今日の朝？）は家に着くなり、早々に寝てしまった。朝は慌ただしくシャワーだけ浴び、家を飛び出した。朝食は週に三度はお世話になる某ハンバーガーショップで朝のセットを購入する。いつもの店員さんがカウンター越しに『おはよつじています』と声をかけてくれる。トオルも『おはよつ』と返す。週に何回か、同じ時間に何年も通り続ければ、いくらマーニュアル重視のチエーン店だって『いらっしゃいませ』の後が『今日は何になりますか？』から『いつものでよろしいですか？』に変わるくらいの関係にはなるものだ。それは確かに、あくまでカウンターを挟んでの『店員と客』というシチュエーション限定の間柄であつて、もし道端でばつたり会つた時にはむしろ気まずくなつてしまつ程度の希薄な関係性なのだが、まあそんな二人の間は、けれど今朝に限つて妙によそよそしい空氣だつた。その時初めてトオルは、自分の顔の違和感に気が付いた。

（俺の顔に何か付いてるか？）

言つべきか、言わざるべきか。片一方だけが発する独特の緊張感

……。

笑つてやつた方がいいのか、触らないのが吉なのか。踏み込むときは『ギャンブル覚悟』の危ない橋。

『奥様、最近またお綺麗になられた気がいたしますが、……』

『あら、そう？……きっと、旦那と別れて一人になつたからよ』

過去の苦い経験。まあこれは初期設定が今回とは異なるので例えにはならないか。

……何か、どころではない。

この歳になれば勲章でも何でもない。これではただの恥ずかしい中年男子だ。

そして、そんな傷跡を見て高らかに笑う男がいる。

「はははっ！　お前、それはないだろ！？　なあ、自分の顔、見たか？　はははっ！！」

まったく遠慮なしな笑いが、オープン前の店内に高らかに響き渡る。肩と白髪交じりの頭を一緒になつて派手に揺らし、トオルに向かって指を差す。

カウンターに腰かけて煙草をふかしながらバンバンと膝を手で打ち大笑いする男、平井哲平。42歳。この『カーサ・エム』のオーナー。つまりトオルの上司である。

「今どきの30歳は、チャリをぶつ飛ばしてこけるもんなのかよ？」

「哲さん、俺、34ツす……」

「はははっ、だからなんだよ！？　弁解にもなつてねーぞ」「まあ、おっしゃる通りなんですけどね……」

煙草をくゆらせて、まだ「くつくつ」と笑いを洩らす哲平を、トオルはちよつと恨めしそうに見る。実際、彼が恨めしいのはいつまでも顔の傷を笑う大人気ない上司の方ではなく、煙草の方。哲平はトオルが禁煙することにしたのを聞くと「そつか、今日からお前も敵か」なんて言って、それからちよつとも遠慮するどころか、盛

大に目の前で吸うようになった。『カーサ・エム』は普段は完全禁煙の店なのだが、オープン前のこの時間、哲平だけは治外法権だつた。そのせいでトオルはほぼ毎日鬱々とした気分で営業を始めることがになるのだ。哲平にしてみたら、気に言つた人間にちょっと悪戯をする程度のある種『愛情表現』のつもりのようで、だからこそ尚性質が悪いのだが、トオルにはどうすることも出来ないので諦めていた。とはいえ、哲平のそんな子供みたいなところがトオルは嫌いではなかつた。

哲平はしばらく煙草とトオルの傷、出されたエスプレッソを満喫してから、最後の一服を吸い終えると「それで……」と来週末に予定していた宝石店とのコラボ・イベントの話を始めた。

土曜の夜、店内を貸し切つて行う予定のイベント。『カーサ・エム』の店内全部をつかつて、宝石・アクセサリーの販売会、購入者には宝石店側からという名目で『カーサ・エム』の料理が振る舞われる このイベントは、今回で5回目の開催を迎える。

きっかけは、哲平が彼の友人のアクセサリーショップオーナーに話を持ちかけたことから始まつた。第一回目が大好評、だつたおかげでふた月に一辺のペースで定期的に行われるようになつたのだ。派手な買い物をして満足げな顧客が、シャンパンを傾け豪華な食事で愉悦に浸る……やりたくてもそれに応える環境のないこの『都会じやない街』では、二一ズはあつても実現できなかつたこと。その二一ズを見抜き、形にする。簡単なようで第一歩を踏み出すのはとても難しかつただろうことを、哲平は見事にやってのけた。

トオルの料理とサービスを使って、顧客の満足を充実させる。顧客が「また……」となれば、次のイベントを企画する。それに顧客はイベントとは別に『カーサ・エム』を利用するものもいた。今では、大切な常連客の一人だ。

『Win & Win』の関係が、出来上がる。

哲平の本業は運送業の社長だ。『カーサ・エム』は彼が知人から譲り受けたもので、副業的なものだった。けれど、彼の発想は畠違いの業界に対し独創的且つ理にかなっていて、……おかげで『カーサ・エム』の経営は順調だつた。トオルは、そんな哲平の優れた経営眼に憧れに近い感情を持つていた。彼の下で6年。今も彼の下で働き続いているのは、そんな哲平という人間の魅力によるところが非常に大きかった。

ランチタイムが始まる頃になると、哲平はいつものように出かけてしまった。

トオルは彼が残していった痕跡<sup>タバコの臭い</sup>を消すため、消臭スプレーを撒き、ニンニクを焦がし、そして自分用のエスプレッソ・コーヒーを炊くポットを火に掛け、『偽の』香り付けをする。そうすると複数の香りが入り交じつた、妙に落ち着かない臭いが出来上がる。入口の扉を開放し、換気扇を“強”で回して、それで今朝の証拠の隠滅は完了する。

ポコポコと、コーヒーが沸く音が仕出す。

彼がエスプレッソ・コーヒーを入れるために使っているのは直火型のコーヒーポットで、大きく分けると三つのパートに分かれた造り。下部のタンクのような部分に水を入れ、その上にフィルター状の部品がついた漏斗<sup>じょとう</sup>を取り付け、コーヒー豆を挽いたものをそこに入れ。上部にもう一つの部品を取り付け、ちょうど上下の部品で豆の入った漏斗をはさむようにセットする。そして火に掛ける。

上部のパートは金属製の蓋の付いたマグカップのような作りで、カップの底部にある部分の中心から天井に向けて、ニョキッと柱のような部品が突き出している。下部の水が加熱され水蒸気となつて、漏斗を、コーヒー豆の層を通り、最後は柱の中を登つてくる。柱の先端には幾つか小さな穴が空いていて、そこから吹き出してくる水蒸気が、焦げ茶色の香り立つ『エスプレッソ・コーヒー』である。

ポコポコと音がするのは、その穴から水蒸気が吹き出す際にそういう音がするのだ。

「ポコポコ、ポコポコ。」  
割と「ミカルな音だ。

ポット 자체は機能重視の案外素ついたデザインなだけに、聞こえてくる音が尚更滑稽に思える。

そして出来上がりの合図。ポコポコ音が聞こえなくて、シューっと空気の抜けるような音に変われば完成だ。

トオルは出来立てのコーヒーをカップに注ぎ、飲む。  
習慣のように毎朝飲むこのコ・ニーが、彼にとってのスタートライ  
ンだ。「ごく稀にだが、この神聖な儀式を邪魔する早起きの客がいて、  
そういう日はなんだか全部が上手くいかなくなる。まあ、何にしろ  
最初が肝心、である。仕事も、遊びも、……出会いも。なんでもそ  
うなんじやないかと、トオルは思う。

朝の天氣予報は見てこなかつたから、毎週<sup>まい</sup>に降り出した雨はちよつと驚きだつた。

出がけは晴天だつたし、今の今までもそんな気配はなかつた。オーダーをひと皿作つて、使つた鍋を洗つて、それで気がついた。『ザアーザアー』と雨足はかなり強い。

出されたパスタを食べながら、「あら、もう降つてきやつた」と呟く女性客。

どうやらこの雨は確定的な未来だつたらしい。侮るなれ、天氣予報。まあ、見てもいなイトオルに侮る権利はないが。

飲食店　だけに限つたことではないのだろうが　は、雨にすこぶる弱い。

『通り雨に喫茶店』のような一時避難の場合はともかく、もともと降るといわれた雨は人間の行動を抑制するらしい。そうが、だから今日はこんなに暇なのか、ヒトオルは命点がいつた。いつもだつたら賑わうこの時間帯、今日は満席にならなかつた。窓から見える往来の人影も、そう思つて見るとずいぶんとまばらな気がした。

トオルはキッチンから出ると、店の出入口の側に立てかけてある看板類を雨に当たらないように屋根の下に避難させる。ほとんどは耐水性の素材やペンで書かれた物なので問題はないのだが、『今日のラ.....イ.....パゲ.....イ~』毎朝チョークで書き換える黒板だけはひどい有様だつた。書き直すにしても雨を吸つてビショビショに濡れた黒板はしばらくどうにもならないだろう。トオルは黒板を店内に取り込むと、キッチンに戻りコーヒーの準備をする。ちょうどパスタを食べ終わつた客の前に空いた皿と入れ替わりにコーヒーを差し出す。

「デザートは、……召し上がります？」

「うーん。この雨だし、今日は止めておきます」

「です、ね」

そうして今日のランチタイムは営業時間半ばにして、開店休業となつてしまつ。コーヒーをすすつていた客も、雨足が弱まつたのを見つけるとそそくさと帰つてしまつ。

店内は誰も居なくなつてしまつたおかげで、静寂に包まる。あとには雨音と、トオルが洗い物をする力チャカチャという音が残るのみとなつた。

あれからひと組みの客も来ないまま、ランチタイムはクローズとなつてしまつた。

割と早い時間から誰もいない状態だったので、片付けやら仕込みやらも渉り、トオルは手持ち無沙汰だつた。こんな日は自分用の食事も作る気にならない。元々トオル一人でやつている店だから、よくいつ『まかない飯』なんてモノもここには存在しない。食べたければあるものを食べるし、そうでなければ何もしない。

トオルはエスプレッソをすすつた。

これもずいぶん前に入れたものだったので、今やぬるいを通り越した冷たい液体だ。かといって新しいコーヒーを炊く氣にもならない。トオルは仕方なく一度深呼吸をした。店内の空気を味わつた。

……雨は、氣だるい。

仕方のないことだけれど、雨は氣だるく、憂鬱だ。人間を能動的でなく受動的にさせる。

黒板は書き直されることなく、入口の横に立てかけてあつた。自分がやらなければ何も変わらないのは分かつているのだけれど、誰かが書き直してくれないかな・・などと淡い期待をする。

ディナータイムまでは、まだかなり時間があった。

トオルは客席の椅子に深く座り込むと、窓の外を眺めた。

今だ強い雨足。

もう一度深呼吸をすると、目を閉じた。ちよつと早めの、長くて深い休憩を取ることにする。

最初、意識の底で何かを感じたような気がして、目が覚めた……。  
それが何なのかわからなかつたが、すぐに気が付いた。

トン、トン、トン、……。

何かを叩く音がする。

振り返ると、入口の扉を叩く音がした。

トン、トン、トン、……。

はて、業者だらうか、ヒトオルは不思議に思ひ。届く予定の品はない。それとも、何かの営業だらうか？

トオルはゆっくりと体を起こすと、扉に向かつ。

かかつていた鍵を外し、扉を開けてやつた。

「はい？」

そこには、昨夜の彼女が

美純が立っていた……。

# The rain came down .she came up to me

外は傘を指しても尚、土砂降りの雨だった。

そんな中、扉の前に佇んでいた美純は制服の肩をうつすらと濡らしていた。

彼女の顔は、ちょっとと思い詰めたような表情に見えた。まるで、外の雨模様をそのまま持ってきたように、薄く暗く傘を指しているようだ。

「どうしたの？……は、いいか。まずは入りなよ。そんなところにいたら風邪引く」

室内を促すトオルに、一瞬躊躇する美純。

扉を押し開けたままの体勢のトオルは、「ん、ほり」と首を振つてさらには促した。

美純は黙つて俯いていた。彼女の後ろ、車道ではバシャバシャと派手な音を立てて、車が水を掻きわけ走つて行つた。

道行く人は、誰もいなかつた。雨は、ただただ地面を叩く。

「……美純っ」

トオルは昨日初めて会つたばかりの少女の名前を呼んだ。ぴくり、と彼女は肩を震わせた。そしてやつとトオルの顔を見上げる……。

目が、合ひて気が付いた。

美純の顔は、なんだか戸惑いと決意が入り交じつたような複雑な表情をしていた。

彼女はまだ室内に入るのを躊躇つていた。拒んでいるかのようだつた。じつと、トオルを見据える田は、けれど今にも逃げ出してしま

いそうな怯えた目に見えた。

しかし彼の目は、表情は、「おいで……」と言つ。その目が告げる意思からなのか、美純から自然と後ろへ向いた気持ちが消えていく……。

何故だらうか？彼女にとつてトオルの『その目』は、突き返すことのできない強制力のようであつて。

それでとうとう美純は一步、また一步と『カーサ・エム』の店内へ足を踏み入れる。見届けたトオルは、扉を閉めると手近にあつた椅子を引き寄せ、美純に進めた。立つたまま、なかなか座らないでいる彼女に「美純……」言つと、美純は大人しく従つてチヨコンと椅子に座り込んだ。

トオルは一度キッチンに入るとやかんを火にかけて、それからまた店内に戻つてきた。カウンターの下をゴソゴソと探し、タオル一枚取り出した。それを美純に手渡した。美純は自分の手に収まつたその一枚をぼんやりと眺めていた。

「やれやれ……」

トオルは、彼女の手からタオルを奪い取ると、それを広げて美純の肩に押し当てた。じつとりと湿氣を帯びる布。濡れた肩と、その周辺、うなじ、となぞり、そして今度は背中に流れる彼女の髪に這わせた。つややかな黒髪は水に濡れて、とても艶やかに見えた。綺麗に手入れされた美しい髪だつた。

「　　、はい」

ひとしきり世話してやると「あとは……」と、無造作に丸めたタオルを再び彼女の掌に押し込める。

そしてトオルは再びキッチンの中へと戻つてしまつ。

「あつ……」

美純は小さく口を開いた。けれど出てきたのは、ほんの小さな音だ

けだった。そしてそれはトオルには届かなかった。

美純はまた、自分の手に収まつたタオルに目をやつた。  
ぼんやりと眺めた……。

「ねえ。『一ヒー、飲める?』

キツチンから顔だけ出したトオルが、美純に尋ねる。

「……?」

「飲めるよね? 飲める、飲める……」

ひとり「じ」ちに言つて勝手に納得するトオル。その顔は美純の返事を待たず、またキツチンへと引っ込んでしまつた。しばらくすると、室内には香ばしい薫りが漂い始めた。

穏やかで、温かな薫りだった。

力チャ力チャと何かが重なるよつな音が聞こえてくる。

コポコポと注ぐ音が聞こえ、しばらく静寂を挟んだあと、またコポコポと始まる……。

その音をぼんやりと聞いていた美純は、ふと『ホツとした』ような気持ちになつてゐるのに気が付いた。穏やかで、温かな薫りが彼女の胸で詰まつていたものをほぐしてくれるよつな気がした。

自分のなかのモヤモヤとしたわだかまりを解決するために、と決心して彼女はここに来た。……来たものの、一体どうやってそれを伝えればいいのかもよく解つておらず。その上、雨は益々強まるばかりで。考えても、考えても、言葉は出でこなくて。外は寒いし、考えはまともないし、……につらもさつちもいかなくなつて、なん

で自分はここに来てしまったんだろ？』と、今になつて『とりあえず動き出してから考える自分の性格』を悔やんでみて。だけどここまで来たんだからちやんと言つたほうがいいわ、と再び決心して。……それでどうと、扉を叩いてしまった。

それからは何だかよく覚えていない。

トルの顔を見たら、あの、頬に付いた傷を見たら　また、どうしたらいいか分からなくなつてしまつた。

私、謝りに来たはずなのに。

自分のなかのモヤモヤはいつの間にかトゲトゲになつて、そして彼女の胸を引っ搔いた。

痛みで言葉も出なかつた。

目も合わせられなくなつた。

体が動かなくなつた。

後悔で、いっぱいになつた。

私が、あんなことをしなければ……

胸の奥のトゲトゲが、じつくりと彼女を引っ搔いて傷を付けた。

けれど、あの香ばしい薰り……。

あの穏やかで温かな薰りが、少しだけ傷を癒してくれるように美純

の体に染み込んだ。  
優しく、染み込んできた……。

# The rain came down .she came up to me

しばらくして、トオルがキッチンから出てきた。両手に一つずつカップを持っていた。片方はマグカップで、外側が赤一色の「デザイン」だった。長く使っているのだろう、所々削れて下地の白いのが見えてしまっていた。

もう一方は客用だろうか、白地に青いラインが入ったシンプルなデザインのカップだった。こちらはきちんとソーサーに載せられていた。その白と青の「デザイン」のカップの方が、美純の目の前のテーブルの上に置かれる。

「ミルクは？」

訊かれて、彼女は「うん……」と答えた。

トオルはちょっと微笑むと、「待つて」と一言囁いてもう一度キツチンに下がつて行つた。

しばらく静まりかえつていたが、『ピピピピ、ピピピピ、』と聞き覚えのある音が聞こえて、それからトオルが片手にミルクピッチャーを持つて出でてきた。

「はい」

「…………ありがとう。…………」「ありがとうございます」

美純は先程から漂つコーヒーの薫りにすっかり気が緩んでしまったのか、ちょっと砕けてお礼をしてしまった。慌てて付け足した。

トオルはそんな彼女の様子を眺めながら近くの椅子を引き寄せ、掛けると、自分のカップを傾けた。

いたての熱いコーヒーがゅっくりと口に流れ込む。薫りが鼻腔を通つて頭の芯まで廻つていぐ。心地よい苦味とほのかな酸味が舌の上に広がる……。

「…………」

急にトオルは声を漏らし始めた。最初は控えめだったが、そのうち遠慮なく笑い始めた。

「ははは、はッ。……くくく」

しばらく笑っていたが、やがて美純の視線に気が付いたか、やや笑いを押し殺す。それでもしばらくは苦しそうに肩を揺らしていた。美純は怪訝な顔でそんなトオルをのぞき込んでいた。

一体、何が可笑しかったのだろう?と思つたが、ふと気が付いた。

もしかして、……さつきの?

そうしてもう一度トオルをのぞき込む。ちょっと睨みつけてやると、とうとう彼は顔の前で掌をあわせて『ゴメンね』のポーズをした。  
「ちょっと、何よッ!! そんなに笑つほどこのことじゃないでしょ!  
!?」

美純はムツとして言つた。

手にしたコーヒーカップをテーブルに戻し、トオルを見やる。ようやく発作が落ち着いたのか、彼は右手をヒラヒラさせて答えた。  
「いやまあ、そななんだろうけれど……。なんかさ、俺、好きなんだよね。一所懸命なのに全然上手くいかないのとか、さ」  
その言いぐさに、美純はカツとなつてしまつた!

「あなたやつぱり失礼よつ! 人のこと、見下してッ……」  
立ち上がり、身を乗り出して。些細なことを突つついて、男のくせに嫌なヤツ! -

「……まるで自分のこと見てるよつで。なんだか、滑稽で……」

「……つ!?

「ゴメンね。気を悪くさせちゃつたね。謝るよ」

トオルは視線を自分のカップに落とすと、ポツリ呟くよつと言つた。美純も何となく言い返せなくなつて、もう一度座り直した。

しばらく2人の間に会話はなかつた。

店内は静まり返つていて、時折『ブウン……』と冷蔵庫の低い稼動音が響くだけだつた。

窓の外の雨は、止みそうにない。雨足は尚強くなる一方で。けれど、そんな雨の音などかき消すくらいの沈黙が、トオルと美純の間を流れていた。

トオルは自分のカップをのぞき込んだ。中身はもう空っぽだつた。新しいコーヒーを入れようと立ち上がろうとする。けれど、それを遮るかのように美純の声がした。

「あなたの……」

「うん？」

聞き取れないくらいの小さな声だつた。トオルは何気なく聞き返す。「あなたのそういうところ、私、嫌い……。そこまで笑うことないでしょ？ 私がどんなに一所懸命か考えたこと、ある？ ……いやな人」

美純は最初は俯いていて、しかし話し始めるとトオルのことをじつと見つめながら言つた。

トオルは顔を上げ、美純の方を見やつた。室内が薄暗いからか彼女の顔には影がかかっていて、いつたいどんな表情をしているのかトオルにはわからなかつた。

トオルは立ち上がりかけたままだつたのを座り直した。そしてゆつくりと、また視線を床に落とす。

フローリングの床のつなぎ目とのじりを、目でなぞつてみると、落ちていたメモ紙の切れ端に視線がぶつかって、止まる。

「ああ、そう。……悪いね、イヤなヤツで」

ポツリ、と呟く。

彼の俯いた顔には嘲るような小さな笑みがうつっていゝ、美純には見えた。

美純はじつとトオルのことを見つめていた。彼の一挙手一投足、全部を見ていた。そうしないとこの男のことはわからない気がしたのだ。何か、掴みどころのない雰囲気があったのだ。

『いやな人……』なんて、会つて一回田の人間に随分なことを言つてしまつたな、 そう思つたのは、その言葉が口から出でていったすぐあとにだつた。

……彼はきっと怒るだらう。そう思つて、本心はちょっとビクビクしていた。だから今、彼の顔に笑みのようなものがうつついて、それがむしろ胸の中をゾワゾワさせた。不気味なモノを見たような気がした。緊張から唾を飲み込んだら、自分でもびっくりするぐらい『ゴクリッ』つて音が響いた。

それでも、美純はトオルから目を離さなかつた。……離せなかつた。彼が、ほんの少し深く息を付くのがわかつた。

「……で？」  
「エッ！？」

出てきた言葉の意味を理解することができずに、美純は口籠つてしまつ。

田を白黒させてトオルを見た。すると、トオルは彼女が自分の言葉を理解できなかつたのを察して、言葉を足した。

「で、今日来たのはそれを言つため……だつたのかな？」

あつ

「い、いいえつ！ キョ、ちがッ、……今日来たのはツ！ あ、あ  
のつ」

動搖してしまって、彼女は言葉が上手く出てこなくなってしまった。  
あたふたとして立ち上がって、『ガシャ』とお尻をテーブルの角に  
ぶつけた。

ちょっと涙目になつて、でも声を出せないよう美純は下唇を噛んで耐えている。

その様子を、トオルはポカンと眺める……。

「きょ、今日は、その……えつと……」

さっきまでの強気な口調の彼女はどこかへ行つてしまつて、大慌てで言葉を探す美純は『あつ』とか『えつ』とかしか言えなくて。だから『彼女の口からやつとまともな言葉が飛び出してきた』と思つたのに、それがまた滑稽な感じだったから、どうにも悪いとは思つたけれどやつぱりトオルは笑つてしまつたのだった。

「ハ、ハ、ハめんなしゃひつー！」

「ふつ。……あつ

トオルの口から思わず笑いが漏れる。そして、今度は彼も『しまつた』と思つた。

すぐに美純の顔を見た。

「あー、ごめん……」

トオルは言う。けれど、美純は答えなかつた。

彼女は唇のはしを噛んで、こぼれそうな言葉を必死で堪えていた。瞳は一杯の涙をため込んで、うるうるとしていた。精一杯堪えた目元は、しかし程なく限界を迎えた。決壊したダムのように、一度溢れ出すともうあとはとめどなく流れのばかりで……。

「キライッ！ もう、大っキライッ！！」

わーん、と美純は泣きじやくつた。堪えていたものが全部出てつたみたいに、彼女はあけっぴろげに泣きじやくつた。

ぐしつ、と。

静まり返つた『カーサ・エム』の店内に、小さく鼻を啜る音が響く。ようやつと落ち着きを取り戻した美純。目尻を真っ赤に張らせて。たつぱり泣いたせいか、長い髪は乱れて、ちょっと憔悴した顔をしていた。

「ぐしつ」

「はい……」

「…………ありがとう」

美純はトオルに渡されたティッシュペーパーで鼻をかんだ。

彼女、たっぷり10分は泣きわめいていたろうか。トオルはその間、どうにもバツの悪い気持ちで、けれど一体何をしてやればいいのかも分からなかつたので椅子に浅く腰掛てじつとしていた。美純は本当によく泣いた。わーん、わーん、と、まるで小さい子供みたいにいっぱい声を上げて泣いていた。外が雨でなかつたら、きっと店の外にまで漏れただらうくらいの大声だつた。

「ごめん。悪気はなかつたんだけど……本当に、ごめん」

トオルは今度は素直に謝つた。さすがに彼も反省した様子だつた。美純は何となく目をトオルに向けた。その目は彼のことを捉えているようにも、そうでないようにも見えた。彼女は表情を作る元気もなかつたのだが、唇だけはさつきのトオルの仕打ちを覚えてるみたいに、ちょっと拗ねて突き出していた。

「 もう、いいです。なんか、いっぱい泣いたから。……ちょっと、スッキリしちゃいました」

そう言つて、美純はトオルが新しく用意してくれたミルクのたっぷり入つたコーヒーをズズッとするのだつた。ミルクの甘みとコーヒーのほのかな苦味がとてもバランス良く混ざり合つた、今の美純にとつてはとても優しい味わいの飲み物だつた。胸に、体に、みるみる染み渡つていくのがわかつた。

トオルも自分用に用意したブラックコーヒーに口を付けた。彼女のカフェ・オレ用に濃いめに入れたそのコーヒーは、ストレートで飲むにはちょっとビターな味わいだつた。トオルの胸にチクチクと刺さる苦みだつた。10代の女の子を、どういう理由であれこんなにも泣かせてしまつた、だいぶ後ろめたい味わいだつた。

美純は、乱れた髪を簡単に手ぐしで整える。

そして一度座り直すと、真っ直ぐにトオルに向き直つた。

目はまだ真つ赤に腫れたままだつたが、表情には張りが戻つていた。

「どうより、決意が見えた。

唇に、一度力が籠つて……それが一旦躊躇したが、またもう一度力が籠つた。

腫れぼつたい目の奥からトオルに向けて発せられる意思に、トオルもまた美純を真つ直ぐ見据える。

「あの……」

先に美純の口が動き出した。

「うん？」

「今日は、……謝りに来ました。『ごめんなさい』

「あー、うん。……で、何を？」

「何を、つて？！……だから、昨日のことです」

美純は、ちょっとだけ不満そうな顔をして続けた。

「……昨日は『迷惑おかげしました。ゴメンナサイ』

「ううん、別に迷惑だとは思つてないけれど。まあ、……はい。わかりました」

「えっ！？ 怒つたり、問い合わせたりとか……ないんですか？」

「あー、別に。何で？」

今度は怪訝な顔をする、美純。

「だつて、私……昨日、私、あなたの自転車の前に飛び出して……。それであなたは、そんなに怪我をして……」

「ん、コレ？……くくく、今朝からオーナーに大笑いされたよ。

『ハクを付ける歳でもないだろ？』ってね。人をジジイみたいに言つて……」

トオルは思い出して、苦笑いした。今朝、哲平が座つていたカウンターをちらつと眺めた。

美純は申し訳なさそうな顔になつた。

それを見てトオルは小さく首を振つた。「いいよ、気にしてない……」

「彼は呟いた。

「……」

トオルの言葉を最後に、しばらく沈黙が続いた。

時折、彼がする「コーヒーの音が店の中によく響いた。

トオルは、壁に掛かる時計を見た。時刻はもうすぐ16：00を回る。さて、そろそろ夜の準備を始めようか、とトオルは立ち上がりかける。

すると、美純が「ゴソゴソ」と鞄の中をあさつて、それから一枚の紙を取り出してきた。彼女の前のテーブルに、それを置いた。

トオルは、ふとその紙をのぞき込んだ。A4サイズの紙には、真ん中に大きく枠でスペースがとつてあって、そこに何かを書き込むものようだった。枠の上下に小さな字で説明書きがしてあった。そして一番上には、見出しのようにちょっと大きなフォントでこう書かれていた……

「“進路希望調査書”。提出は早めに……」

トオルはなぜ今これが登場したのか、訝然としない顔をした。

そんな彼の様子に美純はまったく気付かず、けれど彼女の表情は何か思いつめているようだった。それはさつき、扉の前に立つていた時の彼女の表情とまったく同じものだった。

思いつめた とこう言葉が、まさにペッタリの表情。

そして、思いつめるにはだいぶ役不足な一枚の紙切れ。

この一つの共通点を、トオルは見出せないでいた。と、いつか何故、今、  
「進路希望調査書」?

「『提出は早めに』……だね」

「ええ。提出期限は一週間近く前だつたんですけれど……」

「……何時?」

「5月の……ゴールデン・ウイーク明け……」

「一ヶ月前……じゃないか?」

「……」

美純は一度何か言おうとして、けれど黙ってしまう。

彼女の視線はその紙切れ一点だけを見つめて、動かなくなつた。

そして椅子に座つたまま、じつと身動きもしなくなつた。

トオルはきっと彼女の方から何か言つてくるのだろうと思つていたので、もう一度椅子に座り直して彼女がしゃべり出すのを待つことにした。

じつとして、待つた 。

そして、5分経つた。

二人は互いに一言もしゃべらないまま、妙な緊張感だけ残して時間は過ぎた。

飲みかけのコーヒーはとうとう空になつた。

これ以上待つ理由はないよな、とトオルは思つた。会つてたつたの一回。ちょっとした話題を楽しむくらいの仲になつても、複雑怪奇な謎をかけたり解いたりする間柄ではないはずだ。

トオルは立ち上がつた。

「さて、つと……

こんな天気でも来てくれる客がいるかもしれない。きちんとした準備を整えて置かなければ……。

「あ、あのつ……！」

不意に美純が叫んだ。

立ち上がりかけるトオルの顔を見上げ、彼女は精一杯の決意で言った。

「しょ、将来つて、進路つてどうやって決めたらいいんですかっ！？」

ぴくつ、とトオルの肩は揺れた。

（これって、笑つていいのかよ……？）

一体この娘は、どれだけ自分の笑いのツボを刺激すれば気がすむのだろう？ そのクセ、笑えば怒るし泣くし……。なんだかトオルはちょっととイラつとした。

「わ、私……やりたいこととか言われても特にないし、成りたいものなんて見付からないし……で、でも、クラスの子達はみんなちやんとそういうのがあってつ！ それに進学する子がほとんどだから『〇〇大学　科』とか書けて……。私、そんなのも決まらないから、先生に『君は一体何がしたいんだね』って言われて……。わかりませんつて言つたら、ママが学校に呼ばれて……」

真剣、なんだろうというのはわかる。けれど、真剣だから腹が立つこともあるだろう？ 大体、俺は進路相談員が何かか？！

トオルは、この何だかよくわからない事態にだんだんイライラがつのってきた。

（こういうタイプの女なんて大概、言いたいことだけ言つて、そのくせ自分じゃ大したことはしないだろう？！ おまけに女子高生、もつと面倒臭いじゃないか！？ イヤな奴だ嫌いだ言つた拳句、泣いたり怒つたり、最後は『私、どうしたらいいですか？』かよつ！ ? 何のドッキリだつ！ まったく……面倒臭い！…）

トオルは今にも立ち上がりたい衝動を何とか抑えて、彼女のしゃべり終わりから一呼吸だけ置いて、話し出した。

「そんなもの、適当に書いて出したやいいんじゃないのか？君の担任だって、そうしてくれって言つてんだろ？だけど、君がいつこをきかないから、面倒にも親を呼びつけなくちゃならなくなるだよ……」

「そんなん！…………そんないと、私、言われてなんか……」

「純粹ぶるのはどうなんだ!? それとも本当に純粹培養の馬鹿なのか？俺は、何でこんなことを聞かされなきゃならない？君は、俺に何をしたくてここに来たんだつ！！」

「わ、…………私、…………そんな、…………ただ、謝りたくて…………」

とうとうトオルの怒りは沸点にたどり着いてしまった。大人気ないとかそんなこと、もうどうでもいいつ！！  
「だつたらもう、済んだだらうッ！…………いいからさつと出でつてくれ！…………君は毎日楽しく適当に学生生活を楽しんでいるんだろ？が、俺は今、仕事中なんだ！！」

「て、適当つて…………、そんな言い方…………私…………」

泣くかな、とトオルは思った。けれど、もうどうでもよかつた。ともかく早く出ていって欲しかった。ひどい言い方をして、嫌われたかもしけないけれど、だからなんだ？…………第一、なんでこんな女子高生が俺と関わりを持つ必要があるんだ？少なくとも、俺の方にそんな用はないぞ？

トオルはまったく理由がわからずには巻き込まれたこの事態が、最低だけれど最短の方法で解決するよう、あえてひどい言い方をした。

「わかつたら、もう、出でつてくれないか…………」

けれど、彼の胸は痛んだ。だから最後の一言は俯いてしか、言えなかつた……。

「…………わ、私ッ、適当になんかッ！…………て、適當になんかッ…………」

しかし、美純は引き下がらなかつた。泣かなかつた。

「…………何をしろって言われれば、何だつてするのにッ！…………何をするなって言われれば、絶対そんなことしないッ！…………パパの言うこともママの言うことも、みんなの言うこともちゃんと訊くのにッ！…………

！ そうしてきたのにッ……」

彼女の表情は悲痛だつた。これまで、本当にそうしてきたのだろう。これからも、きっとそうするのだろう。

……なんて馬鹿馬鹿しいッ！！

「そんなんだから、何にもわからないんだ。不自由のない、恵まれた生活をおくつてゐる奴のセリフだね。……忌々しいッ」

トオルは吐き捨てた。

その言葉に、美純は異様に反応した！ ガバッと立ち上がると、物凄い勢いでトオルに体当たりしてきた！

ドンッ！！

トオルの体は押された勢いで、椅子から転げ落ちた。背中を強く打つて『ウツー』と呻いた。美純が彼の体に馬乗りになつてきた。顔を赤くして、歯を食いしばつて襟元に喰つてかかった。

「みんな、……最後は、そう言つ。私が……家が裕福だからって……、満たされてるから、不自由がないからって……。そんなの、私には関係ない……！ 満たされてるのは、私じゃない……！」

「…………」

トオルは、何も言えなくなつていた。

自分の上に覆いかぶさる少女の顔は、思いつめた……本当に思つめた顔をしていた。

そしてそんな顔を かつて自分もしたことがあるのを思い出した……。

美純は、じぎれじぎれに苦しそうにしゃべり続ける。

「……何かひとつでも壊れたら、崩れて自由を失つたら、私のやるべきことが見つかるのかも。……それならそれでいいと思つた。だから、あなたの自転車に飛び込んだ。死んじゅうのは怖かったから、車には飛び込めなかつた。……だけど、こんなにあなたに酷い怪我を負わせるなんて、思つてなかつた。私の自由は失われなくつて、あなたの自由が奪われた……。『ごめんなさい……。本当に、ごめん

なセ……」

そうか、と思つた。

何が自分を苛々させていたのか

。

そつくりだつたのだ。

あの頃の……自分に。

美純は落ち着きを取り戻すまで、随分時間が掛かつた。

その間に『カーサ・エム』はティナータイムの営業時間に入り、トオルはバタバタとオープンの準備を整え、（実際は間に合わずに、所謂『おつつけ作業』というやつになつたのだが）、その様子を美純はカウンター席の片隅でぼんやりと見つめることになつた。

『カーサ・エム』はオープンキッチンの店で、カウンター席はそのキッチンの真正面に5席ある。

（洋食店のカウンターなんて誰が座るんだろう？）最初、トオルは不思議に思ったものだが、そんなことはなかつた。むしろ、こちらの方が需要は多いくらいだつた。

女性の一人客、というのは実はなかなか入れる店が多くないらしい。確かに、某牛丼屋さんや立食いの駄菴麦なんかで女性の一人客をみると、彼女達は自然な行為なのだが自分がちょっとドキッとなりする。

どうやら、ここ『カーサ・エム』のカウンターは居心地がいいらしい。

トオルと話しながら食べる食事、勧められて飲むワイン、煎れたての香りを嗅ぎながら手元に届くまで待つ「コーヒー……」。

それを期待してくる客は非常に多いのだ。仮にカウンターが満席でテーブル席はガラガラでも、『「ゴメン、また来るね……』なんて帰ってしまう客もいる。

もちろん、今の美純がどうか……というのはわからない。

たぶん、彼女はそれどころではないだろし、かといって、どこか片隅に荷物のように置いておくのも嫌だつた。店から放り出すこともできなかつた。自分の目が届くところに置いておきたかつた。だからトオルは彼女をカウンター席に座らせた。

美純は最初、抜け殻みたいな顔をしていた。顔色も茶色っぽくなつ

て、まるで魂が抜けてしまつたようなふうだつた。その時はなんだかとても話しかけられなかつた。自分もバタバタに準備で忙しかつたから、それどころではなかつたし。

時間が経ち、幾つもの匂いがキッチンから立ち上つてくると、少しずつだが美純に精気が戻つてくるのが見て取れた。

さつきまでのぼんやりと焦点の合わなかつた視線も、ちょっとちよつと何かを追うようになつた。

トオルには今週末に迫るイベントの仕込みもあつたから話しかけることはしなかつたが、それでも彼女の様子はよく観察していた。おそらく職業柄、習慣のようなものなのだが、ほんのちょっと動いたり少しだけ大きく息を吸つたり……こんな動作だけで、トオルの視線は相手を追う。美純は時折座り直すようになつた。少し落ち着かなくなつた。

ふつと、目がトオルとあつた。

トオルはその視線を捕まえると、今度は自分が視線を流した。店の奥のちょっと暗い場所、そこにある扉に視線を投げてみせた。そしてまた、美純に視線を戻す。ちょっとだけ、口角を上げて見せる。

しばらくして、それが何なのかわかつた美純は、ちょっと恥ずかしそうにしながら立ち上ると扉に向かつて行つた……。

時刻は18：45。

今だ外の雨は降り止まず、『カーサ・エム』の窓を強く叩く。日が長くなつたおかげで、表はまだほんのりと明るい。けれどつきから小一時間、人は一人も歩いていない。

(ちよつと、今日はどうにもならんかもしけないな……)

さすがにこんな天気じゃ人も歩かないよな、とトオルは思った。第一、自分でつて出たくなかった。

本当は三軒隣のスーパーに切らしていたマスターDを買いに行かなれば、と思っていたのだが、美純もいたのでなかなか出掛けられなかつた。そして多分、美純のことは本当は関係なかつた。自

分に言い訳をつくり出かけたくなかっただけなのだ。

雨足は弱まることはなく、むしろどんどんと強くなるばかりだ。

トオルは火口の一つに『カフェテリア』をのせて、火を付けた。例の、機能重視の無骨なデザインのコーヒー ポットだ。その隣でミルクポットのミルクを温める。だんだんと店内は香ばしい香りで満たされていく。

美純がトイレから戻ってきた。ちょっと恥ずかしそうな、ちょっと恨めしそうな顔をしていた。

トオルはそれに気付かないふりをして、出来たカフェオレを彼女の前に置いた。

今回は電子レンジで温めたミルクではなく、ゆっくりと加熱したミルク。その味の違いは雲泥の差だ。もちろん電子レンジを否定するつもりはないが、どうしてか美味しさは違うのだ。と、いうより別の飲み物と考えたほうがいいくらいである。

ちらっと上目遣いでトオルを見上げた美純だが、すぐにカップに目を落とすと『フーフー』しながらカフェオレを飲んだ。そして、びっくりした顔を見せた。

トオルは内心、ちょっと嬉しかった。食べ物を作る人間というのは、『自分が美味しいと思ったものを、美味しいと感じてくれる人に悪い奴はない』と考える、ちょっと短絡的思考がある。

今、トオルの中で美純という存在はく面倒臭い変な女子高生へからくちょっととは共感できる女の子へくらいまでランクアップした感じだった。

だからだらうか？……もう一度美純と目があつたとき、トオルはこんなことを訊ねた。

それはトオル自身、あとから考えたら『何でそこまでしたんだろう？』と不思議に思うことなのが。

もしかしたら、ちょっとだけランクアップした『トオルの中の美純』という存在に、彼が少し勘違いをしておきたく事故くみたいなものだつたのかもしれない。

でも、その時は余り考えていなかつた。思わずトオルの口から溢れてしまつた。  
そして『カーサ・エム』、今夜最初のお客様をお迎えすることになる……。

「なあ、美純。お前、腹減つてないか？」

「

The rain came down . She came up to me

大変失礼いたしました。

The rain came down . She came up  
to meet him . 9

UP完了いたしました。

誤UP後、なんとか削除しようと試みましたが、うまくできません  
でした。

たくさんの方が私のミスにアクセスしているのを拝見し、猛省いた  
しました。

心からお詫び申し上げます。

ワイニースト

# The rain came down .she came up to me

美純は最初、『ポカン……』としてトオルを見ていた。

それからちょっとと考えるような素振りをみせ、結局「……空いた」とぼそつと呟いた。

トオルは「〇・Ｋ・」と小さく答える。ニコリと微笑むと、使い慣れたペティナイフを取つた。冷蔵庫から取り出した食材を、手早くカットし始める……。

美純から見えるトオルの姿は胸から上くらいまでで、カウンター席に座った状態では彼の手元は見ることができなかつた。だからカウンターを挟んだ向こう側で今何が起こつてゐるのか、彼女はちょっと気になつていて。かといって立ち上るのはなんだか浅ましい気がしたし、だからそこは思い留まるようにした。

『シユツシユツ』とか『カチャカチャ』とか、おおよそ料理というより技術的作業のような音がキッキンから響く。

美純はあまり料理を自分でした事がないし、また家族が料理をしているのを見た事もありなかつたので、『トントントン』とか『コトコト』なんて、料理をするときはそんな音が聞こえるんだろうと思つていたけれど本当はちよつと違うんだなあ、とぼんやりとして様子を伺つていた。

トオルが時々自分の方を見るのに気が付いてはいたが、嫌な感じはしなかつたし、余り氣にもならなかつた。自分の表情やちよつとした仕草を、トオルの目はその都度追い掛けてきた。そのくせ手元は忙しなく動き回つた。包丁なんて、手元も見ないで動かしていた。すごいなあ、と思つた。

しばらくして、トオルが顔を上げた。

「お待たせ。…………はい」

カウンターの向ひから美純の前に出てきたのは、透明に近い薄い

白色のなにかが皿の上に広げられたものだつた。ミートマトやフレッシュハーブで彩りを添えて、鮮やかな仕上がりの一品。

「これ…………」

「ヒラメのカルパッチョ。ライムの風味のソースがアクセントにかかるてる」

はあー、と美純はため息をついた。赤や白や緑の色とりどりで出来たそのひと皿は、キラキラと輝いていた。『なんだか、食べのもじやないみたい…………』と美純は思った。

そして、トオルを見上げた。

「食べていいの？……で、っすか？」

「今更かよ。それに、そのきこちない敬語ッ……やめてくれ。笑いを誘うんだよ」

「そ、そんな」と言つたつて……」

美純は見上げる顔を、ちょっと不満そうにした。

「おまけに笑うと怒るし。なつ！」

トオルはそう言つて美純を冷やかす。

「つるさーっ！で、ですッ！…」

「ふ。はははっ……だから、もつ勘弁してくれ」

美純はまた顔を赤くして怒つた表情をする。けれどもつ、トオルはもう遠慮しない。突きつけてきた彼女の顔を押し返しつつ、一頬り氣の済むまで笑つてやつた。そして笑いきると、

「いいから食べろつて！それとも生魚、ダメだつたか？」

トオルは訊く。

美純はじつとトオルを睨みつけていた。ツンとした表情は頬をふくらませて抗議していた。けれど、促されるままにフォークをひとわし、そして口に運ぶ……。

「あっ」

「うん？」

美純はさつきまでより瞳を大きく開いて答える。

「おいしー、……で、す」

べしつ！

「痛あつ！」

トオルは美純の頭を上からチョップみたいに軽く叩いた。  
「やめろつて！『おいしー』とか『うまい！』とか、さ。普通にしててくれ。そうして欲しいんだよ」

トオルは上からちょっと見下ろすような顔にして、美純に釘を刺した。実際、笑いを誘つて嫌だつたのと、それにこの『あるんだかないんだかわからない微妙な境界線』みたいな距離感がもつと嫌だつた。

美純は頭をさすつた。

頭を叩かれたことも驚きだつたが、それよりも田の前の男と、彼が作ったひと皿の方にもつと驚いた。

だから彼女の口から出てきた言葉は、叩かれたことへの不満ではなく……

「…………美味しい」

「ん、そうか？」

「うん。…………美味しいッ！」

そう言って、また次の一口を運んだ。

トオルはしばらくその様子を見ていたが、再び動き出した。今度は火口にアルミ製のフライパンをかけ、ニンニクを炒め出す。ニンニクを焦がす特徴的な香りが室内に広がる。

「美純ッ！お前、キレイなの、何があるか？」

トオルは顔だけ彼女の方へ向けて、言った。

美純は急に声をかけられたから、食べてる途中のちょっと間抜けな顔を上げて考えた。……けれど、思いつかなかつた。それは、表情

からトオルにもすぐに伝わった。

「じゃあ、好きなのッ！何があるか？」

「カニッ！エビッ！」

「つむは早かつた。美純は期待を込めたキラキラした目で言つてき  
た。その顔を見たトオルは、さつきみたいに「〇・Ｋ・」と小さく  
答えたのだが、内心『こいつ、ほんとに面白いなあ……』とほくそ  
笑んでいた。

ようやくとれた『あるんだかないんだかわからない微妙な境界線』。  
その向こうにいたのは、17歳の素直な少女だつた。

トオルはその娘を少しづつ受け入れられるよつになつていて。

最初に会つたときは自転車に飛び込んでくるは、夜中に泣きじやく  
るは、また現れて今度は黙りこつくるは、そうかと思えば急に  
怒つて飛びかかってきて、それでまた泣きじやくつて……本当に訳  
のわからないヤツだと思っていたけれど、こつしてみると案外、可  
愛らしいヤツだなと思えた。

確かに10代なんて、こんな感じだつたような氣もするし。

そう思つたら、案外、可愛らしいヤツだなと思えた。

そうして出来上がつた『カニとエビのトマトクリーミソースのパス  
タ』を彼女の目の前に置いたときにみせた彼女の表情。わあ、つと  
胸をおどらせるよな微笑みが……

可愛いいいな、  
と思えた。

「美味しそうッ！」

「くくく。美味しいよ、自信作だからね。どうや……」

「うそ…こだまも…」

The rain came down. She came up to me.

前話の誤じPの件、再度お詫び申し上げます。

『The rain comes』 9 改訂版もじPしております  
すので、

合わせて読んでいただければ幸いです。

「なあ、美純」

デザートに出されたガナッシュとジンジャーを堪能する美純に、トオルは話しかけた。

「何?」

カウンターの向こうから自分を見下すトオルを乞う見る美純。

言おうか、言つまゝか、トオルは悩む。言えば、わざとまた美純は悩む……。

けれど

「進路希望調査書は、たぶん適当に書いていいんだと思つ。少なくとも思いつめて書くもののじやないだら?」

「……」

言われて、美純の手が止まった。

「氣を悪くしたなら、ごめん。お前がどんなふつに考えてそうしてるので、俺は知つてて言つてる訳じやないし。……でも、進路希望調査書はお前を助けるものじやなきやいけない。お前の未来に助けにならなきやいけない。なのに、お前の今を苦しめるものになるのはおかしくないか?」

美純は黙つた。皿の上のジンジャーに皿を落とした。じつとそれを見つめて、動かなくなる。

トオルはそんな彼女の様子を見て、重苦しい気持ちになる。けれど、言葉を続ける。

「お前を追い詰めるのがあんな『紙一枚』が原因だとは思わないし、かといってその原因を取り除いてやるうなんてお節介を焼くつもりもない。でも、もつと気楽に考えていいんじゃないかと思つ……」

美純は視線を落とし、口をつぐんだまま。上から見下ろすトオルには、彼女の表情が見えない。

トオルは一旦美純に背を向ける。話しながらミルクポットを火にかけた。弱火で、ゆっくりとミルクを暖め始める。再び振り返り、彼女の顔を見下ろす。

たつた、……会つてたつた一日、だ。正直、踏み込みすぎなのはわかつっていた。けれども、トオルにはどうしても放つておけかなかつた。美純を、放つておけなくなつた。

自分の言葉が彼女の胸に届くかはわからない。届かせるには、その関係を作るには一日は短い。二人はまだお互いのことをほとんど知らない。だから、トオルは慎重に言葉を選んだ。言えば彼女を思い悩ませるに違いないのだ。それでもトオルは言おうとした。……伝えようという意思がそこになれば、それはただのエゴだと思った。気になつたことをただ口にする、彼の自己満足にしかならない。トオルは一言一言、思いをつめ込んで言葉を紡いだ。そうしなければ、会つてたつた一日のこの娘に何かを語る権利はないんじやないかと、……そう思えたからだ。

「美純……」

そう思つて話したトオルは、しかし自分も沈痛な思いに駆られていた。

表情は、暗く影を落とす。

このまま、『じゃあ』って済ませれば、こんな気持ちにはならなか

つたのに。。

「……私は」

俯きかけるトオルに、

囁くような小さな声が聞こえた。

「私は……」のままじゃいられないから。自分の居場所は自分でつくらないといけないから……」

「居場所……」

トオルは彼女の言葉を繰り返した。

美純は再び口をつぐんでしまった。それっきり彼女は口を開こうとはしなかった。

彼女の手元のジョラートは、どんどん形を失つていった。皿の上は二人の心情を表すかのように、チヨコとバーラとベリーのソースが入り交じった、複雑な色になつていった。

トオルは小さくため息をついた。

「……」

美純は無言のまま俯いていた。

トオルはちょっと考えて、それからもつ一回、今度は深いため息を吐いた。

これ以上、何も語るべきではないのだろうか？

所詮、10代の少女と30代の男にできる会話は限られているのだろうか？

言葉は、伝わらないのだろうか？

わからない。

わからない。……けれど、だから放り出すのか？ 交わらないのか？

手を 差し伸べないのか？

自分は『理解できない』と決めつけた。でも、それは『理解できぬい』ではなく『理解しようとしてない』だけなんじゃないか？

『10代女子なんて未知の生物』みたいに思つて、触れないようにしているだけなんじゃないか？

そういう田で、そういう括りで美純をみて、本当の彼女をわからうとはしてないんじゃないか？

もつと、 美純に近付いて考えてやる必要があるんじゃない？

トオルは考えた。

ふと、思いついて考えた。

自分は どうだつたんだろう？

10代の、<sup>あの頃</sup>高校生の自分は どうだつたんだろう？

どんなふうに悩んでいたんだ？ どんなふうに苦しついていたんだ？

あの頃の自分は……

そして彼は過去の記憶を思い出しながら、ゆっくりと、ゆっくりと、しゃべり始める。

「昔、……進路希望調査書を全力で書くヤツがいて、わ。そいつの夢はサッカー選手だつたんだ。だから、そいつは『卒業アルバム』とか、『タイムカプセルの中の手紙』とか、全部そんなことを書いてたんだ……」

トオルは火にかけていたミルクポットを、一旦火から外した。

「子供の頃から人よりちょっと『デカかったから、小学校の低学年の頃からポジションはキーパーだった。デカくて、勘がよかつたから、すぐに町内じゃ一番の『名キーパー』みたいに言われてさ。そのうちそいつは、いつの間にか『県内一の名キーパー』になつてた。県の代表チームで海外の同世代のチームと試合をするようになつた。……その頃はすごかつたんだ。今の『東南アジアの国家代表』に入つてる選手なんかと対戦してたし、そいつらのショートをバンバン止めてた」

言いながら、トオルはちょっと誇らしそうにした。

「……」

美純は聞いているのか、聞いていないのかはわからなかつた。じつと身動きもせずカウンターに座つたまま。

トオルは構わず続けた。

「中学までは順風満帆。チームこそインターハイには行けないものの、本人は世代別の代表候補にも入つたりと、人に誇れるくらいにはあつた。……高校は当然、県内のサッカー名門校に進んだ。さらなるレベルアップを目指して、……そして将来はプロのサッカー選手になるっ!! 、てね。そいつは本気で『進路希望調査書』だつてそう書いたさ。過去の実績もあつたから、担任の教師も別に何も言わなかつた。友達も『お前なら、なれるんじゃないか?!!』って言つてくれた……」

トオルはちょっと背伸びをして、カウンターの上の棚から何かを取り出す。

重厚な造りの筒型をした《物体》。シルバーカラーの筒型のそれは幾つかボタンが付いていて、上蓋にある部分が投入口、正面下部に割と大きな透明のカセットがあるデザイン。

トオルは筒から伸びるコーンセントを差すと、スイッチを入れ、上蓋

を開けてコーヒー豆を入れる。『ガリガリガリ』と豆を挽く音が店内に響く。しばらくしてモーターの回転音だけになると、トオルはスイッチを切る。

「……けれどそいつは高校で壁にぶつかった。努力しても、努力しても、試合に使ってもらえたかった。自分とは別のヤツがいつも選手に選ばれた。自分より、上手いヤツがいたんだ。……キーパーってポジションは、一人しか試合に出れない。おかげで3年間、そいつは『番手のまま過ごした。そこにそいつの『居場所』はなかった

」

トオルは「コーヒー・ミルから挽いた豆を取り出すと、カセット部分に残った「コーヒー・カスや油分をよく拭き取り、また元の場所にしまい込んだ。それからカウンター裏に設置してあるエスプレッソ・マシンのところまで移動すると、フィルターフォルダーを外し、先ほど挽いた豆を詰めてタンピング（詰めた豆を器具で押し込む）する。マシンにフィルターフォルダーを取り付け、ノズルの下に二種類のサイズのカップをセットしてスイッチを押す。圧力がかかり、コーヒーが抽出される『ウイーン』という音が室内に妙にくつきりと響き渡った。抽出が終わると機械は自動で止まった。

トオルは片一方の普通サイズのコーヒーカップを取ると、さきほど温めたミルクを流し込みカフェラテを作る。それを美純の手元に置く。

それでもう一方の小さいミタスカップのほうは、そのまま自分がする。

フィルターフォルダーを外し、中に残った使用済の「コーヒー豆を」三箱にかき出すようにして捨てる。

苦味のきいた、けれど皿みの詰まつた液体を口に入れると、レギュラー「コーヒー」の何杯も密度の濃い複雑な香りが鼻から抜けていく……。

マシンでおとすエスプレッソは凝縮した液体が魅力の飲み物だ。苦味も、旨みも、香ばしい香りも、ほのかな酸味も。たった40ccくらいの中に目一杯に詰まっている。  
まるで……自分の過去みたいに。

思い返せば一瞬の出来事みたいな気がして、でもその中に嬉しかったことも、悲しかったことも、傷付き、立ち直ったことも、全部全部、一杯に詰まっていて。そして、最後はほろ苦い。

一息付くと、トオルは再び話しか始めた。

「そいつは自分が伸び悩んだ理由を、環境のせいにした。もつともつと厳しい場所で自身を磨けば、結果は絶対に違うはずだ、そう思つた。だからそいつは高校卒業後、海外にサッカー留学することにした。サッカーの本場で揉まれれば、絶対に上手くなる！ そう思つたからだ。親に頭を下げる費用を出してもらい、ヨーロッパにスペインに。一流の選手になるまで絶対に帰らないぞ、と固く決意して日本を出た」

飲みかけの『テミタスカップ』をカウンターの上に置くと静まり返った店内に『カツン』と硬質な音が響き渡つた。

起きているのか、寝ているのか、判断つかないくらいに指一つ動かさなくなつた美純を見た。彼女は今、一体どんな気持ちで自分の話を聞いているのだろう？ と、トオルは思った。こんな話、聞いて何になるんだ、と思つていいんだろうか？ そうだとしたらわざわざするのも馬鹿馬鹿しい。ただ、彼女はそんなふうに考える娘ではない気が、トオルにはしていた。会つてたつた一日の少女のことをわかっているみたいに思うのも彼に対しては妙な感じだが、それでも何となくそんな気がした。

じつと。じつと、美純を見つめた。

彼の視線を感じても表情を変えない美純に、トオルはさりと言葉を投げかけた。

「けど、そこにもそいつの『居場所』はなかつた。言葉の壁は想像以上に厚く、世界の共通語だと思っていた英語は、高校卒業程度の

知識しかないから上手く通じないのでなく、そもそも空港内までしか役に立たなかつた。扉を一步出て、タクシーに取り込んだ時点で、そいつにはコミュニケーションツールは一つもなくなつた。……

まったく。何一つ言葉が通じなかつたんだ。世話になるホームステイ先の住所の書かれた書類を運転手に見せ、何とか走り出したタクシーは、20分後になんだかわからない交差点の脇で止まって、一にも二にも『降りろ！』と手振りで車内から追い出された。結局一時間以上、のべ20人以上の人の協力を得て（ほとんどの人は話しかけても首を横に振るだけだったが）何とか住み家にたどり着くも、そんな調子では生活も、それに本来の目的であつたサッカーも、まったく思い通りに行くはずがなかつた

「……」

「本当に、道端の石ころみたいな扱いだつた。自分から話しかけてこない人間には、周りはまったく話しかけてはこなかつた。一流の選手になるまで絶対に帰らないぞ、とした固い決意は、ものの見事に打ち砕かれた。たつた数日で、そいつは自分の考えが甘かつたことを痛感させられた

「…………で？」

小さく、呟いたみたいな声が聞こえた。一瞬、幻聴かと思つてトオルは美純を見た。

彼女の表情は変わつてなかつた。さつきまでと同じように、手元の皿に視線を注ぎ込むままの姿だつた。

トオルは彼女のことを見つめた。

美純はぴくりともしなかつたが、トオルには確信があつた。彼女は自分の言葉に耳を傾けている、と確信があつた。

トオルはまた話し始めた。

「そいつは結局、夢敗れて今はサッカー以外のことでの飯を食つてゐる。

でも、そいつの今の人生は道端の石ころなんかじゃなく、もうちょっとマシな人生さ。大好きなことを自分の生き方にはできなかつたけれど、自分の生きる場所は作れた。自分の『居場所』は自分の手で作り出せた

「……」

「まあ『居場所』なんて、本当は自分の力で作るもんでもなく、人と人の『ミニコニケーション』が勝手に作り出す物なんだらうけどな……」

「……ふん」

美純が鼻を鳴らす音が聞こえた。

トオルは『ガバッ』とカウンターから顔を乗り出すると、美純の前にグッと突き出した。

美純はキヤツ、と小さな声を出して仰け反つた。

慌てた表情の彼女に向かっていたずらっぽい笑顔を作つてみせると、トオルは言つた。

「だから進路そんなもの希望調査書に、お前が苦しめられるのはおかしいんだ。だつてそこに何を書いたつて、お前はこの先の人生で一杯、一杯、苦しむんだ。挫折して、思い直して、決断して、また前に進むんだぜ。だつたらそんな紙つぺら一枚に、今、辛い思いをさせられちゃダメだ。適当に……そうだ『宇宙飛行士』とか、書いておけつ！」

「なつ、う……宇宙う？………… プツーふ、ははははは」

ずっと目の前の皿とにらめっこしていた美純が、とうとう破顔した。手元に置かれたカフェオレのカップに向かつて、溢れるばかりに笑顔と笑い声を投げ込んだ。そうしてしばらく赴くまことに笑い続けると、そのあと美純はトオルに視線をぶん投げて大声で言った。

「あなた、馬鹿じやないの？ なれるわけないじゃない、宇宙飛行士なんて！」

整った鼻筋を突き上げて侮蔑したような顔で言つものだから、トオルはなんだかちょっとカソに触つた。心配して、昔話まで引っ張り出して励ましてやつたのにこの態度。これからガキは嫌いだ。さつきほんの氣の迷いで『かわいいな』なんて思つてしまつた自分が、ちよつと悔しく思えた。

だからトオルはムツとさせられた氣分を、仕返しどばかりに大人げなく美純に投げ返す。

「はつは～ん。ど、いひことは現時点では俺の勝ちだな！」

「えつ？」

「俺だつたら迷わず書いて提出するからね。どつこしたつてなれないなら、書くだけ書いた俺の勝ち、さ」

「はあ～？ あなた、何、言つてんの？」

美純は眉間にシワを寄せて、トオルを睨みつける。

「そんなこと書いたら、先生に何て……」

「おつと、敗者の弁は聞きたくありません！ まったく、最近の高校生はそのくらいの気合もないのかよ？ 俺の高校時代なんてな

……」

「？・？・？・？・何よ？」

「・・・・・いや、それらしい記憶が思い出せない」

「ふつ！ あ、あはははは……」

「なあっ！ 何、笑つてんだよ？！」

「だつて『思い出せない』なんて言つて、くくく……、まるで、

ずっと昔みたい」

「う、うるせえなッ！ どうせー〇何年も前の話だよ……！」

「や～ん、オ・ジ・サン！…」

「こいつッ！」

拳を振り上げて脅かすトオル。「きやつ！」と頭を手で庇つてみせる美純。

しばらくくじつと身を潜めるみたいにしていた美純は、上から落ちてこないゲンコツの様子を伺うべく、庇つた手の隙間かそーっと様子を見る。…………と

「ああっ！ ……もう、その顔！…」

ほんのすぐ側でニヤニヤ笑うトオルの顔に出くわして、カウンターを叩いて『ムツッ！』とほっぺたを膨らますふりをした。

「……ふふふふふつ」

「……はははははつ」

二人は、気が付くと腹の底から目一杯笑っていた。

ともかく、おかしかった。

おかしい気がした。

どうだらう？ 本当におかしかったのかはわからないけれど、それまでのモヤモヤした気分を一掃するにはちょうど良かつた。トオルと美純は、どちらかが止めるまで続けるみたいに笑っていたから、結局随分長いこと笑い続けていた。

おかげで胸につまつた何かがいつの間にか取れて出ていったような、すっきりとした気持ちになった。

「ねえ、さつきの話って、あなたの『ト』？」  
美純が訊ねてきた。けれどトオルは、質問の答えとは違う返事で返す。

「……ト・オ・ル。やめてくれ、『あなた』なんて呼ばれ方、こそばゆくてされたくない」

「えー。でも、じゃあ『トオルさん？』『トオルさま？』『アーン…』

「『トオル』でいいからっ！ 周りの人間は、みんなそう呼ぶ」「年上、なのにはいいの？」

その『年上』のイントネーションをワザと強くいった美純。いたずらっぽく笑った顔にまたゲンコツを握つて見せると、「キヤッ」と笑つて顔を引つめる。

「トオル、で！ 叫ばれなれてるから、そっちの方がいい」  
トオルが言つと、美純は『うんっ』と素直に返事をした。

「それで……トオル。さつきの話は、トオルの昔の話しなの？」  
美純はリクエストに応えて、彼に話しかけた。けれど、トオルは伏し目がちに彼女を見て、「ああ？」と答える。

「知らん。友達の話？ 聞いた話？ まあ、そんな感じなんだ」「え～、何それ！」

美純は両手のひらを『パツ』として、不満そうな声を上げた。

「何でもいいだろ。さあ、食べ終わたら帰つたほうがいいんじゃな

いか？ もうだいぶいい時間だぞ

「するい、そうやって話をそらすの！」

「するくてもいいの。大人の特権」

「もう少しう、教えてくれてもいいじゃない？！ スペイン、行ったの

？ どんなところ？ みんな情熱的な？ 女の人キレイ？」

「だああー！ 質問ばつか、すんな！！ ほら、おしまいおしまい、

店仕舞い。用が済んだら出てけよ」

「え、もうちょっと。……じゃあ、トオルの昔話とか、聞きたいな」

「NO！ そいやって誘導尋問みたいにするのはお断りです」

「えー！ つまんない。参考になるかな、って思ったのに」

「そういう誘導尋問にも載りません」

「……うー、もう少しう！ ジャあ、おかわり……」

「はあ？！ 何をだよ？」

美純は口をツーンと尖らせて、ぼそっと囁く。

「デザート。だって、ショーラート、溶けてみんな混ざりやったか

ら

トオルはポカソと空いた口がしばらく閉まらなかつたが、そのうち腹のそこの方から笑いが大量に溢れてくるのがわかつて抑えきれなくなつた。

「ぶははははははッ！！ 美純、お前、最高なッ！！ お前と一緒にいたら、俺はきっと一日中笑いまくることになりそうだ。いいよ、……す」「くイイツー！」

「なつ？！」

またも豪快に笑われたことにほっぺを膨らまして怒り出す、美純。

「もう少しう、笑うなあーーッ！…」

両手がぱしーん、とカウンターを叩く。

『ガチャツ』

「あつ 雨、やんてる」

「ホントだ。よかつたじゃないか、帰りは濡れずにすむ」

「うん。そうだね……」

美純は、『カーサ・エム』の扉を出ると、180。ターンしてトオルの方を向く。

足元の水たまりが、彼女の動きにあわせて水しぶきを散らす。きちんと『気を付け』の姿勢になり、そしてペコリと頭を下げる、彼女。

「……………」

下げた頭に、優しいチョップが見舞われる。

「いやなんだ、堅苦しいのは。普通でいいよ

「…………うんっ！じゃあ、ありがと。ゴメンね、色々迷惑かけたり……泣いたりして」

トオルは軽く首を横に振る。

「でも、なんかスッキリした！ たぶん、今日ここに来て、私、正解。明日からまた笑顔でがんばろー、って気になれた」

「そうか。じゃあ、よかつた」

美純はニッコリと笑つて、『うんっ』と頷いた。

とてもいい笑顔だ。透き通つて、ピカピカ輝いているみたいな笑顔だった。そういうえば、彼女のこんな表情は初めて見た。思いつめてたり、泣いてたり、そんなのばかりだったから気付かなかつたけれど……

「…………美純って、笑うとすごく可愛いな。そっちのほうが絶対、お

前らしいよ。泣いたり、悩んだりした顔は、お前には向かない」

トオルは微笑んで言つた。なんだかとても自然に口から出た言葉だつた。

一瞬、美純は言葉を失つた。けれど、すぐにブイツとやつぽを向くと、「……急に、何、言つてんの?！」と呟いた。

トオルはまた『くくく』と笑いをこらえた。

「じゃあ、行くね」

「ああ、元氣で。がんばれよ」

「うん、ありがとう」

そう言つて手を振つて行く美純の背中を、トオルはしばらく見送つた。彼女は一つ先の交差点を渡つて、駅の方へ向かつて姿を消す。辺りは、もうすっかり夜だつた。さっきまでの雨はどこへやら。雲の切れ間から、所々、星空が顔を出していた。

トオルは、入口周りの看板類を店内に引き込む。

今夜の営業は終わりだ。ディナータイムのお客は、美純ただ一人。売上はゼロ。でもまあ、こんな日もある。

店外の照明類を消して、『CLOSE』の看板を出して

ふ

と思つた。

なんだかきつと、また会つ氣がする　と。

彼女に。

美純に、また会う気がする。そんな予感がした。

30代のうだつの上がらないオヤジと17歳の女子高生。

つながるところは何にもないけれど、共通の話題や趣味も見つからなかつたけれど、トオルは彼女のことがちょっと気に入っていた。そして、彼女とはまた会えるような気がしていた。ちつとも根拠のない予感だけれど、この予感には自信があった。

キッチンに戻り、洗い物をし、帰り仕度を始める。ふと、気になつて入口辺りに目が行つた。そして、さつきの予感が確信に変わつた。

「あいつ」

銀色の柄。白の縁どりが付いた真つ赤なデザインの傘。傘立てには美純の傘が残されていた。

「くくく」

トオルはまたちょつと笑つた。

彼女は来る。きっと、また来る。あの笑いを持つて、またやつて来る。

燐然とさりげなく宝石たちはダイヤにエメラルド、トパーズ。ほかにも赤や蒼や、色鮮やかなたくさんの輝きが並ぶ。手の込んだ装飾付きの指輪、上品なデザインのピアスやペンダン

ト……。

『カーサ・エム』に運び込まれるこれらを見やり、トオルは鼻を鳴らした。

これほどに素晴らしいものが目の前に揃っているにも関わらず、正直なところ彼の目を奪っているのは、その美しさではなくて、<sup>ハゼロハ</sup>の羅列だらけの値札だったりする。

トオルにとって、ほとんど（いや、全く……）価値を理解できないこれらが、しかし本日の大事なビジネスパートナーなのだ。

今回で5回目を迎える『ジュエリー・yoshikai』主催のカラボイベントが、ここ『カーサ・エム』にて、もうあと一時間ほどで始まるとしていた。

トオルは、いつもと随分雰囲気の変わった『カーサ・エム』の店内を見回した。

店内の三分の一のスペースを使って行われる貴金属の販売会。

『ジュエリー・yoshikai』、御殿廻のなかでもとりわけ重要な二組『』がディーラー側よつて選ばれ、特別に招待されるこの会は、普段は絶対に紹介しないような限定品だつたり、この日のために仕入れた貴重な品だつたりが、『買わされることを目的に』参加する資産家や有名人達に、まるで何でもないもののように（値札なんてたいして見もせずに）取り引きされていく。

そしてトオルが関わるのは招待客への『お礼』を目的とした、のちの食事会の演出の方だ。有意義かつ羽振りのいい買い物の余韻を

満喫していただくため、彼がひと組ひと組、『そのお客様だけの特別メニュー』を用意して接待する。

16：00から始まって、一組約2時間程度の時間を使って行われるこの会は、最初の一時間が『メイン』の販売会、あとの一時間が食事の席。

最初のゲストが到着するまで、あと30分ほどだろうか。次第に行き交うスタッフの慌ただしさから、店内の空気の密度が濃くなつてくるような気がした。

トルはタタタタッと軽快に刻んだハーブを、使いやすいように小さなケースに移す。使った包丁をさつと洗い、仕舞う。

会場となる『カーサ・エム』はそれほど広い間取りではないが、専門の業者に委託して不要なテーブルやイスを派出し、代わりにくつもショーケースを置いた『簡易宝石店』のような造りに様変わりしていた。けれども調度品や額の写真は『カーサ・エム』にもともと置いてあつたものを使っていたので、よく見るとラグジュアリーな雰囲気と氣取らない装飾とが一体となつた、どうもちぐはぐな空間が出来上がっている……。

慌ただしく設置作業の最終チェックをするスタッフと、運び込んだ貴金属を仰々しく飾るスタッフが入り乱れ作業する中、カウンターを挟んだ内側ではさつきの包丁仕事で粗方下準備を整えてしまつたトルが、宝石店の販売スタッフの行動を何となく目で追つて樂しんでいた。

壁際の指輪ばかり並べたショーケースの前に立つ男性スタッフは、さつきからずつと『ブツブツ、ブツブツ』ケースに話しかけている。若い女性のスタッフは、手に持つたバインダーに挟まれた資料と現物を一つ一つ見比べて、何度も納得するみたいに頷いていた。40代くらいの長身の女性販売員は、落ち着きなく店内を行つたり來たり、行つたり來たり。

きっと彼らスタッフには、それぞれ『ノルマ』みたいなものがあつて、それが達成されるかされないかで、今後の自分のポジション

みたいなものに色々影響を与えたりするのだろう。

緊張やプレッシャーからなのか、皆、同様に眉間に深いシワを寄せ『キリキリ、カリカリ』と張り詰めた空気を発していた。『カーサ・エム』の中はさながら、翌朝の出兵を控えた軍隊みたいな殺伐とした雰囲気になっていた。こういう『追い詰められた人間』の観察は、普段見えない本性のようなものが覗いて割りと楽しいものだ。悪いとは思いながら、トオルはクスクスと笑っていた。

実際のところ、トオルにしたってまったく緊張していない、とうわけではないのだ。

今回、彼に任せられているのはただ『美味しいものを作つて、提供することだけではない。というのもひとつのお客に一時間毎に新しいお客様を案内する今回のイベントの性質上、ひと組目の客は次の客の買い物が終わるまでに食事を済ませていなければならぬのだ。

そのためにはある程度、アップテンポで食事を提供し続ける必要がある。料理をテンポ良く出しきつて最初のお客にお帰りいただきなければ、一時間後に次のお客様をテーブルに案内するはずが結局、待たせてしまうことになる。

かといってあまりに早過ぎれば、それも問題だ。

食事は慌ただしいものになつて、折角贅沢な買い物をして上機嫌な客の気分を台無しにしかねない。要するに、『主催者』にも『お客様』にも都合のいいタイミングを見つけ出して、提供することが要求されるのだ。それベスト・タイミングを見極めるのも、またベスト・タイミングで実行するのもなかなかに高度な技術や判断力が必要とされる。

一発勝負。

けれど、そんな失敗できない緊張感がむしろトオルは心地良い。ストレスの少ない中での作業は、ミスこそ少ないと同様に高い結果も生まれないものだ。緊張感に呑まれるのではなく、呑み込む。ト

オルは今、自分の中の『気持ちの核』みたいなところが、だんだんと集中の密度を増しているのを感じていた。

時刻は16：00まであと15分をきつた。

トオルは冷蔵庫から出したあるものをショット・グラスに注ぐ。それをグラスの半分くらい、一気に口の中へ放り込んだ。舌の奥の方、喉の近くを液体が刺激し、飲み込むと果実の熟成した香りと木の焦がしたような香りが鼻腔に抜けしていく。

急に 視界の解像度が上がるといつか。映るものが鮮明になつたような気がする。

何度か香りの余韻を楽しむと、 気持ちの方もだんだんと盛り上がってきた。

『 わあ、今日もがんばろうつか』 ひとりじみでトオルが頷いたときだ。

「 .....あら？ ねえ、私にもそれ、ちょっといただけないかしら？」  
不意に背後で声が聞こえた。

振り返ると、黒いスーツを着たおかっぱみみたいなショートカットが特徴の50歳くらいの女性がトオルの顔を覗き込んできた。紫がかつた青のアイシャドーの両端に年齢を感じさせるシワが刻まれた、パツと見、貴禄のある顔だった。

「 .....？」

急に声をかけられたトオルは、最初、彼女が一体何を言つていたのかよくわからなかつた。だから言葉の意図を探ろうとして、じつとその表情を見つめ返した。すると、彼女の方も伝わっていないことを察したらしく、もづ一度、今度はトオルの手にあるグラスを指さして言つ。

「 私にも一杯、下さる？ もちろん、お代は支払うから」

「あつ、これ.....ですか？」と、トオルはショットグラスをかざして確認する。「でも、これ『酒』ですよ？」

「そんなの、わかってるわよ」

「えつ？……いいんですか、仕事前なのに？」

「ちょっとなら。第一、仕事前なのはお互い様よ」

「まあ、そうなんすけど」

トオルはその言葉に苦笑する。

「ちょっとした『気付け』っていうか。少し強いですよ」

「いいの。そのほうが頭がクリアになるじゃない？」

確かにそうだ。トオルがそうしたのも、まさにそういう理由だった。

少量の『アルコール』は感覚を鋭敏にすることがある。それが作業の進行や結果に良い影響を与えることもある。カフュインでも似た効果は得られるが、威力は断然アルコールの方が上だ。

あくまで、たくさん口にしなければ。

「お好きなんですか、お酒」トオルはグラスに注いだやや黄金色がかかった液体を、彼女に差し出した。

「当たり前でしょ。女を一人で50年もやつしていくには、色々道具が必要なのよ」

「一ソーマツとしてみせると、彼女はためらわずにそれを一息であおつた。

空になつたグラスが、しばらく空中で止まつていた。それから、まるで止まつっていたことに気が付いたみたいに彼女は『コトリック』とカウンターの上にグラスを置いた。

「……これ、何かしら？ 美味しいわね」

同じ側の眉と頬をキュッと上げて、彼女は言った。記憶の中から同じものを探し出そうとしているのだろうか？ しかしどうやら答えは見つからないようで、彼女は残念そうに表情を曇らせた。

「シェリー酒、ってスペインのお酒です」

トオルは答える。

「アンダルシア。ポルトガルに近い辺りのお酒ですよ」

「へえ。何だか『シェリー』ってサラッとしていて、飲みやすい印象だつたんだけれど、これは割に味が……」

「濃い、でしょ? 日本でショリーと言えば一つポピュラーな銘柄があつて、それが『スッキリ&ドライ』な味が売りの銘柄なんですが、その味が僕にはどうも物足りなくて。それでこの銘柄を使つてるんです」

「ふうん」鼻を鳴らして彼女は言つた。「あなたこそ、好きなのね。

『お酒』

「僕のは、仕事ですから」

そう言つてトオルはエプロンの左胸に付けたソレをつついてみせた。それを見て「ああ……」と彼女は納得したように頷いた。

ちょうどその時、『カーサ・エム』の前に一台の車が止まつた。中から降りてきたのは60代くらいの男女。おそらくはご夫妻だろう。トオルは予約の名前と来客数を資料を見てチェックする。【黒木夫妻・2名様】。

そして、『カーサ・エム』の中で待機していたスタッフ達が背筋を伸ばし、手を前に組んでゲストを迎える体勢を整え出した。

「到着、のようですな」

「ええ。そうみたい」

二人は視線を重ねた。互いにほんの一瞬見せる、真剣な表情。そしてそれはすぐにゲストを迎える笑顔へと代わる。

「『ちうそさま。お幾らかしら?』

「いいえ、……結構ですよ」

「ううん、遠慮しないで。これは『ビジネス』でしょ」片方の眉を上げて彼女は言つ。「私が必要なものを、あなたは提供した。そこには費用が発生するものよ

しかしトオルは首を振る。

「そう言つなら、あなたは僕の『ビジネス・パートナー』だ。『パートナー』からはお金は取れない」

『パートナー』?

彼女はちょっと不思議そうな顔で聞き返す。

「あなたの仕事がよければ、その後に仕事をする僕はきっと有利に

なる。僕の仕事がよければ、あなたは次回の顧客を捕まえやすくなる。僕らが互いにベストを頃くせば、どちらにとってもポジティブだ。なら、あなたの気付けのために一杯奢るのは『ビジネス』みたいなものじゃないですか？

類が、緩んだ。口元を持ち上げて彼女は言った。「あなた、面白いわね……」と。

「私、今岡倫子よ」彼女が名乗ったので、「僕は廣瀬トオルです。どうぞよろしくお願ひします」トオルも名乗りを上げる。失礼のないようへりへりだったのは、彼の勘がそうさせていた。多分、彼女はデキる女だ。敬意を払って、悪いことはない。

「それじゃ、ベストを頃くしてくれるわ

倫子はそう言つて、『お客様』をお迎えするため歩きだした。

トオルが一組目のお客様のパスタを茹で始め、タイマーを掛け、そしてソースの鍋を火にかけた頃に、本日最後のお客達を乗せた車が予定より10分ほど遅れて店の前に着いた。到着を待つている間、仲間同士で雑談などを交わしていた宝石店のスタッフは、小走りに自分の持ち場へと戻り出す。

『カーサ・エム』の入口の扉が開くと、「いらっしゃしませ」とスタッフ達が仰々しく頭を下げてゲストを迎える。

人数は、3人。

確かに、一人は『生魚が苦手』だったはず……。トオルは、カウンター裏の頭上の棚にマグネットを使って貼り付けておいた顧客の資料を再確認する。ゲストは女性3人。母と娘二人。記憶の通り長女が生魚NG。次女は未成年のためソフトドリンク用意。販売会は今回が初参加。（四方夫人、ご息女！　くれぐれも粗相のないように！）

「…………」

手書きの注意事項が『デカ、デカと書き込まれている。クレグレモソソウノナイヨウ』。こんなふうに書かれると、別にひねくれている訳じゃないが、逆にちょっと嫌な気分になる。いつだって、どんなゲストにだって、そんなことがないようにしているさ、と思つてしまふ。

鍋の中のパスタを箸でほぐしながら、トオルはちょっと舌打ちした。

そこまで言うなら一体どんな相手なのか見てやろうじゃないか、と彼は入口の人だからを見やる。

販売スタッフにいち早く取り囲まれる一番手前の女性。あれがきっと『四方夫人』だろう。その後ろに、肩くらいまでのセミロングの女性。身長は170cmちょっとあるだろうか？ 取り巻く男性

販売スタッフと比べても割と背が高くすらりとした20代前半の女性と、さらにその後ろにもう一人いるのだろうけれども、残念ながら最後の一人は人だかりで顔を覗くことは出来なかつた。

くれぐれも夫人。年の頃は50数歳だろうが、遠目にしてなかなか美しい容姿だとわかる。娘よりは低いものの、あの歳の女性にしては長身だし、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んだ、きちんと管理・維持された体型をしている。そして、びっくりするほど小さな顔。なるほど、これはお美しい。

してくれぐれもな娘たち。長身の娘の方が長女だろう。鼻筋の通った綺麗な顔立ちだ。全体的にスレンダーな印象。それと透き通るような白い肌と艶やかな黒髪は、丁寧にケアされているのだろう。パツと見て一部のスキも見つからない。形の良い眉と切れ長の瞳がちょっと冷たい印象を与えるものの、どこに出しても恥ずかしくない立派な娘であることは疑いようもない。

そして、次の方は。人波の間から長い髪を結い上げてクリップで留めた可愛らしい横顔が見えた。小ぶりの形のいい耳としゅっとした頸のライン……

その横顔は 美しかつた。

目元のメイクは控えめでまだあざけなさを残すが、母や姉を見ればわかる。きっと将来、この娘も目を見張るような美人になるんだろつ……。

と。その顔がふいにこちらを向いたのだ。そして、トオルを見付けて

微笑んだ。

まさか、美純？

『 ピッピッピッピッ ... 』

彼が驚いて目を見張るのとアラームが鳴り響くのはほぼ同時だつた。トオルの意識はその瞬間、急速に手元に引き戻される。ハツとなつて、慌てて鍋から茹で上がった麺を取り出すと、ソースと麺を絡めながら、（しまつたつ、ちょっとソースが詰まってしまった！）

とゆで汁を少しだけ足して調節する。

オリーブオイルをかけながら煽り、香りをたたせる。皿に盛りつけ、チーズを削りかけ、バジルを飾る。大成功！……の、ちょっと手前くらいの完成。とりあえず、胸をなで下ろす。

トオルは皿をゲストのテーブルに差し出し、今日のパスタのメニューの説明をした。

しながら、頭の中はもう全然違うことを考えていた。

ちらつと視線を横に流す。その視線に気付いた向こうが、わざと覗き込むように顔を傾けたのがわかった。ニヤニヤ光線がトオルの頬をチクチク刺してくる。トオルはそれが腹立たしいのと、悔しいのと、おまけにちょっと恥ずかしいので、思わず唇を強く噛んだ。  
……あんなガキンチョの横顔に、ほんの……ほんの一瞬だけでも見とれたとはッ！

しかもその瞬間の顔を、

あいつとか、あいつに見られた……。  
最悪だ。

トオルにとつて、本日最後のゲスト 四方親子 がテーブルに着いた。

四方夫人はまだ何人かのスタッフに声をかけられでは、にこやかに返事を返したり、書類にサインをしたりしている。じつやら商談の方はすこぶる順調だったようで、販売スタッフの表情はホクホクとしていた。

しかしてトオルの方はちょっと不機嫌そうな顔。というのもこの男、なんとも大人げないのだが、どうにかして美純にさつきの借りを返してやるうとばかり考えていたようなのだ。まったくの逆恨みなのに。

どんな小さな弱みでもいいから見付けるまでは田を合わせまい、と頑なに視線を避けてきたが、さすがに田の前のテーブルに座られた上、これから挨拶をしようといつ時になればそうもいってはいられない。

一体どんな顔をしてるのやら、と思いつと、どうしても悔しさが蘇る。たつた一回、あの瞬間を出来ることなら切り取つてどこかに捨ててしまいたい！ と考えてみたりする……。

しかし無意味な考えはいい加減、横にやらないと。息を一つ付いて切り替えると、トオルは『仕事用』の笑顔を作つて話し始めた。

「こんばんわ、四方様。」来店、ありがとうございます」

「こちらこそ 穏やかな笑顔をたたえて、四方夫人は言つた。「今

日はお招きいただき光榮ですわ」

「そう言つていただけると、自分も光榮です」  
トオルはゆつくりと頭を下げる禮をする。

夫人の言葉は一音、一音がはつきりとして非常に聞きやすく、けれども穏やかでそよ風に似た柔らかなイントネーションだった。耳

障りの良いそのリズムが、たった一言交わしただけでトオルの頭の中にしつかりと張り付いた。彼が知っているどんな声とも違った、とても特徴的で、一度聞いたたら忘れないような響きだつた。

不思議な感覚だつた。やさしい音に、聞き入つてしまつていたのかもしれない。だからか、

「何しろ、あなたのお料理、とっても美味しいと評判でしたから。今日は本当に楽しみにして来たんですよ」

「えつ……？」

その音<sup>声</sup>が予想もしていなかつた一言を紡いだので、自分でもびっくりするくらい驚いてしまつた。

な、なんでそんなことをこの人が知つているんだろう？　まさか、美純がそんなふうに母親に言つたのだろうか？

けれども。

「以前、この会に参加された奥様が何度もおっしゃつていたのを聞かされて。機会があればぜひ、と思つていたのですけれど、なかなかその機会に恵まれなくて残念に思つておりました。そこへ今回のお誘いでしょ。私、本当に楽しみにしてましたの」

ちょっと恍惚な笑みをみせて、四方夫人は言つた。

「ああ、……そうでしたか。なら、ご期待に添えるよう、今日は精一杯頑張らせていただきます」

トオルは応える。

その言葉、決して悪い気はしなかつた。

それにもしても、彼女の言葉はどれも本当に真つ直ぐだつた。

お世辞や社交辞令を使ひこなしたり、会話の駆け引きや裏をとつたり化かしたり。トオルの知る社会的地位の高い人々は、そういう言葉の冷戦を日々繰り広げる方々ばかりで、場合によつては夫婦間でも採り合いの耐えないような輩もいた。

しかしこの四方夫人は違うように思えた。実際のところ、トオルの考える通り多分そんなものは彼女にはないのだろう。確証はない

が、トオルはそんな気がした。

田を見ると何となくわかるのだ。きっとこの人は、感じたそのままを純粋に口にするタイプだ。

そのくせすゞいのは、発する言葉がどれも人を心地よくさせてしまうことだろう。

他人への嫌味も中傷も、その口からは出ないんじゃないだろうか？  
トオルはちょっとと反省した。四方夫人、どうやらかなり人好きのする人間らしい。考えてみれば、彼女は全然悪くないのだ。悪いのは、むしろあの書類の一言で変な先入観を持つて色眼鏡をかけたトオル自身である。

トオルはなんだか恥しくなつてしまつた。

これは、くれぐれも粗相のないようしなければ。

「さあ、今日は何をこゝ馳走していただけるのかしら？ 私、楽しみだわ」

トオルの心情の変化など知るはずもなく、四方夫人はすこぶる上機嫌に言った。

その様子は、大好きな番組が始まるのを今か今かとテレビの前で待ちわびる子供のようだ。

トオルは、まず乾杯のシャンパンを一杯とノン・アルコールのスパークリング・グレープジュースを一杯、グラスに注いで3人のゲストに。

「どうぞ」

「まあ、シャンパン～。嬉しい」

顎をコショコショされた猫みたいに幸せそうな顔をして、夫人は言つた。「ゴロゴロと、音まで聞こえそうだ。

「じゃあ、あなた達。乾杯しましょう」

そう言つて四方夫人は手にとったグラスを娘達に傾ける。

『ちんっ……』

その音を後ろに聞きながら、トオルは最初の料理を準備するため  
にカウンターの中に戻つていった。

トオルが今日の一皿目に選んだメニューはホタテのサラダ仕立てだった。

ホタテは半口サイズに小さく切りそろえ、フレッシュのハーブをちぎって合わせる。味付けはシンプルに塩・コショウのみ。鮮度の良いものが手に入ったときはこれだけで十分だ。好みもあるのでヴィネガーはあえて使わず、レモンを添える。仕上げは南イタリア・シチリア産のエキストラバージン・オリーブオイル。

本来であれば生の魚介料理は避けたかつた。長女は生魚が食べれない。ならば生の貝好きであるケースは考えにくいからだ。それでもこのメニューをトオルが選んだのには理由があった。

『魚介料理のメニューを多めに。夫人、魚介類がお好きです』

顧客インフォメーションの、四方夫人の部分にはこう書かれていた。

じついうことは複数人のテーブルではよくあることなのだが、<一方が希望するメニューでも他方にとつては苦手な食材が入つている>ことはままある。實に残念なことなのだが、その場合は大概<食べたい側>が折れて<食べれない側>に合わせるのが常だ。

けれどもそこにグループ内の人間関係や力関係が関わってくると話がややこしくなる。譲ったり、我慢したり、無理したり……。それがヒトとヒトとの関わり合いだ、といえばその通りなのだが、こうと言つてしまえば『日本人特有の』と言葉が付く。海を渡るところいつた感性は途端に意味を薄める。文化や習慣というのは本当に面白い。

今回の四方家の3人の関係に関しては『家族』であるからそいつた気遣いは無用なのだろうが、トオルが考えたのはホスト側である『ジュエリー・yoshika』のことだった。彼らにとつて最も重要なゲストは四方夫人だ。当然、夫人の嗜好には応えたいはず

だ。日本人の『魚介類好き』の99%は刺身好きと言つても外れな  
いくらい、日本人の魚介好きは『生』のモノに目がない。ここは寿司大国・日本である。ならば、応えられる範囲内で鮮度の良い『生・魚介類』をお出しする必要がある、とトオルは考えた。あえて『生・魚・NG』とだけ書いてあるということは、『それ以外の生魚介類はNGではない』ということだろう。長女もおそらくは食べられないことはないはずだ、とトオルは判断した。

しかし、違つた。

「『めんなさい。私、これ食べれない』

長女は片手で自分の皿を数回だけ前に押しやつた。

「えつ……」

トオルは口籠る。

「私、生の魚が食べれないんですけど、体調によっては魚介類全般の生モノが食べれないんです。と、いつか食べたくない時がある、というか。折角出していただいたのにすいません」

長女はトオルの目を見て謝罪すると、丁寧に頭を下げた。しまつた、とその時トオルは思つた。こういう可能性が頭に浮かばなかつたわけではなかつた。

彼はやりすぎたのだ。余計な気を回しすぎた。それで結局は全員を満足させる結果でなくなつてしまつた。彼のミスだった。

「美空、食べないの？」

四方夫人が声を掛けると、長女

美空は頷いた。

「今日はちょっと無理みたい。『めんなさいね。お母さんと美純は気にしないで食べてちょうだい』

「そう、……」

夫人は残念そうに顔色を曇らせた。美純も一度握つたナイフとフォークを置く。

余り良い雰囲気ではなくなつてしまつた。食事の始めとしては最悪に近い雰囲気だ。トオルは唇を噛んだ。何とか、挽回しないと…

.....。

すゞい速度で頭の中のパズルのようなものが組み替えられていく。言葉、食材、メニュー。この沈んでしまった空気を盛り返して、尚且つ長女にとつて満足のいくお皿。まるで探偵が推理するみたいに情報が駆け巡る。

言葉が、口を付いた。頭の中に完成に近づきつつあるパズルの、最後のピースを手に入れるために。「火の入った貝類は、お召し上がりになりますか？」

美空の顔が上向いた。トオルの目を見る。

「…………ええ、本来は食べれない訳ではないので。でも、本当に大丈夫ですから氣を遣わないでください」

「そう言われて氣を遣わないコツクは、コツク失格ですよ」無礼にならない程度に口角を上げて、トオルは微笑んでみせた。

「お皿、一度失礼します。ほんの数分だけお時間下さい」

言つとトオルは美空の前菜の皿を引いた。そして素早くカウンター内に戻ると、フライパンを火に掛け、オリーブオイルを流し、二ン二クを一欠片投げ込んだ。

長く時間を掛けては意味がない。この間も、夫人と美純の手は止まっているのだ。二人と一人があ互いに氣を遣い合う時間は出来るだけ短くしなければ。

まな板の上にしめじと、予め下ゆでしておいたジャガイモを広げる。手早く半口サイズに切りそろえて、軽く塩を振る。フライパンの様子を見た。二ン二クの香りが立つてきて頃合だ。トオルは今切ったジャガイモとしめじを素早く放り込むと、それらを炒め始める。しめじの香りが立つ。二ン二クの香りと合わさり、絡み合つ。ジャガイモの表面に色が付いてきた。そろそろか、とトオルは次の工程に移る。

さきほど美空に出したホタテを、フライパンの中に滑らせる！するとキノコと二ン二クの香りにホタテの香りが重なって、なんとも言えない複雑な香りが立ち上つた。フライパンを振り、全体の

加熱を均一にするよう務める。激しく振るとジャガイモが崩れ、食感がモゴモゴとした舌触りに変わるので、あくまでソフトに。

そうしてホタテにほどよく火が入ったのをみると、トオルはカウンターの後ろからあるものを取り出した。

それは、さつき彼が気付けで口にした、『シェリー酒』だった。

ピッ、とフライパンに注ぎ込まれるシェリー酒。途端に青白い炎がフライパンを包む。芳醇な香りとその派手な様子に「おおっ」と店内のどこかで声が上がった。すぐにアルコール分は氣化してしまうので、実際に火が付いている時間は数秒だ。そしてフライパンを火から下ろす。

きゅうりを縦にスライスして、両端に互い違いの切り込みを入れる。片側の切り込みに、反対側の切り込みを噛ませるようにはめて、筒状のケースを作るとその中にフライパンの中身を入れる。上にはハーフカットのミニトマトとセルフィィー（飾りハーブ）。皿にバジルを使ったソースを落とし、仕上げる。

トオルはカウンターを出た。時間にしたら5分はかかっていない。そして手に持ったお皿を美空の前に差し出す。

「お待たせしました。ホタテとキノコのソテー、シェリー風味です」出来立てのその皿から上がる香りは、彼女の表情を柔らかくした。

「ありがとう。私、これなら食べられるわ」

「そうですか。よかつた」

トオルはホツと胸を撫で下ろす。何とか事なきを得たようだ。万が一、この作り直しを彼女が食べれなければ、その時は素直に頭を下げるつもりだった。

「あら、そつちのお皿もとつても美味しいそう。何だか交換してほしいくらいだけれど……」

四方夫人が向かいに座る娘に呴く。

「もう、お母さんっ。そうしたら、私が食べられなくなっちゃう」

「ふふふ。そうよね~」

「口口口と笑う四方夫人に、トオルはぎょっとする。折角、執り成した場をお願いだからかき回さないで欲しいものだ。

「…………」

その横で大人しく座っているように見えた次女は、ちらりとトオルを覗き見た。何か言いたそうな顔でもつて、ちらつちらつと。トオルはそれには『とっても冷たい目』で応えておく。

（お前は何も言つんじゃない。ひとつ言も喋らなくていい。……いーいな？）

トオルの無言のプレッシャーに、たじたじとする美純であつた。その後の食事は滞りなく進む。一皿目のパスタは、誰かさんの好みを十二分に反映した『手長エビのトマトソース』。皿をキラキラさせて食べる様子を眺めるのはちょっとと氣分が良かつたし、三皿目に出了した『本マグロのカツレツ、マスタードソース』に夫人は何度もため息を漏らしていた。メインディッシュは『牛フィレ肉とフォアグラのソテー、マンゴーとバルサミコのソース』を用意した。夫人と長女のグラスに赤ワインを注ぐ。ワインと料理とを交互に口に運び、顔をほころばせる四方夫人は言った。

「素敵……。なんて美味しいワインかしら」

うつとりとした瞳で傾けたグラスをのぞき込みながら、そう言つた。

「でも、……実はそんなに凄い銘柄ではないんですよ  
「まあ、こんなに料理と合つお味なのに?」

四方夫人は目をまんまるして驚いた顔をした。そうするとまるで大発見をした時のような子供のように見えてとても可愛らしい。また夫人の雰囲気にはそういうたちよつと幼い、それでいて純粹な空気がピッタリと合つた。不思議な空氣感のある人だ、とトオルは思った。

「ついつい、『良いものには良いものを』と考えがちですけれど、良いもの同士は互いの個性を相殺し合つてしまふことが多いですから」そう言つと、トオルは少しずつ片付けを始めている宝石類のショーケースの方を指差した。

「今日の僕は、あくまで引き立て役ですから。メインディッシュの付け合せの葉っぱと同じ係りです。ですからほじほじの銘柄を『』用意してみました」

小さな笑みを浮かべ、夫人を見た。夫人はふん、と微妙な反応をしていたのだが、ふとトオルの左胸に付いていた葡萄のバッヂを見付けて『ああっ』と納得した。

「シェフはソムリエさんなのね。失礼しました。すこく素敵なおワインのチヨイスだわ」

「いえ。そう言つていただけると光榮です」

軽い笑顔で答えた。

その隣で、『えつ?』と小さく反応していた美純には、本日のところは無反応で済ましておく。トオルは四方夫人が訊ねてきた料理やワインのちょっとした疑問に一、三答えたあと、再びカウンターの中に戻った。デザートの準備を始める。

デザートのメニューは『カーサ・エム』の定番の一品。

『スイート・カプレーゼ』と名付けたその一品は、トマトを使つ

たちよつと酸味のあるジヨーラートとバジルの薰りが華やかなシャーベット、それにリコッタチーズを使ったセミ・フレッドを合わせた冷たいデザートだ。赤・緑・白の三色がイタリアンカラー鮮やかにひとつ皿の上に盛り込まれる。仕上げにベリーのソースをデコレーションして準備OKである。

「まあ」と「わあ」と「ふわわああ」とほんのちよつとずつ違つた、けれども三人共の思わずこぼした感嘆の声にトオルは満足そうにした。デコレーションを華やかにしたお皿は、この驚きや感動も美味しさの一部みたいなものだからだ。

女性三人はそれから口々にその見た目や味わい来形容し合つて、美味しさを共有していた。

その間、トオルはカウンターのこつち側でコーヒーを入れる。引き立てのコーヒー豆をネル・ドリップでゆっくりと抽出する。そうしている間、トオルはぼんやりと四方家の家族のやりとりを見ていた。『女三人よれば姦しい』なんて言つけれども、この家族が見せる姦しさはずいぶんと穏やかだ。その大きな一因は、母である四方夫人の独特的な雰囲気であることは間違いない気がした。彼女の発する『オーラ』とでもいうか、空気感は本当に不思議な物があつたからだ。凛としていてスキがないのに柔らかで、芯があるようで掴みどころがない。『天然』というより『自然』に近い。ただ、ともかくあの形をした女性はそうであるのが当然、みたいなピタリとハマる雰囲気。『四方夫人はああであるべき』みたいな、不思議な説得力があった。

それと同時に、ちよつとした違和感も感じていた。そちらの方も上手く言葉にはできなかつたが、あの三人を見ていて何故だか少し腑に落ちないところがある。かといって、不自然というほどでもない。だからトオルはそれ以上は深く考えずに、煎れたてのコーヒーをカップに注ぐとテーブルに向かつた。

本日最後のゲストのお帰りだ。

「シェフ。どうもありがとうございました。御馳走様でした。本当に美味しいかったですわ」

「ありがとうございました」

初めてサービスした四方夫人が一体普段はどのくらいお酒を飲まれる方なのかなは知らないが、今夜はほんのりと頬が赤くなるまでワインを楽しまれて上機嫌であった。

「今度はぜひ、夫も連れてきたいのだけれど。……構わないかしら？」

「もちろんです。お待ち申し上げております」

「ありがとうございます」

そう言い残すとスルッと車上の人になる。そういう姿まで様になるのがこの人の凄さんなんだろうか？ヒトオルはちょっと思う。「シェフ。気を遣つていただいてありがとうございました。また伺います」

丁寧に頭を下げてお礼を言ひ、美空。確かに大学生といふことだつたから二十一、二くらいの歳のはずだが、幼い頃からの嬢からなのかびつくつするくらい立ち居振る舞いが板についている。まさに令嬢という感じだ。やや冷たい雰囲気はあるものの、それも含めて彼女の魅力的だと思えば納得できる。フローリングの床にヒールを響かせて出口のドアをくぐつていった。

最後に続く美純は、先の二人に見付からないように、胸元で小さな『バイバイ』をしてみせた。これはこれで彼女らしい。トオルはやれやれと口元をほころばせ、ウインクして応える。

が。

「美純ッ！ ちゃんとご挨拶もできないの。失礼な娘！」

突然、鋭い叱責の声が響いてトオルは唖然とした。前を歩く美空

の表情が険しくこちらを振り返る。その視線は、美純一点に刺すようになっていた。美純は『ハツ』となつて青白い顔をしてトオルの方に振り返った。

「あ、ありあと……がざいましッ！」

水飲み鳥みたいなきこちない会釈をすると、美純はそのままの硬い表情で店をする。

外から冷たく言い放つ声が聞こえる。「全く、どうしようもない子。恥ずかしいわ……」その言葉を最後に残して車は走り出した。トオルはちょっとだけ理解した。

あの三人を見ていて感じた違和感が何か…………。

週末の営業が終わり、定休日を挟んだ火曜日の夜だった。営業時間の中頃を過ぎた頃、彼女が店を訪れた。

力チャ

「いらっしゃいませ。あつ……」

入ってきたお客はトオルに向かい目顔で小さく挨拶をして、それからカウンターの空いているひと席に座った。

四方 美空だった。

「こんばんわ。先日はどうもありがとうございました」トオルは小さな会釈で挨拶をする。

「いいえ、こちらこそ」

美空はそう言つと口元だけの笑顔を作つてみせた。その表情がとても板についたものだつたから、トオルはちょっと驚いた。笑つてみせる必要がある、そういう生活をもう何年もしてきた人間のする年季の入つた『魅せる笑顔』のようだった。

彼女はまだ、20代前半なのに。

「先日はじちさまでした。お料理、とても美味しかつたです。それに母がすゞく気に入つていて、帰りの車の中でも何度も『また行きましょう』って」

「そう言つていただけると何よりです。よろしくお伝えください」「はい」

そう遣り取りしたあと、トオルは彼女にメニューを差し出した。それに美空が目を落とす前に、先に一言声を掛ける。

「……先に、何かお飲み物をおすすめ致しましょうか?」

美空はしばらく無言でしたが、「そんなにお酒は強くないんです

けれど、軽めのものなら……」

「口当たりの甘いモノの方がいいですか？ カクテルも材料があるものだつたらできますが」

美空は首を横に振つた。

「ごめんなさい。甘いのはちょっと苦手で。それに私、割つたり、混ぜたりする類いのお酒が苦手なんです」

「なるほど。……でしたら、ちょっとお待ちください」

冷蔵庫を開けて中から一本の瓶を取り出す。

それは先日のイベントで見事彼の窮地を救つた一本だつた。そんな縁もあつたからだろう、トオルはそれを美空に紹介することにした。

「なら、シェリーにしませんか？ スペイン産のポピュラーな食前酒。ワインより3～4度、アルコール度数が高いだけですし、伺つた感じだとこいつほうがいいのかなって思います」

再び美空と顔を合わせると、トオルはそう勧めてみた。

「そう。……ええ、そうします」

答えると、美空はまた口元だけの笑みを彼に送る。

トオルはカウンターの上の棚からグラスを一脚、選んだ。シユツとしたフォルムのシャンパングラスを一回り小さくしたようなモノだ。それによく冷えたシェリー酒を注ぐ。

「お待たせしました」

美空の前に出したグラスは、ガラスに葡萄の房の装飾を削り込んだ一脚だ。中に冷たい液体を注ぐとガラスの表面が曇つて葡萄の絵が浮き出して見える、手の込んだ造りの物だつた。

「ありがとう」

美空はグラスを傾けた。

確かに、まだ大学生だつたはずだ。けれどその身のこなしは随分と様になつていて見えた。『飲み慣れてる』というよりは『よく訓練されてる』といった風か。だが、同世代とグラスを合わせるときは浮いた存在なのではないだろうか。ちょっと気になつた。

美空がメニューに目を落としている間、トオルは別のお客の料理を仕上げて提供した。

ときどき彼女の様子を覗きながら素早くメインディッシュを盛り付ける。ニュージーランド産の仔羊のローストをバジル風味のバターソースで。肉の表面が淡いロゼ色の、ちょっと満足の出来上がりである。

今日の美空はやや落ち着いた装いだった。ライトグレーのジャケットにサックスブルーのブラウス、白のロングスカート。足元がサンダルくらいならちよつと気も許しやすいが、今夜の彼女は皮のパンプス。まあ、それが美空らしさなのだろう。テリトリーのある女性、といった空気を感じさせる。

こういう雰囲気の女性にはトオルは深入りしないようにしていた。自分のリズムを乱されるのは好きではないだらう。適度な距離を保つて、美空のタイミングが整うのを待つ……。

彼女の目がメニューから離れたのを合図に、トオルは声を掛けた。流れるよつなりズムで淀みなく注文をする彼女は、ここでも『慣れている』というより『よく訓練されて』いた。余り悩むこともなく前菜と手打ちパスタをオーダーした。「少し軽い食事になりますよ」とトオルが補足すると、「そこまでお腹が空いている訳ではないので」と答える。そしてトオルが前菜の準備に取り掛かると、美空も何かの書類を取り出して料理が出来上がるまでの間の時間を無駄なく使った。

あのちょっと『ほあほあ』な美純と比較してしまつからか、やはり冷たい印象があった。

一杯目が終わると「白ワインを……」とそれだけ言葉にして、あとは引き続き手元の紙に目を落とすばかり。こういう雰囲気の女性はたくさん見掛けるが、こういう雰囲気の女子大生はちょっと見たことがない。不思議な、というより不可思議な空気感の女性だった。出した料理を淡々と食べる様子もまた機械的で、冷たい印象を覚え

た。

「料理はお口に合いましたか？」

「ええ……。前回同様、すごく美味しいです。」

そう答える美空の顔は、小さく微笑んだ。今日、訪れてから三回目の笑顔は、他の二回と全くおんなじ造りの笑顔だった。その表情から満足の度合いを得ることは出来ない、見事な役者ぶりだ。

「もしよかつたら、ドルチェやコーヒーをお薦めしましょうか？」

「ううへん。そう……したらコーヒーだけ頂けますか？」

「もちろん。ちょっとだけお待ちください」

そう言つてトオルはポットを火にかけ、湯を沸かし始める。

せつせとトオルがコーヒーを入れる準備をしている間に、美空を除く最後のお客が席をたつていった。そうして店内にはトオルと美空と低めの音のBGMだけが残つた。さつきまで店内にはトオルと美空と低めの音のBGMだけが残つた。さつきまで店内にはトオルと美空と低めの音のBGMだけが残つた。なんて耳に入らなかつたのに、急にそれがピアノとバイオリンのインストゥルメンタルだと氣付く。それくらい、店内は静かになつた。湯が湧くシユウシユウいう蒸気の音が折角のBGMを邪魔した。ひきたての豆をドリップバーに重ねたネルに落とす。湯を注ぐと、コポコポッと豆とネルを通つてコーヒーがドリップされていく音がカウンターに響く。さつきまで書類を眺めてばかりだつた美空は、今はトオルの手元をじつと見ていた。一人分の視線を浴びながら、いつもと同じペースで黒褐色の液体はガラス製のサーバーに落ちていく。辺りには香ばしい薰りが漂い始めた。

ふと、美空が口を開いた。

「美純……以前にもここに来たことがあるんですね」

「えつ？」

ほんのちょっとだけトオルの手元に力が入って、湯を注ぐペースを乱した。

「……どうして、そう思われるんですか？」

「傘が」

そう言つて美空は入口の方にチラシと皿をやつた。そこには確かにあの子の赤い傘が立てかけてあった。

あの雨の夜に忘れていた、美純の傘。

トオルは訊ねた。

「あれが妹さんの物だと、どうして？」

美空はトオルの方を向き直つて答える。

「あの傘、フランスの小さなメーカーが造つた物なんです。職人が一本一本手で造つているから生産本数なんて年間100本くらいの本当に小さなメーカー。だけど母はこの傘が大のお気に入りで、フランスに行つてはいつも直接出向いて購入してくるんです。自分の分と、私の分。それに美純にも」

「…………」

「日本には、まず入つてこない物です。ましてやこんな小さな街では今迄見かけたこともない。色だつて彼女の物と同じ赤。多分、間違いない……」

カップに注いだコーヒーを美空に差し出した。彼女はまた笑顔で「ありがとう」と言つた。今田、四回目。相変わらず静かな微笑みだつた。

トオルはどう答えるべきか迷つた。

まあ、事実は美空の言つ通りだし、彼にしてみればそのまま一つ返事で返せばよいことだった。けれど、何故かトオルは言い淀んだ。引っ掛けっていた。あの日の帰り際、垣間見た美空と美純の関係：

……。

そして彼はほんの小さな嘘を付いた。

三分の一だけ嘘。三分の一は本当のこと。あと三分の一は彼の

優しさをませた、ちょっとだけ違う事実を捏造する。

「……実は、前に僕が近くのスーパーで買い物をしてきた帰り、道に落とし物をしちゃったことがあつたんです。アンチョビの缶詰めだつたかな、それを後ろを歩いてた妹さんが拾つて届けてくれたんですよ。確か、一、二週間くらい前のことです……」

えつ、と美空は言つて、コーヒーのカップを持った手を空中で止める。

「そう、……なんですか？」

「昼過ぎから土砂降りの日でした。ちょっと切らした物を買い足すだけだからと傘も差さずに出かけたら、すごい雨。慌てて走つて帰つてもんだから、どうも途中で落としたみたいで。それを親切に届けてくれたんで、僕は彼女にコーヒーを一杯。雨の中、わざわざそうしてくれた彼女をそのまま帰すなんて僕には出来なかつた」

そう言つてから、トオルは笑顔を作つてみせた。それは美空がやるのよりも、何倍も上手に出来た『プロ』の作り笑顔。それで美空はカップを皿にした。彼女のまわりの空気が少しだけ緩んだ気がした。

「良くないことだつたら、すいません。でも、無理に引き止めたのは僕なんです。けれど、引き止めたせいで今度は彼女、傘を忘れていつてしまつた。帰る頃には雨は止んでいて、それで……。悪いことをしちゃつたな、と思つていたんです」

「もう、あの子つたらだらしないわ」

美空はため息をついて言つた。その様子を見てトオルは、あともう一つだけ嘘を付くことにした。

「帰りがけに『また、おいで』なんて僕が言つたのがいけなかつたんですよ。彼女、ブンブン顔を振つて『私、まだ高校生ですから、こんな所……』つて。それで慌てて走つて帰つちゃつたんですよ。最近の高校生はそういうところ頼着ないのかなつて思つて言つたんですけれど、彼女はちょっと違つたみたいだ……」

トオルはまた笑顔を見せた。それでとうとう美空は観念したようだつた。

彼女は胸に溜めていた息をゆっくりと吐き出した。

「そうですか。あの子がそう、言いましたか……」

そう言ってから彼女は少し冷めてしまつたコーヒーのカップを口に近づけた。

トオルも美空も、それ以上その話題には触れなかつた。彼女からは他に会話はでこなかつたし、トオルの方も色々喋るのは得策ではないなと判断したせいで、また店内はBGMばかりが響く空間に変わつてしまつた。今はアコースティックギターのミディアムスローナ曲が流れていた。出来ることならもうちょっととアップテンポな曲の方がトオルは救われたのだが、今更曲を変えるのもそれはそれでおかしな感じなのでトオルは諦めた。

結局、それ以上の会話がないまま、美空はそのまま『カーサ・エム』をあとにすることになる。

店を出でていく背中を送り出す際、トオルは気になっていた事を一つだけ美空に訊いた。

「あの、みあ……、じゃなくて」

「？」

「いや、妹さんの」となんですかけれど、ちょっと気になつた事が…

…

「えつ？ 美純が何か？」

「あ。いえいえ、そう大したことではないんですけど」大袈裟にならないよう、トオルは手を振つてみせる。

「……ん？」

「ただ、ちょっと気になつたんです。彼女、慌てたり緊張したりする」と、吃つたり上手く喋れなくなつたりすることがないですか？」

美空の田の色が変わつたように見えた。そのトオルの問いに、彼女はしばらく答えなかつた。

少しだけ振り返つた顔がじつとトオルを眺めていた。その表情はちょっとトオルを不快に感じていても見えてとれた。口元がキヨシヒ力を帶びていた。

そりやそうだ、とトオルは思い直した。美空とは出合つて一度田、しかも『初対面ではない』程度の面識しかない。その割に彼はだいぶプライバシーに踏み込んだ質問をしてしまつた。これはちょっとやりすぎたな、とトオルは反省する。

「……すいません。余計なことでした、忘れてください」

出来るだけそつと話題を引つ込めようとした。けれど美空はそれをせしてくれなかつた。。

「ねえ……あなた、どうしてそれを？」

「えつ？」

「どうして美純の癖を、あなたが？　何故、そんなことを知っているの……？」

美空はゆっくりとトオルに向き直った。そしてじつと彼の目を覗き込んでくる。

探るような、一種冷たさを感じる視線だった。美空の表情はさつきまでとは違っていた。トオルは自分の迂闊な発言を嘆くとともに、そんなふうに他人を見る美空という女性をちょっと異質にも感じていた。距離をとつた人間関係をするタイプなのだろうか。会って間もない彼女がどんな性質なのかはわからないが、少なくともトオルが壁を感じるくらいだから友好的な性格ではないのだろう。

その感じたままが表情に出ないよう、トオルは務めて変わらぬ様子で答える。

「あの日の帰り、お出かけの準備の整った四方夫人とあなたからちよつと遅れて妹さんがこの店を後にしようとしたときに、そうだったんです。慌てたのか、上手く言葉が出なかつたみたいでした」

出来るだけ表情を崩さないように保つたポーカーフェイスが果たして実つたかはわからなかつたが、トオルの答えを聞いた美空が、それまで発していた警戒的な空気を幾分和らげたように見えた。

「そう……」

視線がトオルから放れていった。

「あなた、すごいのね。あの短い間のことなによく見ているわ。びっくりする」

そう言って目を細めた美空。トオルは小さく一息ついて続ける。「そういう商売ですから。他人の変化や異常に敏感に反応してしまう。……自然と、そうなつちゃうんですよ」

「ふうん、そう……ですか」

本当はそれだけではない。美純と初めてあつたあの夜だって、彼女はそうだった。けれどもそれは言わないでおいたほうがいいのだろうと、トオルは何かを飲み込んだ。

「あんまり、言いたくはないんですけど……」

そう言いながら美空は言葉を切らなかつた。視線だけは遠くの方に向けたまま。

「あの子、小さい頃はそうでもなかつたんです。昔は明るくって、よくしゃべる子でした。まわりのみんなもあの子のことを良く思つていて、だからあの子の周りはいつも明るく賑やかでした。だけど、小学生になつた頃くらいから、それはちょっと変わつてしまつた」

美空の視線はすつと足元に墜ちる。アスファルトの一点だけを見つめて、そこに書いてあるものを読み上げるような感情の少ない口調で淡々と言葉を走らせる。彼女の記憶の中の美純がどうと語られる。

「四方の家に生まれた以上、子供の頃から人との付き合いは避けては通れません。四方は大きな家です。父の仕事の関係で、いつも家には多くの人が出入りしていました。けれど父や母は多忙でなかなか家にいることがなく、代わつて私達がご挨拶やご接待をする機会も少なくはなかつたのです。接待といつても招待されて食事をご一緒する程度ですが、そういうつた席に招かれると美純は幼いこともあつてかなか上手く振る舞えなかつたのです」

トオルは美空の横顔をじっと見ていた。彼女は話している間じゅう、表情をほとんど変えなかつた。口調と同じく淡々とした表情をしていた。

「上手に物を食べれない。上手に物をしゃべれない。挨拶もほどほどに食事に手を付けてしまつ、一息に食べて会話をするどじろか満足すると眠つてしまつたりもする。接待の趣旨を理解しようとはしませんでした。勝手気ままに振舞つて、結果、父の顔に泥を塗つた。そして、なかには父と仕事のお付き合いを解消する方もいました」

トオルの見ていた横顔が、ふつとトオルの方を向いた。その目には何か深い感情があつたが、その全部は表情に表れることがなかつた。多分、何分の一に小さくちぎつたその感情の欠片が、ほんの小さな一部だけ美空の中から吐き出されてくだけだ。内に溜め、表に

出さない。彼女はそういうタイプのようだ。

「私は父の負担になることは絶対に許してはならないと思い、美純を叱り、しつけました。少しずつですが彼女の行動も変わっていつた……。だけでもナーや振る舞いをキチンとさせて、問題が残りました。あの子は行動と思考が上手く一緒に作動しなくて、緊張するといつも吃ってしまうようになつたんです」

「そなんですか……」トオルは答えながら、何気なく美空を観察していた。

美空はトオルの視線を感じることなく呟く。

「欠陥品だったんですね、美純は。あの子は四方の家には向かなかつた……」

そういう美空を、トオルはなおもじつと見据えていた。家族間のことに対して自分が何かを言うべきではないのかもしない。けれど、その言葉は全く彼の胸には落ちていかなかつた。

「欠陥品……」

全くと言つていいほど、彼はその言葉を受け入れることができなかつた。

今もまだトオルの目の前には美純の傘が残っている。

銀色の柄。白の縁どりがアクセントの澄んだ赤い傘。トオルはそれを、てっきり美空が持つて帰えるのだとばかり思っていた。だが彼女はそうしなかった。

『ちゃんと預かっていただいていたお礼を言わせないといけませんから。美純には自分で取りに伺つよう言つておきます』

そう言つて昨日の彼女は帰つていった。おかげでトオルには、もう一度美純と会わなければならぬ理由ができてしまった。だが正直、今は氣乗りがしない。彼女の顔を見た時、一体自分はどんな表情をしてしまうか見当もつかない。

自信がないのだ。いつも通りの顔で彼女を向かえ入れることができるか、不安なのだ。

確かに職業柄、感情を表情に出さないよう気を配ることはそれなりにできるつもりだ。ただ、今回のはいつもと事情が違う。

『欠陥品だったんですね』

そんなふうに自分の妹を言つてしまつ人間に、トオルは今まで出会つた事がなかつた。そして、そんなふうに家族のだれかに扱われる人間にも出会つた事はなかつた。

あの真っ直ぐ前しか見れないような性格も、どうしようもなく傷つきやすい心も、彼女が純粋だからこそなのだ。不器用だけど、どうしてか憎めない。四方美純という存在はトオルからすればかなり好感が持てる部類の人間なのだ。けれど彼女の姉からすれば、そんなの子は家族として不適格な部類の人間らしい。

美純は『家族』という愛されるべき対象の一人から愛情を受けることが出来ずに育つた。その事実を知らなければこそできた自然な対応も無難な距離感も、多くを知つてしまつた今、トオルには前と同じようになんて出来るとは思えなかつた。言葉や行動の端々に同情や憐れみが滲んでしまう気がする。だが、それを美純が望んでいる筈はないのだ。なら、どうすればその感懐を押し留められるか？そんなことトオルには到底見い出せやしなかつた……。

彼は思つた。

うまくやれるだらうか？ 彼女の目を見て、ちゃんと顔を会わせられるだらうか？

考えて、深いため息が出た。

多分、無理だ。もう、こんなにも心がざわめいている。穏やかな午後の街を店の窓から眺め、その胸のざわつきが閑かにならぬかと願う。けれど今日の長閑な街の景色とは裏腹に、心の中は今もずつとざわづいていた。

もう、すでに表情は暗く沈んでいた。鏡なんて見なくともわかるくらいに。

作り笑いなんて、もともとできる方ではないのだ。そんな彼いつも接客で心がけているのは、自身の感情を鈍化させることだつた。普段よりも感情の起伏を押さえる事で、それが表情に出るのを押さえるようにする。けれどその方法はポーカーフェイスが苦手な者のする防衛策みたいなものだ。対照的な一つの感情をうまく飲み下して泰然自若としていられる人間なら、もつとうまくこなせる筈なのだ。けれど生憎とトオルはそういうタイプではなかつた。

一度落ちてしまつた感情の濁流からは、もがいてもどうにも抜け出せそうにない。美純を傷付けたくない。だけど、美純を傷付けてしまつに違ひない。

できることなら、今日だけは美純の顔を見たくないと思つた。  
けれど予感があつた。彼女は今日、やつてくる。おそらくここにやつてくる。その確信に近い予感がトオルの胸中をなお一層重苦しくさせていた。

『カーサ・エム』はいつもと変わらない。そして、ここからトオルだけいなくなることはできないのだ。

17：30の「ティナーオープン」ちょっと前に、彼女はやってきた。入口のドアに掛かってまだ「Close」のままの看板を気にするでもなく、スルスル何くわぬ顔で店内に入り、トオルのそばまでやってくる。

そして彼女は手に持った荷物をカウンターの上に置き、一度丁寧に頭を下げるからトオルに話しかけた。

「この前は本っ当にありがとうございました。おかげで助かったわ~」

今岡倫子はそう言つてにこやかに笑顔を見せた。

今日の彼女は丈の長めの紺のカーディガンに白のパンツ、パイン柄のサンダルといった装い。仕事を外れてもあまりラフになりすぎないのが彼女のスタイルなのだろうか。落ち着いた色がベースのカーディネイトが倫子にはよく似合っている。

「あの時は一体どうなることかと思つたけれど……あなたの咄嗟の機転！ 私、びっくりしたわ」

「そんな、大したこととはしてませんよ」トオルは小さく首を振つて苦笑いをみせる。

「大したことよつ！！」

しかし倫子は目をまん丸くして反論した。

「四方の家つていうのは私達にとつたら本っ当に重要なお客様なのよ。それを満足して帰すのと不満を残して帰すのじゃ、大違い。例え向こうの方々が気にしてなくて、いつの上の方が黙っちゃいないわ！」

倫子は顔の表情を何度もくるくる変えながら喋つた。その顔が口と同じくらいに雄弁なのにトオルはちょっと驚いていた。このあいだ会つたときもさうだったが、彼女はどうやらじりじり喋り方をする女性のようだ。

「あれは……正直、反省してるんです。ちょっと攻めすぎたな、つ

て

「えっ？」

「いや、僕は長女が生の魚介が食べれない可能性は予想できていたのに、夫人の嗜好の方を優先したんですね。犯すべきじゃないリスクを犯した。あれは僕のミスなんですね」

トオルは顎を指でかきながら、申し訳なさそうに小さく笑った。

「たまたま、上手く解決出来た。……でも、たまたまだ。プロなら

あんな事態に陥らないよう、もつと慎重にやるべきだった」

「そんなの！ いっちが事前にちゃんと確認してないのがいけないんだから」

「いいや、あれは僕のミスだ。迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

「あなた……」

倫子は言つて一息吐いた。「もう、」と小さくほほと表情は呆れたみたいになる。「そんなつもりできたらんじゃないわよ。まったく、おばさんにお礼くらい言わせなさいな」

「お礼なんて、そんな……」

肩をすくめて首を振つた。トオルはカウンターの脇を一度出ると、入口の扉に向かう。扉を少し開けると、表側に掛かっていた小さな看板をひっくり返して「Open」に変える。

そして戻つてくるとカウンターのひと席を引いた。そこに倫子を促した。

「でも、あなたは気付いてないかもしれないけれど、あの時うちの主任なんて動搖してあたふたするばかりで。おまけに「あわわ」なんてみつともなく言うもんだから、大変な事態なのはわかっていたんだけれど、正直私おかしくて陰でほくそ笑んでたのよ。まったく、ちょっとはあなたを見習つて欲しいわよね」

倫子はトオルに促されるまま席に着いた。彼女を座らせると、トオルはまたカウンターへと戻つていく。

「そう、今日はその主任の使いでもあるのよ。大変感謝しております  
すと、伝えてくれって言われてきたわ。それと……」

倫子はさつきからカウンターの上に置いていた荷物から何か取り  
出した。それはトオルにとつては見慣れたサイズのビンだった。

「これは私からのお礼。あなたにはあなたの事情があるかもしれな  
いけれど、私にだつて事情があるのよ。だから、ちゃんと受け取つ  
て頂戴」

そう言つて倫子はトオルにそのビンを差し出した。

それは、シャerry酒だった。

「『アモンティリヤード』！ へえ、すごい。よく手に入りました  
ね。僕はこの界隈で売つているのを見たことがないですよ  
受け取つたそのラベルをじっと見つめながら、トオルは語り。  
シャerry酒のなかでも熟成したタイプのその銘柄は、飲み口の良さ  
よりも飲みごたえの方を重視した一本だ。値段だつてそこそこする  
はずだし、何よりこんな嗜好性の高いものがこの『都會じゃない街』  
で手に入るとは思えない。

「どうしたんですか、これ？」

「ちょっと、あなた！ おばさんはインターネットで買い物もでき  
ないと思つてるんじゃないの？」急にいたずらっぽい表情をして倫  
子が言つた。

「いや、別に。やうこいつもひで言つたわけではまったくないんで  
すけれど……」

なんだか立場の悪くなつたトオルは、慌てて別の話題を探した。

「……ああそう、一つ聞きたかったことがあるんです」

今、咄嗟に思いついたそれを、さも前から気になつていていたようこ  
言つた。倫子には果たして見抜かれただろうか？

「四方家つて、もしかして資産家の家なんでしょうか？ かなり立  
派な豪邸に住んでるようですし、一体、どんな事業をしている方な  
のかご存知ですか？」

トオルの問いに、倫子は口を大きく開けた。またも目を丸くして

驚いている。

「ちょっと、あなた……。」この界隈で飲食業をやっていてあんな大きな会社の事も知らないなんて、営業努力が足りてないんじゃない？」

？」

「そんなことは……すいません」

「もう。別に謝つて欲しくて言つたんぢゃないわよ」

倫子は苦笑した。

「聞いたことない、『株式会社四方トレー』って会社？」

「いいえ」

「そう。この街じゃ一番の大会社も、あなたに掛かつちゃ形無しだのね」

「そんなふうに言わないで下さじよ」

トオルは苦い顔をした。

「馬鹿。皮肉を言つてるんだから傷ついてもらわないと困るのよ」

またも倫子は苦笑した。今度はさつきよりも大きく。

それから彼女はちょっとと考えた顔をして、次いで何か思いついた

表情になると、何故か脈略なくこんなことをトオルに訊いたのだ。

「……ねえ、スーパーで一番売れてるモノつて、なんだと思う？」

あんまりにも突然で「はあ？」とトオルが怪訝な顔をして、倫子は氣にも止めなかつた。彼女はトオルがその問い合わせを出していくまで、「一二二二」しながら待つていた。

「ええ～と、う～ん……一番、ですよね？ 生鮮食品のよつな気がするけれど、野菜……ですかね？」

「ぶー」

「あ～。じゃあ、惣菜かな？」

「ぶー」

倫子は下唇を突き出して意地悪つぽく言つ。

「もう、ヒントもないんぢや正解なんてわかりませんよ。……いや、ヒントをもらつても多分わからないです。答え、教えてくださいよ」

トオルは音を上げた。元々、彼はこういった類いのこと得意で

はない。頭だけで解決することは出来るだけ避けて、体を使う方法で乗り越えてきた部類だ。

「何よ、だらしないわね。もうちょっと遊べるかと思つたのに」  
「遊べるって……意地悪な人ですね」

「ふふん。そりや そうよ」

倫子は一瞬マリ笑いをちらつかせた。

「じゃあ、正解。……多分、これに気付く人はあんまりいないと思  
うけれど、答えは『食品トレー』よ」

「食品トレー？」

「そう、あの発泡スチロール製のアレよ。ちょっと、ビックリでし  
ょ」

「いや、でも倫子さん。あなたさつき、一番売れてるモノつておつ  
しゃいませんでした？ あんなモノ、誰も金を払つて買つたりなん  
か……」

トオルはちょっと不満そうな顔をした。しかし倫子の方はちょっと  
と真剣な面持ちに変わる。

「あなた、あのがノー・コストだとはまさか思つていらないわよね？  
実際、一つ一つは微々たる値段だと思うわ。けれど、確かに食品  
売り場の中で毎日一番買われていっているのはあの『食品トレー』  
なのよ。生鮮食品にはほぼ全部、それ以外にもプラスチック製の食  
品パックやなんかも含めたらかなりの商品がアレを使って包装され  
てる。しかも毎日変わらず何百個と使われるわ。これが単位を日本  
中に換算したとき、一体一日で何個の食品トレーが消費されている  
のかしら？」

「あつ……」

「スゴイでしょ？ 私には想像つかない。けれど、想像した人がい  
たのよ。ここに商業が成り立つと考えて、食品トレー・プラスチッ  
ク製パック・ビニール袋・業務用ラップ・その他を、たつた一代で  
今じゃ日本全国のシェア8割を牛耳るような大会社に申し上げた人  
間がいるの。それが、四方宗太郎。『株式会社四方トレー』の創業

者であり、現代表取締役よ

「…………」

トオルは言葉を失つた。確かにそうだ、と思つた。毎日、日本中で数え切れない数の食品トレーが消費されている。しかし、それで商売を興そと考えるのはトオルにはきっと無理だ。同様に、多くの人間がそう考えるだろう。まさにいさつきトオルが言った言葉通りの事を考えるはずだ。『あんなモノ、誰も金を払つて買つたりなんか……』と。

「一度だけ、ご本人にお会いしたことがあるわ。すごくしっかりした信念を持つている人、っていう印象。それとかなりのリアリスト」

「ふうん、どうしてそう思われたんですか？」

何気なく訊いたトオルに、倫子はまたもぐるぐると表情を変えて答える。

「お会いしたのはパーティーの席だったなんだけれど、給仕の女性が彼のすぐそばで手に持つたお皿のうちの数枚を落としたの。その瞬間、給仕の子は慌てて拾おうと手を伸ばしたなんだけれど、それを四方氏は止めたのよ」

力の入った物言いで倫子は語つた。ときどき身振りまで入るのがちょっと滑稽で、トオルは内心ちょっと笑つてしまつ。

「その時の彼、何て言つたと思う？　『君がそれを拾おうと慌てる」と、落ちた皿より多くの皿を割ることになる』って、言つたのよ。四方氏は給仕の子がまだ手に持つていた皿の数と落とした皿の数を見て、たつたの一瞬でどうしたら最良か判断したってワケ。私、それを見たとき『ああ、納得』って思つたわ。こういう人がトップだから、こういう会社が出来上がるんだ、ってね」

倫子とトオルがそんなことを話していると、大きな音を立てて入口の扉が開いた。

走つてきたらしく、美純は大きく肩で息をしていた。

開け放つたままの扉に直立不動で立つてある姿はどこの寺院の表門のようなのだが、何しろ美純なもんだから迫力なんてこれっぽっちもない。

「傘……」

切れぎれの息の間に吐き出した一言は、要件を伝えるには短すぎて、おまけに声も小さかった。かるうじて事情を知っているトオルには伝わるが、そばにいた倫子は何だか不思議そうな顔をしていた。

「美純。中にいで」

「ダメ。……傘、ありがと。……貰つたら帰る……から」

「美純」

トオルがもう一度優しく声をかけると、美純は大きくブンブンと首を振つた。

「ダメ！ 受け取つたら帰らないと。ここでいいから。傘。ありがと」

と

固く拒絶するような表情は見方によれば怒つているようにも見える。その上、息を整えるのにゆっくり大きく肩を揺らす様は、ますます彼女を憤然としているように見せた。とても人に礼を言いにきたとは思えない姿だ。これが全く知らない子だったなら、トオルは世の女子高生全員にあらぬレッテルを貼つてしまつたかもしがれない。

『最近の女子高生ときたらガサツで女らしさに欠けている』みたいなやつだ。彼女の性格を少しなりとも知っていたおかげで、その被害は美純にだけで留まつた。

「お前なあ……。人に礼を言いに来たのに『ダメ』とか『ここでいい』とか、失礼な奴だな」

「えつ？！」

「そんなことより、まず最初に言うことがあるんじゃないかな。なあ

？

「あ、あつ」

途端に美純は蒼くなつて唇をわなわなさせた。トオルの言葉で我に帰つた彼女は、行動が自身の意図とは随分違つてしまつていたのに気づいたようだ。しなければと考えていたことと、してはいけないと考えていたこと、全部を一邊に言葉が吐き出してしまつたらしい。急に目の色がくすんでいくのがわかつた。一所懸命な空回りが彼女らしいな、と昨日までのトオルなら笑つて済ませたはずだ。けれども今のトオルは胸がズキズキして切なかつた。彼女の顔を見る目を思わず背けてしまつた。

「大丈夫だ。先にお姉さんには約束してある。『来たらコーヒーを一杯ごちそうさせていただきます』って。だから入つてきな」

多分、美空は傘を取りに行くよつ言つただけではないはずだ。他にも指示や注意事項がたくさん美純に詰め込まれているはず。本人の口から事実を聞くまでもなく、彼女のヒリヒリしそうな一拳手一投足がそつだとトオルに訴えかける。

「う、ぐ」美純は次の言葉に詰まつてしまつた。トオルはカウンターを出ると彼女のそばに歩み寄つた。そして背中に手を回して店の中に誘い入れる。美純も、そこまでいくともうためらわなかつた。

「座つて。今、コーヒーを入れるから」

そう言つてトオルは倫子のひとつ開けた隣に美純を座らせた。キッチンスペースに戻つたトオルはいつものようにポットでお湯を沸かすのではなく、更に奥のバックスペースからサイフォンを一基取り出してきた。フラスコ状のガラス製のそれとアルゴールランプ。丁寧に布でくるんで保管されていたのを開く。

「普段はちょっと手間だから使ってないんだ。でも、今日は特別……」

そう言つてトオルは美純の顔を覗き込んだ。美純がドキッとして肩をすくめてしまう。けれどトオルは敢えて気付かないふりをしてそのまま続ける。

「お詫びだから。とびきり美味しいの、いれないとな」

「…………？」美純の目が、何故だかわからないといつていった。

トオルは手際よくフラスコに水を張ると、ランプに火を点け加熱する。その横で豆をガリガリとひきながら口を動かした。

「普通は気付かなくちゃいけないんだよ、忘れ物なんてな。折角楽しみに来たのに帰つてからがっかりさせてしまうなんて最低だろ。ましてや取りに来させるつて、どんだけ上から目線だつて思わないか？」

「…………」美純は黙つたままだつた。

「お前がどう思つてよつと、俺は自分の失敗を反省してるんだ。だから詫びの一杯くらいこちそうさせろよ」シコワシコワと音を立ててフラスコ内の水が湧き出した。

ひき立てのコーヒー豆の香りがカウンターを支配する。漏斗にそのひいた豆を入れて、フラスコにセットすると『スー』と蒸気圧を利用して下から上へと湯が移動していく。そして水分が全部上へと移動したあと、トオルは漏斗の中をヘラで数回くるくるとかき混ぜた。そしてすぐにランプをフラスコから外すと、

「あ……ああ」

美純は声を上げて上から下へと下りていいくコーヒーを見送る。水分が全部フラスコの方へ落ち切ると、その合図がわりにブクブクと漏斗から空気が少しだけ液中に流れ込む音がした。

「はい。出来上がり」

漏斗部分を外すとフラスコに溜まつたコーヒーをカップに注ぐ。ふんわりと立ち込める香りは香ばしく、ややシャープな印象。

「美純はミルク入りが好きだらうけど、今日はストレートな。そんなに濃くはいれてないから大丈夫だろ」

「え……なんでミルク、だめなの？」

「今日は特にコナコーヒー100%なのです！ いつもはブレンドしてるけど、大盤振る舞い。上品な酸味が特徴だからストレートでどうぞっ！」

トオルは人差し指を美純に突き出し、教師のような顔をして解説してみせた。ふふんと鼻を鳴らしたその様子があんまりにもわざとらしくて、思わず美純は口元をほころばした。

「熱いから、ゆっくり飲んでけよ。ゆっくり、な……」  
「ん。」

そんな会話を交わしてから、トオルは美純の前を離れた。そして「ちょっと……」と仮頂面した倫子の前へ。倫子は片方の眉を釣り上げて、カウンターの上を指でコンコンと小突く。

「若い子が来ると、男つてすぐしゃれよね。おばさんには一杯も出ないなんて、あんまりじゃない?」

「あ……」

すっかり忘れていたことに気付くトオル。「まあ、いいけどね」と拗ねた顔の倫子は呟いて肩肘つく。

「ね、なにか一杯頂戴」

「はい」

トオルはカウンターに並べた酒瓶を眺めた。今の彼女にあう一杯を思案する。そして……

「そうだ。折角いただいたから、アモンティリヤードにしましょうか?」

そう言つとロングカクテル用のタンブラーを取り出した。そして氷をいっぱいに詰めるとアモンティリヤードを注ぐ。そしてそのままからソーダを。

「同じ職種の仲間からはよく馬鹿にされるんですが、いいシェリー や高いブランドをソーダ割りにするのが好きで。『もつたいない、酒に対する量とくだ』なんて言われるんですが、むしろ僕は贅沢な飲み方だと思つてるんですね」

そう言つてグラスを倫子の前に差し出した。

「あら、美味しそう。やっぱり仕事明けの最初の一杯はシュワワ、つとしたのが飲みたいわよね」

「ですよね。それ、わかります」

トオルと倫子は互いに目を細めあつた。

倫子の方が先に目をそらした。最初の一口を美味しそうにあおる  
と、視線の戻す先に美純を捉えたのがわかる。「あの子……」あつ  
あつのコーヒーとフーフー格闘する少女を見詰め、倫子の口が動い  
た。「四方の次の方でしょ。あなた、知り合いなの?」ちらりと  
視線がトオルに戻ってくる。

「知り合い、つていうか……まあ、知り合いですかね。会ったのは  
三回目ですけれど」

「ハア~」

倫子はため息をついた。

「四方の家の娘さんとは知り合いで、四方の家の事業は知らなかつ  
たと……どんだけ大物なのよ、あなたつて」

「はあ。似たような意味で『二ブイ』って馬鹿にされたことがよく  
あります」

主に哲平からであるが。

「あなた……。悪いけど、おんなじ意味よ」

「はあ。スマセン」

くすくすと倫子は笑つてみせた。

トオルはさつきからスイッチを入れていた電気フライヤーの様子  
を覗き込む。油の対流するのが見えた。冷蔵庫から豆アジとイワシ  
を取り出すと塩を当たり粉をまぶし、それを油に落とす。シャーツ  
と軽い音が響くと何となく食欲がわく気がする。素揚げしただけの  
一品にレモンを添えて倫子の前に差し出す。

「頂きものお礼です。どうぞ召し上がって下さい」

「まあ、気が利くじゃない!」

ははは、とトオルは顔をほころばせた。

「ショリー酒の産地ではイワシのフライが定番の料理なんですね。  
あ、海の近いところなんで当たり前っちゃ、当たり前なんですけど  
ね」

「へえ~」

揚げたてを頬張る倫子は、目をキラキラさせた。

「……昨日、あの子の姉が食事に来たんです」

訊かれたわけでもなく、ただ何となくトオルは喋り出していた。彼にしては珍しいことだった。お客の事を滅多に話題にする事はない。ただ、倫子には聞いてもらつたほうがいいような……というより、トオルは彼女にこの話を聞いて欲しかったのだろう。それと出来れば彼女の目線の意見を聞きたい、とも思つていた。

実をいうと、トオルは倫子に感謝していた。

もしも彼女が早くから訪れていなければ、トオルは誰より先に美純と顔を合わせていたに違いない。あの沈んだ気持ちはまま、多分、今みたいに自然な感じでは美純を受け入れられなかつただろう。でも、先に倫子と会話をしていたことで仕事用の自分に戻ることができた。離陸の準備さえ整えられれば飛び立つのは訳なかつた。

ただ、意図的ではないにしろ彼の沈んだ気分を浮上させてくれた倫子の話術と人柄に、トオルは一目をあいていた。今岡倫子という女性に魅力を感じていたのだ。だから、相談というよりもうちょっとだけ遠慮した感じで喋り出していた。

「なんていうか、変わった子でした。まだ大学生だっていうのに、周りと自分を切り離したような。浮き世離れしてる、っていうのは違うな……本質はそうじゃないのに、あとから形成した自分が勝つちゃっているつていうか。ともかく自然じゃないなつて思いました」

「……資産家の家の長女ですものね。一癖あつたつて不思議じゃないわよね」

「ええ

グラスをちびりとし、倫子はトオルの目を覗き込む。たつたそれだけでトオルはもつと深くまで覗き込まれたような気がした。何と/or>いか、体内に異物が入り込んで、すぐに出でていったみたいな感じだつた。

「で？ あの子のことと、どう関係が？」 倫子は視線で美純を指し

て、そう呟く。

トオルはちよつと驚いて倫子の目を見た。端折ったといつより、二・三歩飛び越された気がした。もう少し言葉を足してからたどり着くはずだった話題に、倫子はもうたどり着いていた。

置いてきぼりをくつた気分だった。出遅れを取り戻すみたいな進度でトオルは話を進めた。

「……長女にとつて、あの子は四方家にそぐわない人間だと考えられています。彼女は長女からかなり厳しく叱責され、躊躇った様子が窺えます。その上で、こうも言われていました」

「…………」

トオルはその一言を口にするために一度唾を呑み込んだ。そして、「欠陥品だ、と」

倫子の眉が小さく動いた。口元を一本に引き結んだみたいにして、肩で一息吐き出した。

「そう。……大変ね、ちゃんと生きるのって。私なんていい加減に生きてきたせいか、そういう苦労はしたことないわ。おかげであつとこう間に歳を喰つちゃつたけれど」

倫子は笑つてみせた。けれど、彼女の目は笑っていない。

覗き込むような視線が美純にじっと向けられていた。美純のほうはそれにはまったく気づいてはいない。ようやく飲み頃の温度に落ち着いたコーヒーに、満足そうな顔をしている。

「可愛い子よね。悪い子じゃなさそうだし」

「そう、思います。僕も自然に言葉が出ていた。

「あら～っ？」

ちぢりと倫子の目がトオルを見返したのと、入口の扉が開いたのは、ほぼ同時だった。

「いらっしゃいま……せ」

軽い会釈でそれに応える、四方美空がいた。

「お、お姉ちゃんっ？！」

ガタツ、と音がした。ガシャン、とも音がした。

「キヤツ！　あ、ああっ……！」

美純は自分が慌てて立ち上がったせいで落としてしまったコーヒーカップを拾おうと屈み込んだ。

「美純、いい。触るなッ」

「……」

美純が一瞬、身を固くしたのがわかった。案の定、破片で指を切つたらしい。トオルはカウンターを飛び出して、彼女のそばに駆け寄つた。しゃがみこんだ美純は、まだじつと割れたコーヒーカップを見詰めている。その体が小さく震えているのに、トオルは間近に寄つてみて気が付いた。

「言わんこっちゃない。だから触るなって……」

彼女の震える肩に手を掛ける。そしてトオルは美純の顔を覗き込んだ。

気が付いた。

彼女は割れたコーヒーカップを見詰めているのではなかつた。顔を上げられずにはいるのだった。

「美純」無機質な声が妹の名を呼ぶ。

ビクツと大きく体を反応させた。彼女はおずおずと振り返る。顔を向け、でも目を背け、そしてすぐにまた俯く。

そんな美純に向けてさらに何かを言おうとする美空より先に、トオルが口を開いた。

「約束が違う！　あなたは許可したはずだ」

「…………」

「別に他人の家庭のことまで口出すつもりはないが、美純は今、僕の店にとつてのゲストだ」

「その子はまだ高校生よ。」つい一つ場所に一人で来るなんてまだ早い。非常識だわ」

美空の言葉に、トオルはカツとなつた。

「俺を使って、美純のハーツを試すみたい!!……っ。君のまつりを非  
常識だろーーー！」

「随分と失礼な口をきく人ね」

美空は嘲笑するかのような顔をして、肩をすくめた。

「彼女の何がそんなに問題なんだ? こんなところまで出てきてまるで管理するみたいに目を光らせる必要がどこにある? !」

たが、すぐに穏やかな笑顔に戻っていく。視線はトオルから離れ、再び美純のことを見た。

「美純、カツブを割つたこと、謝罪なさい。それと今日は」ちらで食事をしていきましょう。いいわね？」

「えつ？」

トオルと美純、二人が絶句した。けれども美空は平然として店内に歩みいると、奥のテーブルについた。「美純、座りなさい」と妹を促す。

トオルは美空の行動が理解できなかつたし、それにどういつ意図があるのかも想像がつかなかつた。わざわざ他人の嫌がる事をするような陰険な人間だとも思えなかつたし、だけどなんの考えもなく行動するタイプとも思えない。

「何が問題でも？ 私はただこちらで夕食をいたただこうと思つていただけよ。こうなつてしまつては疑われてもしようがないけれど、本当にただそれだけの理由よ」

正直、言い草にイラッとした。表情一つ変えることなく言い放つ  
彼女が瘤に障った。

「そう、ですか……失礼しました」けれど、いくなつてしまえばトオ

ルには何も言う権利はない。トオルは一度カウンター内に戻った。救急箱を出すと、そこから絆創膏を一枚取り出した。

美純のそばに戻ると手に持った絆創膏を彼女に差し出す。

「はい」

「あ、ありがと」

トオルは笑つてみせようとして失敗した。気持ちが引っ掛けつてうまくできなかつた。不機嫌な顔になつてしまつた。

「カツブ、ゴメンね……」

その表情を見たからなのか、それとも美空の指示だからなのか、美純は足元のカツブに目を落として言つ。口元をきゅっとさせた申し訳なさそうな顔をした。

「別に。気にしてないよ、大丈夫」

答えてから美純の両肩を手で軽く押した。それを推進力に美純がゆっくりとテーブルに向かつて歩きだす。トオルは、この後に及ぶまで心のどこかで捨てきれない思いがあつた。『実は自分の考えすぎで、本当は姉妹の仲はそこまで悪いわけではないんじやないか?』といつも思つ。けれど、それはやっぱり違うんだと痛感した。この姉妹の間は表から見えないよう丁寧に偽装された、冷えてしまつた間柄なのだと。美純の肩を押すときに感じた彼女の小さな抵抗が、それをトオルに強く実感させた。

トオルは美純のあとを付いて歩いた。彼女と美空のオーダーを訊くためだ。ちょっと時間がかかるかもしない、と思つた。気になつて倫子に目を送つたが、彼女は手のひらをヒラヒラとさせてトオルを見送つた。トオルはその倫子の気遣いに小さく笑顔で答えた。

「お食事はいかがなさいますか?」

トオルは出来るだけいつも通りのつもりで、美空に話しかける。

「私はシェフにお任せします。美純つ、あなたは?」

そうやり取りするのに慣れた姉と、

「へつ? え、わ……わたし、は」

そういうことに不慣れ、というより向かない妹とのチグハグとし

た食卓。

四角い箱に丸いものを収めたような、違和感。トオルは料理をするためにキッチンに戻つてからもずっとそれを感じていた。  
そのテーブルから会話は聞こえてこなかつたからだ。

四方姉妹が食事を始めてから1時間くらいたつただろうか。

二人は今、メインディッシュを食べている。地鶏のロースト、ローズマリー風味。姉がスマートに口に運ぶものを、妹は格闘するみたいに『切つて・刺して・口に入れる』していた。

あれから更にテーブル席に一人、カウンター席に一人のお客が来て、『カーサ・エム』の夜はそこそこ賑わつた。それでも各席の料理は出し切つてしまつて、あとはドルチェのみ。今は一段落ついたところだ。

トオルはカウンターの内側に置いていたマグカップを傾けた。中のコーヒーはもう冷たくなつてしまつていたが、一仕事したあとの中には丁度いい。そうして一息ついていると、カウンターの向こうの倫子がなんとなく咳いて言った。

「あの子達、食事の間じゅうほとんど会話していないのね。きっといつもそなんでしょうけど」

「いつも……どうしてそう思います?」トオルは訊いてみた。

「慣れちゃつてるわよね、会話しないでいることに。普通、ギクシヤクしたりするものでしょ。でも、あの子達はむしろ自然にそうしている」

「もう、何年もそういう生活をしてる……」

「だと、思うわ」

倫子は一杯目の酒を赤ワインにかえていた。南イタリアの果実味

のあるフルボディー。ちびりと飲みながら、視線をトオルの戻す。

「……聞いてもいい?」

不意に出た言葉に、トオルはつまく答えられず、「何をですか?」と聞き返した。

「あの子達と、あなたの関係」

「はあ、」とトオルは気のないリアクションで言った。「それ、僕もよくわからないんですね」

「どうして? あんなイイトコのお嬢さん達が気を許してるなんて、ちょっとないでしょ」

「許して……るんですかね、この状況って?」

トオルの苦笑いに、倫子は答えなかつた。ただ口を結んで首を傾げただけ。その様子からは倫子がどういう意味でそつしたのかはわからなかつた。

窓から見える街はオレンジ色の灯りに溢れていた。生きているのは信号の点滅だけで、夜の色に染まつた世界に死んだみたいに幾つもぶら下がる街灯の明かりが、冷たく感じた。街行く人々は駅に向かつて歩く人がほとんどで、左から右へ、ベルトコンベアーガ運ぶマネキンみたいにみんな揃つて同じ顔をしている。

たぶん、世の中は案外に冷淡で優しくないのだ。この『カーサ・エム』という箱から出てしまえばトオルも自分では気付かないうちにその中のひとつになつてしているのかもしない。でも、せめてここにいる間だけは温かいひかりと穏やかな空氣で満たされてほしい。そうやって毎日、彼はこの空間を創り出す努力をしてくる。この店を、このカウンターを、特別な場所にしようと、彼のまいじろや気配りでぬくもりのある場所にしようと常に心がけている。それはどんな相手にも。あの姉妹にしても、もちろんそうだ。

それなのに突然、美純は泣きながら店を飛び出していった。人の波を押し分けて、冷たい街に呑み込まれていった。

鼻腔の奥の方がじーんと熱くなつて、こめかみ辺りがずんと重たくなつた。

頭の中では何かを考えているのだがそれが遠くで起こる出来事みたいに意識と隔離されていて、体は自分の意思とは関係なく持つていたものから手を放した。からうじて残つていた思考は、圧迫するみたいな頭の痛みが『かせ』になつてどんくさい。代わりにその横を慌ただしく飛び出していつた感情が、唯一トオルを操る原動力になつた。

美純が、泣いていた。何故かはわからない。

ただ、残像みたいにその事実が彼の前から離れていかない。

トオルは美空を見た。眉間に疼痛が走り、そこにぐつと皺が寄つた。

彼の中のどの機関が指令を送ったのかはわからないが、彼の体はもう、何かの意図を持つてカウンターを出ようと歩きだしていた。

「もし

」

その声がもし倫子のものでなかつたら、多分トオルは振り返らなかつたはずだ。

「…………

「もし私が男を平手打ちして店を出でていつたら、あなた、私の連れを慰めてあげてね？」

そう言つて倫子は微笑した。苦笑いだつた。

だがトオルの方は笑わなかつた。というよりもその顔にはもっと別の感情が張り付いていた。見付けた倫子はちょっと不思議そうな顔をした。そしてもう一度、微笑して言った。

「あらつ、誰にでも優しいわけじゃないんだ

「……えつ？」

トオルは無意識で聞き返していた。倫子はやれやれといつ顔をした。

「そんな思いつめた顔してるから、てっきり『何かあつたら、絶対ほつとけないタイプ』なのかと思つたわ」

言葉にしようと思つたのに、何も浮かばなかつた。

一・三歩後ろに置いてきた思考が、今頃になつてよつやくトオルの元にたどり着いた。

その間、トオルは呆然してと倫子の顔を見た。

「ほーらっ、何やつてんのよーーー あちらのお客様、お会計よ」倫子がそれまでより強い口調で言つ。

「あつ……。す、すいません……」

「もう。あーと、私にはもう一杯つ」

「はあ……。すいません」

無抵抗に一回、頭を下げるトオルの間の抜けた顔に、倫子と帰り仕度を済ませたお客様が一緒になつて吹き出す。

「ちょっとあなた、熱にでも浮かされたんじゃない? しつかりしなさいよ」

「…………」

倫子にとつてはおそらく冗談のつもりだったのだろう、その言葉。

けれどトオルはそれを流して聞くことができなかつた。

預かった五千円札をレジに仕舞い、釣りを渡そうとする間も頭の中に引っかかったその言葉が気になつて仕方ない。渡し間違いのないよう何度も数え直したが、数え直すたびに釣りがいくらだつたか忘れて、レジの液晶画面を何度も見直した。

一体、自分は何をしようとしたのだろう? 少なくとも考えての行動ではなかつたはず。

何か一つ、『熱』に近い意思というか、感情といつか、そういうものが乗り移つて勝手にトオルを動かそうとしていたのだろうか。

(俺は、美空に何をしようとした? 何を言おうとした?)

そう。確かに倫子があそこで話しかけて、結果的ではあるが止めに入ってくれなければ、自分が何をしていたか自分でもわからない。まるで そうだ、彼女がいうように熱にでも浮かされたみたいだつた。ただそれは微熱のような穏やかなものではない。あかあかと焼けた石のような『熱』だつた。

「何だか、あなたらしくないわね。どうかしたの？」

「いえ、……すいません。本当ですね、僕らしくない。スイマセン、なんか……」

トオルは無理に笑つてみせた。

倫子はまだちょっと気にしているようだが、それでも黙つて出された一杯目の赤ワインに口を付けた。そのうちにテーブル席のカップルが時間を氣にして店を出ていった。そして店内にはトオルと、倫子と、美空とが残つた。一人ずつが、全部で三人。別にこういうことはよくある光景だつたが、今日のはいつもと違う奇妙な空氣だつた。トオルは美空をなんとなく見ていた。倫子はトオルの様子を伺つていた。そして美空は

「あの、……コーヒーをそちらのカウンターで頂いてもいいですか？」

「えっ？ あっ、ああ、どうぞ。かまいませんよ」

急に話しかけられて、トオルは初めて言葉を交わす相手みたいにちょっとと他人行儀な口調になつてしまつた。けれど、おかげで相手を意識せずに自然に言葉を返すことができた。

「そう、よかつた」

美空は 探していた。

「妹に同席を辞退されてしまったから。でも一人でなんて、それもなんだか気が引けるもの」

それはおそらく、自分の置き場所 。

彼女は多分、無意識に探していたのだ。そしてそれをトオル達のいるカウンターに見付けた。

そして今日、初めて三人が同じ時間を過ごすことになる……。

美空が自分のハンドバックを片手にカウンターに移動していく。その様子をじっと見ている自分の胸の奥がぞわぞわと落ち着かない。トオルはうまく言い表せない自分の内面にちょっとだけ苛立ちと抵抗を覚えていた。

「……妹さん、どうかしたの？ 泣いていたみたいだけど」  
本当に、なんの前触れも無く倫子が切り出した。あまりの鋭い出  
足はトルが思わず息を呑むくらいだった。てっきり倫子はそうい  
うことに首を突っ込まないタイプかと思つていただけに、驚いた。

「…………」

もちろん美空は答えなかつた。

「……」  
というより、多分トルと同じで驚いていたのだ。出会い頭の事  
故にあつた時のように、自分の置かれた状況を確かめるのがその時  
の彼女の急務だつた。

「別に、話しづらい」とならないのよ？」

「あっ、い、いえ。そういうわけでは……」

「んー、そう」

美空に向けていた視線を、倫子は一度逸らせた。

「「めんなさいね、ちょっと気になっちゃって」

目の先を手元のワイングラスに向けていた。グラスをくるくると  
回して、ガーネット色の赤い液体にそつと微笑みかけた。たつた今、  
美空の鼻先まで迫つたハズが、彼女は素早く自分の居場所まで戻つ  
てしまつていた。

「あの子、美純ちゃんだったかしら？ 可愛い子ね。高校……」

「えっ？ ……ああ、二年生です。仲泉文学院の」

「あら、名門校じゃない。すごいわあ～」

「いえ、そんな事ないです。成績は悪い方ではないですけれど、優  
等生ともいえないくらいですから」

「どうしても、よ。私なんかがどんなに努力したつて入れるところ  
じゃないもの」

「確かに、人一倍努力はする子です。それは私も認めてます」

言つた美空の口元がふんわりと緩む。

そこでやつと倫子は美空を見返した。倫子もふわっとした表情を向けた。美空はそれでようやく自分のペースを取り戻せたと思ったのか、少し座り直していた。

トオルはカウンターのこちら側で美空のためのコーヒーをいれながら、内心、かなり驚いていた。

美空とは、決して長い付き合いというほどではない。それでも倫子と比べればちょっとは見知った相手。だが彼女と自分の距離はこれほど近くはない。トオルの側からすれば、むしろ壁のよつなものすら感じている。

それが倫子は、ほぼ初対面の美空から幾つも言葉を引き出していた。倫子は多く訊ねなかつた。それでも訊いた分よりも多くの答えを得た。美空が自然と答えていた。

始めた会つたときもそう感じたが、トオルは今、あらためて今岡倫子という人間に驚嘆していた。

倫子という女性の人間的魅力からなのか、彼女の言動にはある種の強制力のようなものが含まれていた。

頼まれたら断れない。訊ねられたら黙つて聞き流せない。

客観的にみると自己中心的な言動も、彼女から出たものであると嫌味がない。人徳というのとはちょっと違う気がした。もつと体质的な、オーラとかフェロモンとかの無形なモノのような気がした。そして何よりトオルが一目おくのは、彼女が自分のその特質を正確に理解していく、その上で的確に利用していることだった。

今、トオルの前、カウンター席では倫子と美空が間にひと席開けて座っている。

けれど実際の距離はそうであつても、心理的な距離は随分違うのだ。美空と倫子の距離はひと席分であつても、倫子と美空の距離は決してそつではない。

もつと近い。 隣同士か、さらにもうちょっと。

懐深く入り込まれた美空は、まだその事実に気付いていない。

「やつぱりちやんとした家の子はテキが違うのかしらねー」

不意に倫子が会話の立ち位置を変えた。

「ねえ、私はあの子、好きよ。一所懸命で手を抜かない感じが、とつても……お姉さんは違うの?」

「わ、私はつ……自分の妹を好きとか嫌いとか、そういうのはよくわからないんです」

「そつ。でも妹さんのほうはお姉ちゃん、大好きみたいだけ?」

「そう、なんでしょうか……」

美空が表情を暗くした。

「私は美純に厳しくします。怒りもします。ですから、あまり好かれているとは思えません」

「あら、そうなの。じゃあ……私の勘違いかしら」

倫子はちょっと残念そうな顔をして言つた。そしてそのまま黙つてしまつ。

容赦なく話し始めたのに見込みが外れると随分呆気ない。姉妹の関係に踏み込んだ内容だつただけに、だいぶ思慮に欠ける幕切れだ。美空もなんだか肩を落としてみえた。

トオルはいたてのコーヒーを美空の前に差し出した。「ありがとつ」と、小さく言つた美空は、けれどすぐに下を向いてしまう。さすがにこれは可哀想だろ、とトオルは倫子の顔を睨まえる。

「妹さんと同じように、あなたも良家の長女なんださぞや凄い経歴の持ち主なんでしょう?」

トオルの視線など、氣にも止めない。

倫子は再び鋭く踏み込む。わきまえのないような話題を遠慮もなく話す彼女は、トオルから見ても行き過ぎた態度に思えた。

「別に、人に誇るためにやつてきたことではないので。必要だからそうした、それだけです」

しかし、今度は美空も立ち向かつた。妹のことはともかく、自分のことを見索されるのは御法度のようだ。

「四方は父が一代で大きくした家です。『良家』とは違う。でもこ

の先、そうであるために私は日々の努力を怠つたりはしません」美空の目が鋭くなつて倫子を見つめた。「この名を汚さないよう、私はいつだつて胸を張つていられるような生き方を心がけています

「そう、すごいわね」

倫子はおどけたような顔をして肩をすくめた。「なのにそんな自信たつぷりの自分を、あなた自身は嫌つてる。そう感じるのは私だけ?」

「なつ?！」

トオルは驚いて目を白黒させた。思わず倫子を覗き込んだ。けれど倫子は顔を上げない。トオルの視線を感じているはずなのに。彼女が今どんな表情をしているのかはトオルからは見えない。見えるのは美空からだけだ。その美空の顔から急速に表情が抜け落ちていくのがわかつた。

「どういう、意味ですか……？」

「どうつて言われても、言葉のままだけど。あなた自分のこと嫌いでしょ、つてだけよ。ああ、気分を悪くしたなら謝るわ。『ごめんなさいね』

倫子は一息で言い切る。言葉に何の感情も込めていないのはカウンターを挟んだこちら側からも明白だった。

「今岡さん、あなたその言い方はあんまりだ。彼女に対して失礼ですよ」

トオルは間に入るように言った。けれど倫子はトオルの言葉には応えない。美空もトオルの言葉など耳に入っていない。

カウンターの向こうの空気は一触即発だつた。美空のまわりの空気だけがどんどん温度を下げていくを感じた。ピリピリと張り詰めていくのを感じた。

「何故……」

低く唸るような声が響く。

「何故、私はあなたからそんなことを言わなければならぬのですか? 初対面のあなたから」

「失礼」

倫子が素早く言葉を遮った。

「お会いするのは一回目です。一度目は先日の宝石の販売会。」「お会いしていますよ」

「あなた、……自分の立場をわきまえていないの？」「こんなことをして、私が黙つていると思つていいの？！」

とうとう美空が声を荒らげる。顔色が変わる。明らかな敵意というか、紅い色をした何かが美空の肩から吹き出しているように見える。

トオルは頭を悩ませた。

これは間違いなく倫子が悪い。だけれど、理由もなくそんなことをするような人間とは思えない。だからといって彼女を庇うにはトオルにしたって納得が言つていないうことが多すぎたのだ。

「美空さん」

倫子はさらりと自分から切り出した。トオルはもつ氣が氣ではなかつた。

「あなた、恋をしたこと、ある？　自分を誰かに好きになつてもらおうとしたことって、ないんじやない？」

トオルは、絶句した。

例え意図があつたにせよ、やりすぎだ。彼は目を覆つた

「人を……なんだと……思つてッ！　誰かを好きになることもない……冷たい、女だとでも……」

低く震える声は言つ。美空の顔は怒りに震え、赤を通り越して青白くなつていた。

倫子は気にも止めない様子で答えた。

「そつは言つてないけれど、でも……誰のことも好きにならないようには『拒んでる』みたいには感じるわ」

そうして不意に、倫子は美空に近づいた。

それこそ顔と顔が重なるくらいに。

「美空さん、あなた、誰も好きにならないように……それこそ自分の事も好きにならないように心に決めてるんじゃない？ 誤解だったら申し訳ないけれど、私にはそう感じるの。なんだか自分を檻の中に幽閉して、だれとも深い接触をしないように避けてるみたいに思えて仕方ないのよ。そうじやなきや、そんなに冷たい空気を発するはずないじゃない？ あなた、本当はもっと優しい人の筈だもの……」

「…………っ！」

美空は返すはずの言葉を失ってしまった。

その表情から急速に怒りが消えていく。そしてあとには何も残らない。

トオルも、同じだった。彼も言葉を失っていた。

彼は田の前の女性に田をやつた。彼女の表情は、それまでみせていたどもがまるで演技だったかのように、たおやかな顔をしていた。包容力に溢れていた。

倫子は美空の中ずっと奥の方に、いつの間にか踏み込んでいたのだ。

誰にも気付かれないうちに……。そつと、入り込んでいた。

静かに大きく息を吸い込んだ美空が言葉の代わりにこぼしたのは、一筋の涙だった。

「何で、そんな事……。どうして、……そんなふうに、

美空は震える声で囁つ。

けれどその声は、ちょっと今までとは違う色をした情動の息づかい。

例えるなら紅と蒼。晴天から雨へとうつり変わった天気のように、彼女を包む空氣はさつきとは違つた空模様だった。

「私……、私は……。う、ううう…………」

冷たい印象すら覚える彼女は、もうその場所にはいない。

ここにいるのは本当は誰にも見せないつもりだった自分を覗かれてしまつた、か弱いだけの女。さつきまで凜としていた肩は気が付けば小さく、いつだつて前を見ているようだつたその顔は俯いていた。

ああ、本当のこの子は自分が思つていたよりもずっとじずっと弱かつたんだ、とトオルは思つた。

少なくとも今、自分のすぐ前でさめざめと泣く彼女は、か弱い存在にだつた。これが四方美空の本質なのだ、とトオルはとても自然なことのように理解した。

トオルは自分用にもいれていたコーヒーには手を付けなかつた。代わりに倫子に軽く会釈をして、彼女の持つてきたアモンティリヤードの瓶に手をかけた。ほろ苦い液体は、飲みたくはなかつたから。

しばらく、二人の女と一人の男はそれぞれがそれぞれの時間を使つた。

互いが自分勝手に過ごしているようで、ちゃんと相手の事を気遣つた優しい時間が流れた。やがて美空もいつもに似た空氣を取り戻し始めた。トオルはもう一度入れ直したコーヒーを美空に差し出し

た。ゆっくりと時間を掛けてドリップした、雑味のないまろやかなモカ・ブレンドが彼女に少しでもやさしければいいな、と思つた。

一人が何も訊かなかつたから、話し出したのは美空からだつた。彼女はゆっくりと、これまで自分の胸から一度も出すことのなかつた感情を吐き出し始めた。

「……少し前まで、私は恋をしていました。同じ大学に通う、ひとつ上の先輩でした。その恋の始まりは一人ともほほ同じくらいの頃からで、私はユニフォーム姿でグラウンドを駆ける彼になんとなく憧れ、彼は育ちのせいで学内でもちょっと浮いた存在だった私に興味を持つてくれていました。きっかけは本当にちっちゃなもので、珍しく出席したコンパでお互いに場の空氣に馴染めなくつて、抜け出して、……そんな感じでした。その後、「一人で会おうか」って誘つてくれたのは先輩の方で、それから私達は一年くらいの時間を掛けでゆっくりとお互いの距離を縮めていきました」

手元のカップを両方の手のひらで包むようにして中の液体の温かさを確かめるみたいに、美空はしていた。その温度を頼りにひとつひとつ言葉を紡ぐ彼女。トオルと倫子は黙つてその様子を見詰めた。「結婚を、決意しました。彼が卒業間近の頃、プロポーズしてくれたから……。『幸せにしたい。だから僕に付いてくれ』って、言つてくれたんです。私も結婚するならきっと彼しかいないだろうなと思っていたから、ちゃんと返事しました。すごく……すごく、幸せでした。あの時のこと、私は一生忘れないと思います。それくらい……私は、幸せでした」

そう言つ美空の表情。パステルカラーの穏やかな日々を感じさせる、暖かな眼差しが手元に注がれている。

トオルはじつと見詰めていた。その表情が、あともう一瞬だけでも続いてくれるよう、と。でもそれは長くは続かなかつた。トオルの願いは、彼の予想と同じく、うまく届かない。

美純は次の言を口にするのに、それまでよりも一回多く呼吸し

た。言葉は、思いの重いぶんより多くの酸素を消費して彼女の口からやつとのこと、溢れ出た。

「彼の卒業が近付いて、私はとつとう父にそのことを伝えました。彼に会つて欲しいと頼みました。……あまり乗り気でなかつたのは、きっと娘を取られる父親の自然な反応なんだと思つていました。……でも、本当はそうじやなかつた」

美空は眉を伏せた。再び開く瞳には哀愁の色が滲む。プライマリーナ色を混ぜくつた重たい色が覗き込む。

「父は彼に会うなり、こう言つたんです。『そんな仕事をしている人間にうちの娘はやれない』と。『真つ当な仕事につかないなら、今後娘に近づくことも許さない』と」

それまでただ、じつと見詰めていただけの倫子が口を開いた。

「その……彼つて、どんなお仕事をされてるの？」

美空の横顔に訊ねた。

「片岡啓介。去年の新人王をとつた……」

「嘘？！まさか、ドラフト一位の？」倫子は絶句した。

トオルはグラスを傾ける。なかの琥珀色の液体が口内に流れ込む。木樽の香りのした熟成感のある酒が喉の奥を刺激する。トオルはしばらく考えるのをやめていた。ただ聞くことだけに自分を委ねていた。そのほうが今はいいような気がしていた。

美空はそんなトオルからの視線には気づかないまま、言葉を続けた。

「啓介にとって、野球はこれまでの彼の人生と同じといつてもいいくらい大切なものです。どちらか、なんて秤にかけられるものじゃないんです。それと、私とを比べることなんてできっこない。なのに父は、……。あんなの、酷い。あんまりよ……」

また、美空は肩を震わせた。トオルはその震えが収まるのを、ただじつと待つことにした。

「……結局、それっきり私達は会うことはありませんでした。二人の関係は自然に終わつていきました。再び心を通い合わせようとする

るには、彼は忙し過ぎた。私も彼とは会いづらかっただし。たとえ父が言つた言葉でも、私が彼の心を傷付けたような気がしました。もう、彼とは会わない方がいい。……そう、思いました

やがて落ち着きを取り戻した美空がまたポツリポツリと話し始めたのを、トオルはまだじつと聞いていた。

「お父さんは、本気でそう思つて言つたのかしら……？ 私には、そうは考えられないけれど」

倫子が呟く。

「一度、父には訊ねました」

「そう。それで……」

「『野球選手であることを否定するつもりはない。だが、四方の娘は彼が考へているより多くの物を抱えている。それを理解し、受け止めるには、時には自分の夢を捨てなければいけないこともあるのだ。それを彼は知らなければいけない』……』父は、そう言つていました

美空の目は、どこか遠くを見つめているようだった。倫子はその視線の先を追いかけるみたいに、彼女とおんなじほうを見ていた。

「それあなた、納得している？」

「父の言つていること、半分は私にも理解できます。でも、半分は無理。だつてそれで彼は傷ついたもの……」

「お父さんの事、許せない？」

倫子の問いに、美空は首を横に振った。少し深く息を吸つてから、彼女は答えた。

「でも、半分は理解できるんです。だから、私……父を否定することも出来なくて……」

「そう……。辛いわね」

倫子の答えに、美空は力なく頷いた。それつきりまた、彼女は黙ってしまった。

「啓介のことから立ち直つて、私は心に決めたことがあります」

美空は手に持ったカップを何度も傾け、気持ちを整理したのか、また話し始めた。

今度は彼女はトオルの顔を見た。トオルは向けられた視線に応えるように、軽く口角を上げた。

少し微笑んだ気がした。美空がそうして呟いた言葉はなんだか表情の正反対で、切なかつた。

「自分の恋は四方のためにある。自分の愛は四方を守り続けるためにある。それが私の運命だから受け止めよう、つて」

それには直ぐ様、倫子が口を挟んだ。

「そんなん！ 何も、そんなふうに思いつめなくつたつていーじやないー！」

「でも、私には守らなきやいけないモノもあるから……」

「そんなの！ 自分の事、捨てるみたいにしてまでなんて、おかしいわよ？！」

「うん……。でも、大切なモノだから」

そう言つてから、ふうっと美空は息をついた。

言葉にすると楽になることは、よくある。言葉にすると上手くいくこともある。

多分、美空は今までその思いを口にしたことはなかつたはずだ。だからその『思い』が『決意』になつて、そしていつからか『使命』に変わつてしまつていたのに気付かなかつたんじゃないだろうか？ せつかく生まれた優しい思いが、うまく消化されず胸のどこかで固くこびりついてしまつたのに、誰より美空が気付かなかつた。だから、彼女の『使命』がその本来の目的を達する上で一番の障害になつてしまつっていたのにも、美空は気がつくことができなかつたんじゃないだろうか？

彼女の言葉を聞いてあとからトオルがたどり着いた結論みたいなものは、確かにそなことだつたと思つ。

美空が言った一言に、トオルは驚きよりも実感のほうが強かつた。

「私がそれを受け止めれば、きっと美純を守つてあげられると思つから。だから、私は四方の家のために」

彼女と美純の関係を見ていて感じた違和感が、その一言で上手くすんなりと流れるみたいに、自然に感じられた。理解できた。

「でも……」

倫子の言葉は、美空の次の言葉でそつと遮られてしまう。

「だつてあの子は私ほど強くない。美純は四方の家には向いていないから。時には自分を抑えてでも行動したり決断したりしなければならないことがあるとしても……でも、あの子はもつともっと自由でいたほうがいい子。そうでなければあの子はきっと輝かないから

……」

倫子は深くため息をついた。自分が何を言つても美空の思いは変わらない。第一、何を言つたらいいかなんてわからない。

「ばか。優しさって、そんなに犠牲が必要なものじゃないでしょ？」

その倫子の言葉に、美空はそれまで見せたことのない一番の穂やかな表情で応えた。

「美空」

トオルは口を開いた。

「美純は……そんなに弱くないよ」

「えつ」美空は顔を上げる。

彼女はトオルの顔をまじまじと見た。その表情から何かを見付け出そうとするくらい。じつと。

「君は、どういう理由があつたか知らないけれど美純には厳しく当たつてきたよね。 違う？」

一瞬の沈黙と戸惑いがある。

ほんの少しだけ彼女の瞳が俯いた。けれど、すぐに美空の目はトオルを見詰め返した。

「……はい。あの子が子供の頃は、四方の家に相應しい高尚な人間になるように、と私が仕付けるつもりで接していました。私はその頃、そうすることが正しいと思っていました。父と母は忙しい人でしたし、家には彼女を教育する係のものも居りましたが、あくまで使用者です。なかなか美純の自由奔放を止めることができませんでした。だから私が……。周りには、四方家長女の振る舞いに異論を唱えることのできる人間は居りませんでした。ときには行き過ぎた事もあつたと、今では自覚しています……」

トオルは小さく頷いた。さっきからずっとやうしていた腕組みを解いた。気を抜いたときに癖でしてしまつ、ガス台の角にもたれた背を起こした。一度まばたいてから、左の眉だけ上げた。その仕草が美空を見定めるようだった。

「けれど、そのせいで美純は君を恐れている。君に怒られるのを怖がつて、それで萎縮してうまくしゃべれなくなることがある。吃つたり、つまつたりするのは、君が彼女の発言や言葉遣いに厳しく目を光らせていましたからだとは思わないかい？」

トオルは美空を真っ直ぐに見た。彼女のなかの小さな悔恨でも気が付くよ、トオルはじつと美空の瞳の奥を覗き込んだ。

「……はい。確かにそうだと思います」

美空は素直に非を認めるに彼の視線を嫌つてか、すつと視線をそらした。

「じゃあ彼女の事を『欠陥品』だと思つのは、どんなところ?」

そう言われて「うう、」と美空は低く声を漏らした。

「君……本当はそんなこと、思つてなんかないんだう?……でも、わざと彼女を四方の家から遠ざけようとして、辛く当たるようにして……」

「…………」

美空は答えない。俯き、黙つたままだ。

「でもね、美純はそれで自分の居場所を失つたんだ。彼女は、自分が四方の家に居てはならない存在だと思つている。だから少しでも早く他の居場所を見付けようと必死になつてゐる。けど、それが見付からなくなつて、そのせいでますます君やご家族に迷惑を掛けているんじやないかと悩んで、……どんな方法でも構わないから、自分をどこかにやつてしまおうとまで思つてゐるんだよ」

「どう、いう事です……、それ?」

「たとえ、自分を傷付けてでも。それで君に迷惑を掛けずにするようになるのなら、それでもいいと思つてゐる」

トオルは止めない。

「ねえ、それつて……」美空は遮るように言つ。彼女は思わずカウンターに手をついて立ち上がつてしまつた。けれど、トオルは話すのを止めなかつた。答えることもしなかつた。

「馬鹿だよね。でも、だからなのかな? 美純はすぐ強く強い。真つ直ぐ純粋で、思いやりがあつて優しくて、家族のことを……君をすごく大事にしている。だからとっても強いんだ。どんなふうに言われても、どんなに辛くあたられても、君のことが好きだから。だから彼女は折れない。たとえ自分が辛くつても傷ついても、乗り越えよ

うと努力する。あの子は本当に強くて、しなやかなんだ」

美空はトオルの言葉を途中から上手く理解できずにいた。目が力

ウンターの上をさまよっていた。

トオルは彼女のその様子をみたが、気に止めず喋り続けた。

「美空、君は間違っているよ。君がそんなふうに生きなくても、美純はちゃんと自由に生きていいく。あの子は強い。多分、君なんかよらずつと

カウンターをさまようじ田が、ピタリと留まる。

「…………？」

トオルにはなんとなくわかつていた。

美空の言葉に嘘はない。美純を思う心にも、妹のために自分が何かしてやりたいと思う気持ちにも。

彼女は純粹に美純のためを思つて、ただ一人全身全靈で四方の家のために死くそと考へてゐるはずだ。それは間違いないとトオルにもわかる。ただ、もしあるのだとしたらそれは『嘘』ではなく、本当の何から『田を背けて』いることなんぢやないだろうか。彼女が、自分の本当の思いから田を背けている。

彼女の言葉は嘘ではない。だた、彼女の真実でもない。

「君はね。美純のため犠牲になるようなふりをして、本当は傷ついた自分を庇つただけだ。もうこれ以上傷付かないでいらっしゃるようになり誰かの……美純の背中に隠れただけだ」

「…………？」

「ちょっと、あなた！ それこそ言い過ぎなんぢやッ！」

トオルの言葉に美空が言葉を失つた。倫子が鋭く食いついた。そして倫子が初めて美空の側に付いていた。今夜初めて、本当の意味でトオルと向かい合つた。そして、この他人の心の哀歎を巧妙に掴む女史を敵にまわしたとしても、しかし怯むことなくトオルはもう一步、踏み込んでいく。

四方の一人の女のために。

「美空。君が本当に求めているのはなんだい？ 望むのは、誰より

も高潔な犠牲かい？ それは世界最高の人柱つてこと？ でも、そんなんのはおかしい。美純はそんなもの求めていない。むしろ、君がそうすることで傷つくのは君じゃない、 美純の方だ！ 今の君は後ろにゼロばかりつけた値札と変わらない。誰にとつても価値のない、誰からも理解もされない、誰のためでもない宝石。そんなのは、でも全く価値がないのと一緒になんだ。ただ君のためだけに輝く、自己を自身で認めるための『光り』でしかないんだよ

「だけどっ！！」

顔を上げた美空は、歯を食いしばって必死の表情だった。

トオルによつて引っ張り出された彼女の本当の胸のうちが、悲鳴をあげながらトオルに向かつて叫ぶ！

「私がここで全部を受け入れなかつたら、たくさん的人が苦しむことになるかもしれない！ 美純だつて、父だつて、……それに四方に関わる多くの人々だつてそうよ。私は四方の長女だもの。この家の貴重な資産なんだもの。自分の夢や幸せを捨てても守る覚悟をしなくちゃならないんでしょ！！ そうやって生きていかなくちゃいけないんでしょう？！」

トオルは

「バカ。そんな事、誰も言つてないだろ。お前、見た目の割に『ほんなんつゝと』にガキなつ！！」

そして美空の無防備な鼻先をつまんで、指の先で小突いてやる

その痛みが、彼女の胸にちゃんと届くのをうつと確認した

……。

美空は自分の胸が痛みに似たしびれを感じているのに気付く。口元を歪めた。

「あのや。確かに君は他のみんなと大きく違う場所に生まれてしまった。みんなと同じような自由はないかもしないし、みんなと同じように選択もできないかもしない」

トオルは美空の潤む目を覗き込むと、自分の目を見開いて、まるで他意のないのを主張するみたいにしてみせる。ちょっと驚いたふうだった彼女も、すぐに取り直すと言葉の続きを耳を傾ける。

「でも、本当はみんなで誰一人同じじやないんだ。隣の誰かと同じ選択は自分にはできない。だからこそ君には、君だけにできる選択がある。それはみんなが同じようにそうなんだ。全部がおんじ人間なんて一人もいないんだもの、自由の形だつて当然一緒じやないよ」

美空はその言葉に苛立ちの色をみせる。

「そんなの……ただ言葉を変えただけ。私の痛みも苦しみも、ほかの誰にだつて理解できないわ！」

けれどトオルは揺らがない。顔には笑みさえ浮かべて、返す。

「やうだよ。だから美空、君は見つけなくちや。君のための自由を、君のための夢を。それは『四方美空』だから歩める、世界でたつた一つの『君のための未来』じゃないのかな？」

「ううう」と憎らしそうな呻きで、トオルを睨みつける美空。でも、トオルは……

「それに 恋も」

「えつ？」

美空はその言葉に目を見開いた。そこに映るトオルの顔が何だかますます滲んで見えるのだ。

「君の恋は、たまたま他の人より障害が多くできてるだけさ。だから諦めなくていい。絶対に捨てちゃダメだ」

彼女の目に映るトオルがいつぱいの笑顔になつて、言う。

「君は恋をしなくちやいけない。四方の家のために、誰よりも、誰よりもすごい恋をしなくちやいけない。だって、そうだろ。四方美空つて女は、そんなに安くはないぞ？」



「さあて。何、飲みます？」

トオルの呼びかけに、ややぐつたりとした面持ちの倫子は答える。腰を深々と椅子に沈め、深々と嘆息する彼女を見て、トオルはちらつと眉をつり上げた。

「あなたねえ～。まあ……いいわ、バー・ボン・頂戴！　ストレートで！」

そこまで酔っ払っているわけでもないのに、わざとらしく腕を振り回して叫ぶ倫子。その様子にくすくすと笑いを漏らすトオルは、ますます意地の悪い顔をして言つ。

「OK。じゃあ、シェリーにしましょう」

「あなたねえ～。何だかちょっと嫌いになってきたわ

「ははは、そう言わす」

美空が店を出てからどのくらい経つんだろうか？　『カーサ・エム』にはトオルと倫子の一人が残る。時刻はとっくにラスト・オーダーを周り、トオルはこの日の前の倫子をノックアウトすれば本日の営業は終了である。

しかし、敵もさるもの。そう簡単には倒れない。

ボトル一本は空けていようと思うが、見た目ではそこまで酔つた印象はない。立たせてみれば違うかもしないが、ここまで椅子との相性がいいとそれも最後まで叶わないだろう。

トオルはロックグラスに丸く削った氷を入れると、そこに酒を注いだ。なんだが茶色がかつたその液体は、氷でいっぱいのグラスに注がれてやつと透明度をみせるくらいに深い褐色の酒だった。ウイスキーよりもっと焦げたような色をしていた。

「また、強なお酒ね～。私を殺そうとしてる？」

「まさか。あなたを殺すには、きっとお酒じゃ役不足だ」

「全く。私はもっと幸せな死に方をする予定だから」

くすくすとトオルが笑いを漏らすと、「なによ」と倫子はその様子を不機嫌な顔をして眺めていた。

マドラーが静かに氷を転がす。からからと乾いた音でグラスが鳴く。

そしてグラスが倫子の前に置かれた。トオルの手元にも丸氷を作る際に削り落とした氷を入れたオン・ザ・ロックが用意されている。

「乾杯、します?」

トオルが差し出すグラスを見て、倫子はニッコリと微笑むと自分のグラスをそれに重ねた。

チンツ

「あなたが入れると何でも美味しいってのが、だんだん憎らしくなってきたわ」

「はは。ありがとうございます」

トオルはちょっと碎けた会釈で返すと、グラスを傾けた。

たっぷりと時間をかけて熟成させた、葡萄を原料にする酒 シエリー・オロロソ。二人が今、口にするその液体にはワインとは違つた一つの秘密がある。

「倫子さん、知っています? シエリーって、アルコールのカテゴリーに分類すると『酒精強化ワイン』。ワインなんですね。だけど、このワインは毎年毎年、同じ味の液体が瓶詰めされてリリースされるんです。生産年毎にっての味の違いがない……厳密に言うと味を変えないように努力された物ができ上がる。そんな、他とはちょっと違つたスタンスのワインなんです」

倫子はグラス越しに目をキョロっとさせて応える。その表情が、ちょっと可愛らしい。

『『ソレラ』って呼ばれる熟成の方式で、何段かに積み重ねた樽の、

一番下の段の樽から瓶詰めするんです。で、減った分をひとつ上の樽から、一段目の減った分をその上から補充する。そして一番上の樽にはその年の新しい酒を補充するんです。そりやつて何十年も均一な味を保つ努力をしているんですよ

「へえー。 そうなの」

そう言つて倫子はグラスの中身をジロジロと覗き込んだ。カラカラと氷が鳴いた。恥ずかしそうな音色をした。

「……でも、それは決して『変わらない』んじゃなくて、『変わる』ことを受け入れた』上での選択なんです。ワインってお酒は発酵や熟成を自然に委ねて作られるものである以上、常に同じ味つてことは絶対に有り得ない。だからこそ現実をしっかりと見詰め、誰よりもゆっくりと穏やかで小さな変化にあることを選択した。伝統や格式を守るということは頑なに変わらないということじゃなく、しっかりと地に足を付け確かに一步を歩み続けることなんだ、と。何十年も先の幸せを冷静に見据えて、大成功と大失敗を繰り返して成長していくのではなく、小さくとも着実な歩みを積み重ねていくのだ、という決意の仕方。それもまた、人の生き方……ですよね」

トオルは最後の方は呟くような声で言つた。そして彼は自分のグラスにそっと視線を落とす。

「四方宗太郎が、 そうだと……？」

倫子が小さく応えた。

「いや、……これはつまりは本当のことはわからないですけれどね」ちらりと見やつた目が、そつと細くなつた。

「でも、そうであつたらいいな、と。ただ、みんなが自分以外の誰かの幸せを願つただけ。それが上手く回らなくなつちゃつただけなら、そんなには悲しくはないから」

倫子は黙つてトオルの言葉を聞いていた。何か特別なものを見るよつに静かに、じつと。

「美空は自分の家と美純のために、自分の本当の心を隠そうとした。それこそ、自身の眼から。だけどそれは簡単なことじゃなくって、

結局、幸せを願つた人々を逆に傷つける事になつてしまつた。でも、これだけだつたら、まだ取り戻せると思いません？ まだ、きっと大丈夫……。だつてみんなが誰かを幸せにしようと願つただけだから

ら

「そう、かもね……」

倫子の答えは肯定でも否定でもないような、ちよつと曖昧な言葉だった。

それは正しい。トオルもそう思つ。

でも、彼女達が『変わること』を決意できたなら、もしかしたら今よりもっと素敵な未来に出来るかもしない。そう、トオルは願うのだ。

「それにしても…………」

トオルは纏つていた空氣の色を変えたみたいに、急に口調を化えた。

「随分と驚かされました。あんな無茶をする人だとは思わなかつた。美空、……つていうより四方家を敵に回したら、倫子さん、大変なんじやないんですか？！」

けれども倫子の表情はあっけらかんとして、口にする言葉も気のない響きで。

「言つたでしょ。女を一人で50年もやるには色々と必要なのよ。

勘も度胸も

「うわあ～、それだけで片付けちゃうんだ……」

「そう……あとね、男」

「はあ？ 女一人つて、言つてませんでした？」

素つ頓狂なトオルの言葉に、田を一本線にしてのら猫みみたいな顔をする倫子。そして彼女はくししつと笑いながらトオルに指差した。

「……あなたがいたから。もし最悪の事態になつても、きっとあの日のオードブルみたいにあなたが解決してくれるって、私、確信してたのよ？」

トオルは額に手を当てて、困ったふうにみせた。実際、呆れてい  
た。

「買いかぶりすぎですって」

「そう? でも私、人を見る目には自信があるのよ~  
まだくししつと笑う倫子は、気だるくなつた身をさらに深く椅子  
に預け、目を閉じた。

「まあ、……あなたに言われるなら、悪い気はしないですよ」

トオルは柔らかく微笑んで、またグラスを傾けた。彼もまたいつもガス台の角に腰を落ち着けていた。

「でも、これで『借り』は返したわよ~。それに『あの子』がちゃんと恋愛するためにも、お姉さんとの関係はうまくいくないとね  
」

カララッと鳴らす氷。グラスを自分の頭上のライトにかざし、光の加減で変わる褐色の宝石を見るようにならなつとだけ目を開く倫子の声は、なんだかはずんんでいるように聞こえた。

「なんですか、それ?」

「あつきた! あなた……」

彼女にとつて的外れだったトオルの答えに、倫子は今日一番の驚きをみせて大声を上げた。

けれどもトオルは、ほんわりと回り出した酔いに少しだけ思考を緩やかにしていたせいで、いまいち彼女の言葉の意味はわからなかつた。ただ、問いただす氣にもならなかつたので適当な笑みで誤魔化すことにした。倫子もそれ以上は色々言いもしなかつた。

「まあ、いいわ。私も、そつちまでは手は出さないわよ。女を一人で50年もやるとちよーっと意地悪にもなるしね」

あと一杯だけ付き合つたら、今夜は閉めよ。トオルはそう考えていた。

J  
e  
w  
e  
l

70年代のメロディーが流れる。憧れと理想だつた『おと』。自分が生まれた年の頃に流行つたこれらの曲をリアルタイムで聴いていたことは、当然ない。

その曲が歌われた頃の時代背景や歌つた人の想い、願いなどは知識としてもない。自分の親くらいの人間が歌つていた曲だ。等身大、なんて言葉が当てはまるはずもない。

中学生くらいだろうか。部活動での先輩後輩の関係で年の差を意識するようになると、一つ二つ上の先輩達のそばには、なんとなくその曲があった。一步でも速く大人になりたい彼らの精一杯の背伸びだったのだろうが、まだ子供だった自分には輝いて見えた。大人達のように、それらの曲を身にまとつた彼らを羨ましく思い、憧れた。今ほど演奏技術も機械技術も発達していくわけじゃない時代、ギターやベースで創るシンプルでストレートなメロディーにのせて、ボーカルのハスキーナ声が何かを叫んでいた。俺はこうだ、と。お前らは間違つてる、と。もっと世界は平和であれ、と。多分、10代の頃の認識はそんなものだろう。カメラのフラッシュにあてられたみたいに、頭のどこかにそんな響きが焼き付いた。

時代が過ぎ、大人になつてもそれらの曲は未だそばにあった。社会に出たての自分達は、右も左もわからず悩み、苦しみ、そして酒を飲み、そこに再び曲があった。あの頃と比べ、歌詞も、想いも、いくばくか理解できるようになつた自分にあらためて訴えかけてくるのだ。自分はこんなもんじゃないだろう、と。明日はきっと変わる、と。夢はもっと大きく持つていいんだ、と。弱った心に手を差し伸べ、支えてくれた。前へ進む活力と希望を与えてくれた。

今、それでもまだその曲は隣にいる。

共にこれまでを戦つた同士として。苦楽を共にした伴侶として。まだ捨てきれない未来や夢を語る友として、そこにいる。歌詞とは

別に曲が持つ固有の空氣や、歌い手の生き様みたいなものを通して何かを語りかけてくる。あの瞬間に流れていた、思い出深い大切な一曲……。激しく生き、そして若くして逝ってしまった稀代のシンガー……。曲も自分達と同様に歳を重ね、長い時間を生きてきたのだ。そして色々なことを経験して、変わり、成長した。昔とは違う、新たな説得力みたいなモノを身に付けてきのだ。

多分、そういうことなのだと思う。あの時代の曲が色あせていかないのは。今も、耳にするのは。自分達より下の世代にもまだ受け入れられているのは。

それは等身大の自分を唱う曲にはない魅力。時代と共に姿を変える人間の叫びなのか、想いなのか。そんなものが根幹にあるからなのかもしれない。

時代は変わった。心に残る曲は希少になった。思わず口ずさむメロディーは、数えるほどもない。等身大の自分は明日にでも心変わるので。等身大の曲たちはそれにまた新しいメロディーと歌詞で応える。音楽は今や消耗品。心に残る曲が生まれるための土壌は、もう何年も手を入れていらない硬い土だ。種を撒いても根は張らず、水を撒いても芽は出ない。

今日の『カーサ・エム』のカウンターには70年代のあの曲のインストゥルメンタルが流れる。

そしてカウンターには、それを口ずさむ声が静かに響く。

鼻歌で、気持ちよさそうに唱う声。きっと彼女はその曲を知らないはずだ。ところどころ音をずらしながら、それでもその曲は続く。時代が変わっても、メロディーは生き続けるのだと証明するみたいに。

美純のその鼻歌は軽やかに心地よい音色のまま、ずっと続いている。

美純はカウンターで料理が出来上がるのを待つ間、携帯電話でメールを打っていた。

時間が早いこともあり、『カーサ・エム』にはまだほかの客はない。彼女は最近の自分の定位置である、カウンターの一一番右端の席に座っていた。鼻歌はどうもご機嫌のあかしらしく、それが出るときはいつも決まって二コ一コとしていた。歌つてすることを指摘すると「えっ、また歌つてた?！」と驚くことすらあるのはもう『美純らしさ』を構成する特徴のひとつだと認識することにしていた。この子は相変わらず、ちょっとほわわ～んとしたところがある。これは多分、気を付けたところで治らない部類の性質だろう。

美純は、よく笑うようになった。

自然と笑顔が綻ぶ。振り向くとまず笑う。話していると田を細める。口角が自然と上を向いている。

これこそが本来の彼女の性質だったのだろう　　というのは、容易に推測できた。今までは心理的な規制や束縛がそこに働いていたのだろう、まるで笑顔は求められたときに作って出すもののようにぎこちなく後付されていたのが、今では彼女の代名詞であるかのように溢れていた。

そうなったのは、美純にとっての『天敵』であった姉が今はこの国内には居ないこと、ということも、確かに理由のひとつに違いない。が、それよりももっと大きな笑顔の要因は、大好きな姉と手探りながらもゆっくりと心を通わせ合えるようになれたことのほうだろう、とトオルは思う。

美空は今、カナダにいる。

トオルが彼女とここで話をしてから、まだほんの数週間しか経っていない。けれど彼女はそう『宣言』してから、たったの2週間

弱でこの国を離れていつてしまった。

『私、留学しようと思うんです』

彼女のようなしつかりとした女性にしたって、その手際のよさだけでは説明つかないほどの速さで準備を整え、そして美空はあつという間に飛んでいつてしまつた。今となつて考えれば、きっと何かの下地は彼女の中でじんわりと準備されていたのだろうと思つ。表面化していなかつただけで、頭の中では希望や欲求が溢れていたんじゃないだろうか。

厳格でリアリストだと音に聞く父、四方宗太郎を説得し、美空は新しい自分を見出そうと変化を始めたようだ。

「父は、すぐに理解してくれました。……ううん、むしろ快諾してくれて、援助は惜しまないとも言つてくれたんです。私、父のことを誤解していたかも知れない。もっと反対されることを覚悟してたのに、『そうか。頑張ってきなさい』って、たつたの一言で済まされて……なんだか拍子抜けしちやつた」

あの日、そのことをトオルに報告に来た美空は、随分と明るい表情でこう言つていた。その姿を半歩後ろから見詰めていた美純の顔も、同じくくらいに明るく輝いていたのを覚えている。

彼女達はその日、初めて二人揃つてこの店を訪れた。いつもは姉の視界から少しでも逃れるようにちよつと離れて歩く美純は、しかしこの日は違つていた。姉が彼女のために開けた扉をくぐつて、そして美空が自分の隣に来るまで入口のこつち側で待つてから、一人して店内に入ってきた。

それはく当たり前の家族の姿であり、く当たり前の姉妹の風景ゝだとトオルは思う。ただそれが、どの家庭でも同じように簡単に手に入るのかは別として。

私は自分に与えられた環境を大事にしたい。四方の家は国内外問わず、多くのお客様が訪れます。今以上にもっと多くの方と口

ミコニケーションが取れたら……それは私にとつてとても重要な事だと思つんですね。学ぶ機会があるのなら、今はそれを最大限に活かしたい。もつともつと多くの人と会つて、言葉を交わしていきたい。だから、私はこの国を出て自分のために時間を費やそうと思つんです」

カナダへの留学の理由をトオルが訊ねると、美空はそう答えたのだった。そして、そう言った美空の姿は凜としてとても美しかった。これまで何度もそう思つた事はあつたのだが、今回はちょっと質の違つた意味でそう感じた。まるで羽を広げた鳥のよつに、その美しさの全貌を表したかのよつだった。

「今日は、お礼とお願ひに来ました。……色々とお世話になり、ありがとうございました」

「そんな別にお礼を言われるような事は何にもしてないよ。実際、おっさんの小言につき合せただけだし」

トオルがそう言つと場は和み、トオルも美空も美純も笑つた。三人とも自然な笑顔で笑い合えた。

「美純に対しての『考え方』は今も変わりません。でも、美純との距離感は変えたい……。私は、彼女の姉です。でも、それを私は忘れてしまつていたんだと思います。自分のことで一杯いっぱいになつて、家のことに縛られて……その負荷のうまく処理しきれなかつた部分を、最後はいつも彼女にぶつけていたんだと思います。私達は姉妹なんだから、苦しかつたらお互に音を上げればよかつたのに。愚痴を言い合つて、いっぱい話し合つて、それで笑い合えばよかつたのにな、つて思つたんです。……今更、なんですかどね」

美空が今ではなくじいではない何処かをじつと見つめながら、丁寧に言葉を紡ぐ。

「そう。……でも、今更つてことはないよ」

呴くよつに小さく答えた。トオルは美空が紡いだ言葉を、彼の言葉で正しく変換しなおす。『四方家の一人の少女のため用』の柔らかい言葉に置き換えると、穏やかな口調でもつて言う。

「みんな、何が正しいのか模索しながら生きてるんだし。正しいと思つて選択した道が、実はかなり間違つてたりすることもいっぱいあるし。実際のところ何が正しいのかなんてわかる人間は、きっと世の中を探しても一人もいないんだ。でも、正しくない人間ってのがどんなのかは、多くの人がわかつてゐるんだよね」

「えつ……？」

「間違つてると気づいたときに、反省して、正しいことを模索できない人間。間違つたことを認められない人間。こういう人間はもう、救いようがないからね。だから『今更』って言葉は、多分、今の君達に使う言葉じゃないんだ。……きっと」

トオルが作る料理をカウンターで横並びに座つて食べる二人の姿は、紛れも無く姉妹だつた。

彼女達は一人の会話を楽しみ、時折交ざるトオルとの会話を楽しみ、カウンターで過ごす時間を楽しんだ。日が暮れ、二人が店を出ようという頃には、美空はちょっとほろ酔いだつた。余程気分がよかつたらしく、上機嫌でカラカラと笑つていた。そんな普段とは違う姉の姿を初めて見たのだろう、美純はちょっとだけ不安そうにして姉の手を握り、体を支えていた。

空気が　あたたかだつた。

美空は最後に一つ、トオルに頼みを訊いて欲しいと言つた。

「美純には、一人で食事をさせたくないんです。うちには私が居なくなればほとんどはあの子しか居なくなつてしまふ。父と母は普段、家で食事をとることの少ない人達です。あそこには食事を作る人間もおりますし、後片付けをする人間もいます。けれど、同じ席で食事を楽しむ人間はない。そんな冷たい食事ばかりさせたくないんです。……だから、毎晩とはいません、でも週に3、4日はここであの子に食事をさせて上げたいのです。どうか、お願ひできな

いでしょうか？」

アルコールのせいか、しつとりとした表情で申し出る美空の声は、ほんの少しだけ潤いを帯びているように見えた。ああ、とトオルは思つ。この子はたつたのこれだけで世の男性の多くを攻略してしまうタイプだ、と。プライドの上に固く張つた緊張感で近寄り難かつた前と違い、求めたり甘えたりできるようになつてしまえば彼女は強い。多くの人が努力で培う『魅力』を、彼女はもともと人よりも与えられて生まれてきた部類だ。

「構わないですよ。うちはこれで常連を一人、つかまえたことになりますし。カウンターのひと席は毎晩彼女のために取っておきます」

美空は弾けるような笑顔を見せた。

「ありがとうございます。わがままなお願いで、ごめんなさいね」

「いいえ、ご心配なく」

その隣でようやく会話の意味が理解できたらしい少女がかぶりを振つた。

「ちょ、お姉ちゃん！ そ、そんなことしなくなつてもいいよ。私、一人だつて大丈夫だからあ」

「別にいいじゃない？ 来たくない日は、こなればいいんだし」「でも……」

美純がちらりとトオルの顔を覗いてきたので、彼は反射的に口角を上げて笑顔を用意した。すると、それにちょっとびっくりした美純が慌てて顔を伏せてしまう。

「私は別にいいけれど……ねえ、美純」

美空がそんな美純に顔を近づけて、何か耳打ちする。途端に美純が振り返つて「嫌ッ！」と声を上げた。

「そう、残念……。あなたがそうじやないのならつて、思つてたのになあー。私、こんなに気を許せる人つて、あんまりいないの」「だ、ダメッ！ お姉ちゃん、ずるいよおーー！」

「ふふふ。冗談よ」

「もう、……嫌い」

やり取りの内容まではよくわからなかつたが、どうやら美純がここに食事に来るのは決定らしい。『氣づけばいつの間にかお抱えの栄養士扱いだ。まあ、別に自分は困るわけでもないし、売上にだつて貢献してくれるのだろうから、店にとってはむしろありがたい話だ。それからしばらくトオルと言葉を交わし、その後二人は店を出でいった。

美空と会つのはこれっきりしばらくのదらうなと思い、彼は入口から出てしばらく姉妹を見送る。

店にいる間はあんなに仲が良さそうだったのに、帰りの一人は何故か仲が悪くなっていた。むくれる妹をなだめる、優しい姉の姿がゆっくりと遠ざかつていった。

美純はだいぶ長いメールを打つていた。

「なんだ、随分と長く打ち続けるけど、誰にメールしてるんだ？」トオルは何気なく彼女に訊いてみる。

「えへ、別に？」美純は気のない返事だ。

彼女のためのサラダを盛り付けながら、トオルはちょっとだけ意地悪な言葉をかけた。

「……そうか、彼氏だらう？　悪いヤツだな～、美空に言つけてやるぞ」

「ち、違うもんッ！」

ギョッとした顔をして、美純が慌てて立ち上がった。

「そんなんじやない、お姉ちゃんだもん！　変なこと言わないでよ、バ、バカッ！」

「くくく、バカとは酷いな。でも……逆にそんなふうに大袈裟に否定するのって、怪しくないか？」

トオルは一度手を止めて、そして彼女を覗き込む顔をわざと疑うような表情にする。

「なあ、美純。ほんつとうのところは、彼氏だらう？　いいぜ、

美空には黙つてやるから正直に言つてみろよ?」

すると美純は突然真っ赤な顔になつて、何故かびっくりするくらい張り上げた声がトオルにやり返した。

「彼氏なんて、いないもんつ! バカツ――――!」

ドスンッ、と激しく音をさせて椅子に座り込む美純。そしてまた携帯の画面に向かつてにらめっこを始める。何故か不貞腐れたような顔をして、再び携帯の画面を指で触り、そしてたまに荒っぽく叩く。

そこまで怒らせるつもりはなかつたんだがな……とトオルは嘆息した。急に不機嫌になつた美純に、彼は自分のちょっと過ぎた意地悪を反省するのだった。

美純が青虫みたいにもしゃりもしゃりと、口だけ動かしてサラダを食べている。その顔は、さつきからむくれたままだ。ほっぺたにたくさん詰まつてゐるわけでもないのに、咀嚼のあいだも飲み込んで、ふうとしている。きっと何を言つても藪蛇だらうな、と思ったトオルはしばらく彼女をほつておくことにした。

食事のあいだにも何度か着信のある彼女の携帯電話。そのたびに美純は画面を覗き込むと、短い文の返信を送り返した。そして何件目かの返信を見たときに、急に美純がほくそ笑んだ。ちらりと横目でトオルを見ると、もう一回、ほくそ笑んだ。続けて届いた新しいメールが、どうとう彼女の胸の薄曇りを全部払つてくれたらしく、美純はニンマリと微笑む。トオルは背を向け作業をしていたから、それまでの様子には気付いていなかつた。彼からしてみたら振り返ると表裏をひっくり返したみたいに美純の機嫌がよくなつていたわけだ。なんだかその様子に妙な気がして、トオルは眉間にしわを寄せた。

その後また、美純は終始二コ二コと始めた。お得意の鼻歌が復活し、今は店内に流れるイギリスのロック歌手のインストゥルメンタルが、彼女なりのアレンジを加えたカヴァー曲になる。『イギリス第一の国家』には不届きにもどぎれどぎれの日本語の歌詞が付け加えられる。それも「気づきもしないで」とか「鈍感なくせに」とか、ちょっと耳を傾けるとずいぶんな歌詞だ。

「あのさ、それ、洋楽のインストだぞ。何でまた日本語のおかしな歌詞なんて付けるんだよ?」

トオルは次の料理に手を動かしながら訊ねる。

「えー、だつて原曲なんて知らないもん。別にいいでしょ、そう聞こえるんだから」

「いや、それはそうだけどな……」

威厳を取り戻すための戦いは、呆氣なく終わる。17歳の少女の前には名曲も形無しだった。

急にバタンッと入口のドアが開いた。

「やあ、トオル。元気いー！」

やたらと明るい声が先に店内に入ってきて、それからガガコと音をさせながら本人が入ってきた。割としつかりとした木製の底のサンダルが、フローリングの床と当たって大きな音をたてる。マキシ丈の赤い花柄のワンピースがバサバサと音を立てて店内を縦に横切つた。腕にかけていた明るい色のレースのボレロを邪魔くさそうにカウンターの椅子に放り投げ、手に持つたコンビニの袋をガサツとカウンターの上に置き捨てる。

「これ、お土産」

そう言われたコンビニ袋の中身は、外見からはなんだかわからな。ただ細長い棒のようなものが幾つも入っているようだ。不規則な向きに突き立つたアンテナみたいに、その棒がところどころ中から袋を押し上げている。チラッとみた美純からはウーのよつた形のモノを想像させた。

「おい、またソレかよ」

しかしトオルはうんざりしたような声で答えた。彼には見なくても中身がわかつたからだ。

「いいじやないよう、あたしとあなたにとっちゃ感慨深い品でしょう？」

「だからって、そんないっぱいあつてもなあ。実際、この前にお前が持つてきたのだって、まだそこに残つてるんだ」

「さつさと食べなさいよー。まったく、贈り物のしがいのない奴よね」

「なんだよ、それ……」

呆れた、と声を上げたその来客に、逆に呆れて一の句の継げないトオル。「まあ、いいわ」とさつさと椅子に座るその女

泉瑠璃

は、座つてすぐに横を振り向いた。視線の先の、そこにいた美純はドキッとして口ずさんでいた鼻歌を止めた。

「い」、ゴメンナサイ……

アイラインがきつちりと縁どられた瑠璃の大きな瞳がじつと見詰めてくるので、自分の鼻歌が気に障つたんだろう、と美純は反射的に誤つてしまつ。そして瑠璃の視線を避けるように俯いた。しかし、

「ちょっと……澄んだ音。いい声ね、キ!!」

「えっ？」

びっくりして思わず美純は声を上げた。想像していたのと全く違う瑠璃の反応に、驚いた。

「素敵。ねえ、なんでやめちゃったの？」

あつけらかんと瑠璃は言つ。美純は顔を上げ、瑠璃の表情を覗いた。その日には初対面の相手への挨拶変わりな世辞や社交辞令のような色はなく、むしろ歌が急に止んでしまつた事への純粹な不満みたいなものが映つていた。それで美純はますます困惑してしまつた。

「おい、瑠璃。うちの客に馴れ馴れしく話しかけるなよな。お前ら、

初対面だろ？」

「あなたは馴れ馴れしくないの？『つづの客』とか『お前ら』とか」

言葉じりを掴まれてトオルは苛立つた。おまけに茹でていたパスタの出来上がりを示すタイマーが鳴つて、益々苛立つ。

「ああ、くそつ」

そういひぼしながら、トオルは茹で上がつたパスタをフライパンに移した。舌打ちしながら鍋をあおつた。

そんなトオルのことには我関せず。

瑠璃はズイツと美純の方に体を寄せて言つた。

「キミ、ホントいい声だよ。うんうん、羨ましいー。カラオケとかじゃ、採点、すつじいんでしょ」

「えつ……い、いえ、そんなんじゃ……。それに鼻歌なんて褒められたら……私、恥ずかしい」

美純は思わず顔を赤くして、肩を小さくしてしまった。

「ひやーつ。かつわいいね、女子高生！　あたしのときってどんな  
だつたかな？　うーん……」

ちょっと昔を思い出すみたいな顔をするが、瑠璃はそれをすぐに  
止めにしてしまう。そして皿をカウンターの向こうのトオルにやる  
と不躾に訊ねる。

「ねえ、なんでこんな可愛い子がここにいるの？　バイト？」

「お前なあ！　だからその子はうちの客だつて言つてるだらう？」  
トオルは荒っぽく答えた。ついてないこと、今日のメニューは  
仕上げにかなり気を遣うメニューを選んでしまったのだ。美純のた  
めのパスタは、生ウニのペペロンチーノだつた。ちょっとでも気を  
抜くと火が入りすぎてダマになつたり、固まつたりしてしまつから  
手が止められない。

「あんた、偉そうな店員ね。見たことないわ、そんな奴」

「ぐう……。うるさいなあ、お前が来るといつも調子が狂う……」

「へえー、尚も上から。ちょっと、責任者、出しなさいよ！」

「ああ、うるさい！」

――――する瑠璃にお手上げのトオルは、それでもなんとかパス  
タを完成させ、盛り付けた。皿の上に山吹色の淡い色合いのソース  
が絡んだシンプルな一品ができる。仕上げに飾りのウニを小さ  
じ一杯とハーブを一枚添える。そして小さくなつたままの美純の前  
に差し出した。

「ああ、美味しそ。それって、あたしにはないの？」

さつきまでの難癖はもうどこかに置いたらしい。瑠璃はさつきと  
新しい興味に乗り換えて喋る。

「あるわけないだろう。欲しかったらご注文をどうぞ、お客様」

「うつわー、言っちゃつたよ。友達がいのない奴だねー、あんた  
つて」

瑠璃はその魅力的な造りの大きな瞳を見開いて言つと、撫然と頬  
を膨らませた。

何かぶつくさ言いながら、瑠璃は自分が土産に持ってきたコンビニ袋をひっくり返す。中からはバラバラと棒付きの飴がカウンターに落ちた。その数、10口以上。それは昔からよく耳にする、派手なデザインのビニールでまんまるの飴をくるんだ棒付きのお菓子だ。瑠璃は包装に書いてある文字を幾つか眺めては置き、眺めては置きして、今の気分に合う味の一つを見付けると、ビリビリと包装をはがして口に入れた。土産と言いながら贈った主に気兼ねもなく食べてしまう辺り、彼女のサバサバとした性格がわかる。

瑠璃はチュパチュパと飴を舐めながらも、すぐ横のパスタの皿をじーっと眺めていた。

「……やっぱり、美味しそう。あたしもそれ、食べたいなあ」

「う~、じつと見られると食べづらいよ…………」

とうとう美純が音を上げた。見かねたトオルが助け舟を出すことにする。

「おい、瑠璃。いい加減にしろよ」

ちょっと威圧感を込めた声でトオルが言つ。すると瑠璃はトオルを見上げて答えた。

「よーし、決めた。あたしにも口レ、頂戴。金はもちろん払うかられ」

「ふつ。……当たり前だ、誰がお前になんか恵んでやつたりするかトオルはげんなりとして、彼女のためにフライパンを手に取つた。

泉瑠璃。彼女はいつもトオルのベースを乱す『天敵』みたいな女だった。

ぐるぐると変わる彼女の会話に、いつも彼は手を焼くのだ。

瑠璃は一年の半分を日本、もう半分を西ヨーロッパで生活する行動派な女だ。日本にいる間は都内にある彼女の実家に、海外にいる間は各地で小さなホテルやホームステイ先を見付けて生活している。語学に堪能で、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語を使いこなす。そのどれもが知識ゼロのまま行った現地での実践のみで覚えた『現地語』だった。おかげで『日本人的』な語学に長けた人間に聞かせると、かなりドキッとする単語や文法が雜じる乱暴な会話らしい。

が、彼女にとってそんなことはどうでもいいことで、瑠璃はどの言語にしたって一番重要なことが何かをよく知っていた。それらはどれもただの『ミニミニケーション』ツールの一つに過ぎないのだ。自分の言いたいことを伝え、相手の意図をくみ取ることができてなら、彼女にとって話す言葉が何語であっても構わない。もつと言えば、それは言葉でなくともいいのだ。

そのため彼女は言葉と同じ高さで、自分の考えを伝えようと溢れるほどの情熱と、足りない分を補うための表情を使いこなす。それら全てが融合されて始めて彼女にとっての『外国语』が出来上がる。だから『マルチリングガル』なんて呼ばれるのを彼女はことさら嫌つた。自分は『ミニミニケーション』を取るために必要だからやっているだけだ、と強く主張する。

そんな彼女の生業は、ヨーロッパの雑貨や小物、それに家具を日本に輸入、販売するインターネット・ショッピングの経営だ。最近のデザインのお洒落な雑貨や小物から、現地でも珍しい19世紀頃の装飾が施された価値ある家具などの優れた品々を、彼女自身の足で歩き回り探し出してはネットで紹介し、買い手があれば輸入するのだ。日本国内と海外に数人ずつの従業員を抱える程度の小さな会社だが、年収一千万は下らないやり手の若手経営者として、彼女は日本のテ

レビや雑誌に取り上げられたこともあった。

本人はそう思っていないくとも、世間的には泉瑠璃という女は成功者だ。

しかしその彼女がどうしてか、この都会ではない街の小さなイタリアンにやつてくる。

しかも、さすがにステッケースを送り付けてきたりまではしないものの、日本に戻ると必ずと言つていいほど、両親のいる実家に帰るよりも先にトオルのところへやつてくる。まるでここがホームベースかのように真っ直ぐに手掛けやつてくるのだ。もう何年も、ずっと変わらず。

彼女が自分のことを親友だと思つてくれているのを、トオルはよく知つていた。若い頃共に色々な経験をし、苦労も一緒に乗り越えた仲だからこそ今もこうして慕つてくれているのを、彼はよくわかつっていた。

だが、トオルは瑠璃が苦手だった。

いや『瑠璃が』というより、彼女がいることで頭をよぎつてしまつ『過去の記憶』の方が苦手なのだ。忘れようと心に決めた記憶が、苦楽を共にした頃の思い出と一緒に蘇つてしまつのが、辛いのだ。

そこには互いに夢を語り、挫折し、それでも励まし合つた、トオルと瑠璃と彼女の姿があるから。

心の奥底に仕舞い込んだ、彼のもう一人の親友の面影。

それが、辛いのだ。

瑠璃はよくしゃべつた。

パスタなんて普通のコックが作れば10分程度でできるものだ。そして彼女はその10分のうちに、ゆうに10日分くらいの出来事をしゃべり尽くした。出来上がったウニのパスタは話題を遮る邪魔

者みたいな扱いを受けて、ものの一、二分で彼女に飲み込まれてしまう。トオルはその会話の量と、出来た料理の扱いにげんなりしてしまうのだ。が、彼のそんな様子には気も留めず、瑠璃の話題は尽きない。

そのうちに『カーサ・エム』にもパラバラと夜の来客が入り出す。慌ただしくなるトオルを引き止めるのは諦めた瑠璃が、次の話し相手に捕まえたのは美純だった。

カウンターの一つ空けて座っていた席を隣に移し、それで完全に追い詰められた美純を相手に再開する会話。最初こそ迷惑そうに眉をしかめていた美純だが、驚くことに次第に一人は意氣投合し始めた。そしていつの間にか美純は瑠璃の話に夢中になっていた。瑠璃の話すヨーロッパの国々の話。そこで生活、日本との文化や習慣の違い。歴史や宗教によつて変わる建築や装飾のデザイン。それらを瑠璃は実体験もまじえ、淀みなく流れるように話していく。美純はそんな瑠璃にどんどん惹かれていった。田の前の女性に憧れのような視線を送る彼女の手元で、忘れ去られたメインディッシュの牛フィレがどんどん温度を失つていった。いつになく熱心な聞き手を得た瑠璃の話題は、一層熱を帯びていった。

そのうちに、なんのキッカケから出てきたのか話題はトオルとの出会いや昔話になつていた。

共通の友人でもない限り、普段、そんな内容の話はすることがないものだから、瑠璃の話題は更に弾む。彼との出会いがスペインのバルセロナであったこと、瑠璃自身はその時絵画や彫刻を学ぶために留学していたこと、なかなか言葉の壁を破ることができなかつたトオルを、毎日のように連れ回し言葉の実地訓練を繰り返したことなど、瑠璃は当時を懐かしむように話す。話題にトオルが出てくるものだから、益々美純の興味は惹きつけられ、彼女は次第にあれこれと問い合わせるようになつた。それに答える瑠璃にも熱が移り、会話はもう止まることがなかつた。

「あいつはもう、ほんとうにガキでさ。いつも夢ばかりみてるかんじなの。『お前は今も寝てるのか?!』って思うくらいでさ。現実がスッポリなくなっちゃってるみたいな男だつたんだよねー」「へーっ……」

「サッカー、サッカー、サッカー、サッカー、サッカー、でさ。あたしに『ナントカ』って選手のすごいところを並べ立てたりするわけよ。でも、知らねーつーの。聞いてるのも面倒で、へーへー流してたら今度は急に文句を言い出してさ。『お前、バルセロナに住んでるのに、サッカー興味ないのか?』って。……お前基準で世界を造るなー、つてさっすがにその時はキレちゃつた』

「へーっ。なんか、今からは全然想像つかない」

「多分、あいつがオヤジになつたのよ。男はきっと女より速く歳をとるんだわ。だから寿命も短いし」

「あー」

「ちょっと、今の半分は冗談よ……」

「うーん……」

「……笑わないの?」

瑠璃はそのままトオルの過去を話し続けた。彼が必死になつてサッカーに打ち込んでいたことや、結局夢やぶれて苦悩した時期のことを語ると、美純はちょっと鼻を鳴らしながら聞き入つた。そしてたつぱりと一時間以上は話していただろうか。瑠璃はようやく満足そうにトオルのいれたエスプレッソを口にしていた。

とうに日は暮れ、窓の外には夜の帷が下りていた。いつの間にか『カーサ・エム』の中も落ち着きを取り戻し、穏やかな食後の空気で満たされていた。

トオルは美純から掛けられたいくつかの質問で、瑠璃が自分の過去のことを話したこと気に付く。別に彼女に対して口止めしたことはないが、あまり話されて気持ちのいいものでもなかつたので、トオルはちょっと不機嫌な顔をした。しかしこの古くからの友人がそ

んなことで悪びれるはずもなく、案の定トオルの様子に気付いても別段気にする素振りもしなかつたので、トオルはため息をついた。

瑠璃が急に立ち上がったので「帰るのか?」と訊くと、「トイレよ。女性に対して失礼じゃない?」と口を尖らせて返してくれる。やつと厄介者を追い払えると思ったトオルが再び溜息したので、その表情を見付けた瑠璃は、もう少し長居してやろうと意地悪な決心をした。

だいぶ時間が過ぎていた。普段だつたら美純はとっくに家に帰っている時間だつた。だが刺激を受けて活発になつた少女の興味が、彼女を『あと少しだけ』と椅子に縛り付けているのは明らかだつた。トオルは頭をかいた。一体、どうやってこの二人を追い払おう、と。

その時、ガチャリと入口のドアが開く音がした。

「いらっしゃ……ああ、こんばんわ

と、トオルが馴染みの客にする挨拶をし、

「こんばんわ。ご無沙汰して……えつ、ちょっとあなた、四方さんじゃない?」

と、入ってきた女性がちょっと驚いた声を上げ、

「えつ? ……え、ええー、留利子センサー?! なんでこんなとこにつ?」

と、さらに驚いた美純が大声を上げた。

Opposites attract.

大庭留利子

彼女は『カーサ・エム』のすぐそばのマンションの住人だつた。そしてトオルは知らなかつたのだが、四方美純の高校の教師でもあり、彼女の担任でもあつた。

留利子は美純の姿を見付け最初驚いていたが、すぐに教師らしい顔つきになる。

「四方さん、あなたこんな時間にこんなところで何をしてこられるの?」「う、うええ。センセーこそ、なんでこんなところに来てるのよ~」「そ、それは……そんな事、私の勝手よ!」

「うう……。じゃあ、私も勝手で……」

ぶしぶしと小声で言う美純を、留利子は一喝する。

「そうはいきません! 未成年がこんな遅い時間にお酒を飲むような場所にいるなんて、ダメよ。間違ってるわ」

さすがに見かねたトオルが助け舟を出した。

「まあまあ、大庭さん。その子のことは僕に免じて許していただけないでしょ? うか?」

「えつ?」

美純の方に向けられていた視線がトオルの方に変わる。そうすると、キツとしていた眉がやや柔軟に変わる。美純は追い詰められたネズミみたいだつた表情をホッとした顔に変えた。トオルは穏やかな笑顔を作つて留利子を説得にかかる。

「四方さんはうちの大事なお客様なんですよ。彼女のお母さん、それからお姉さんにもよくしていただきてるんですよ」

「でも、だからって未成年がこんな時間に出歩いているのを容認するわけにはいかないでしょ? う?」

留利子の意見はもつともだった。けれど、トオルの笑顔は濃度を増す。彼女の言葉を理解しつつも、同調はしないといつ『暗の否定』の空氣を発する。

「留学していくたその子のお姉さんからの頼みで、僕が美純さんの面倒を見るよう言われてるんですよ。まあ、そうはいっても主に食

事の面だけなんですかね」「はあ……」

「今日はちょっと店の方も慌ただしかったから、それで彼女の夕食を後回しにさせてもらつたんです。美純さんも『授業の復習をするから構わない』って言つてくれたから、甘えちゃつて。結局、バタバタしてたらこんな時間になつてしましました。すいません、今後は気を付けます」

トオルは軽く頭を下げる。そうするとカウンターの向こうから小さなため息が聞こえてきた。留利子の妥協の音だった。

「……もう。わかりました、そう言われるなら今日は口をつぶりますけれど、シェフもあんまり遅い時間まで彼女をここに居させないで下さい。なんと言わても、この子はまだ高校生なんですから」

そう言つと、ずっと立ち尽くしていた自分にようやく気づいたようになつた留利子はカウンターに座つた。瑠璃の一つ開けた隣の席に腰を下ろした。

トオルは留利子の言葉に素直に頷き、もう一度笑顔を作つて『暗の肯定』を発する。場の雰囲気は平静を取り戻したようにみえた。「でも、四方さん。あなた、私の知らないところでは結構優等生なのね。先生、ちょっとびっくりしたわ」「…………」

が、やや脚色が過ぎたらしい。美純はさつきまでは別の理由で、また追い詰められてしまう。瑠璃を挟んだ隣で身を小さくし、少しでも被害を抑えようとする彼女の、たっぷりと怨念のこもつた視線がトオル目掛けて飛んできた。トオルはそれを気付きつつも何気なくかわし、留利子の注文を取りに向かうのだった。

と、いつても彼女のオーダーは大概いつも一緒なのだが。  
「大庭さん、いかがいたしますか？」  
「じゃあ、いつものをお願いします」  
「はい、かしこまりました」

そしてそれは今夜も変わらない。彼女の前に用意されるのはチー

ズと生ハム、バニーヤカウダ（北イタリア風の野菜ステイック）が少しずつ盛られたひと皿と、ハーフボトルのシャンパンパニユー……。

『カーサ・エム』のワインリストには、普段シャンパンパニユーのメニューは載せていない。だからこの一本はトオルが留利子のために用意している特別な一本だつた。留利子は隔週金曜の夜に、ほぼ必ず『カーサ・エム』を訪れては、今日までの自分へのご褒美を欠かさないのだ。そのサイクルを変えることなく、常に一定のリズムで生活することで、ヴァイタリティーを保つタイプの女性らしい。

カウンター越しのトオルによつて注がれた液体から昇るシュワワときめの細かい泡が、グラスの中を下から上へとたゆたう。その一粒一粒を留利子はぼんやりと眺める。日頃の疲れやストレスが頭の先のほうから蒸発してゆく。出でいつたのを補填するように幸せのエキスが埋める。留利子の癒しのサイクルが今日までの彼女を労い、明日からの自分に活力を与えてくれる。そしてゆっくりとグラスを傾ける。

留利子は女性にしては珍しく食事のあいだに言葉をあまり挟まない。かといって黙々と食べるわけでもなく、まるで一口一口を慈しむように食べるのだ。咀嚼の回数も驚くほど多い。トオルは決して客を注意深く観察するようなことはしないのだが、それでも他の客と大きく異なる行動を取る人間というのは目を引くものだ。初めて気付いたときは随分と違和感を感じた。

あるときトオルは、思い切つて訊いてみたことがあつた。「留利子さんって、本当に大事そうに食べますよね」と。すると留利子は『食べる』という行為に対する彼女の強い思いを語ってくれた。それは彼女の信念と呼べるくらいのしっかりとしたポリシー。よく噛むこともそうだし、慈愛に似た表情で物を食べるには『出處の知れた安心で安全な食物を食べることが出来る満足感』から無意識ににじみ出た彼女の心情なのかもしれない。

彼女は、幼い頃にアレルギーに苦しんだ時期があつたといつ。それを乗り越えることができたのは、無農薬の作物や安全性の確認さ

れた食材だけを選んで摂取するよう心掛けたかららしい。

「ちゃんとしたものをお食べることから健康な体が始まるんだと、私は信じています。実際、私がそつだつたから。だから安全な食材を美味しく食べることができるのは、とても幸せな事だと思います」と、留利子は言つ。『カーサ・エム』で扱う食材は厳密にすべての材料がそつかといえどそこまでではないのだが、今、留利子が食べているものに関しては生産者の顔のわかるものばかりだ。また、良い食材を選ぼうとすれば必ずと出処にこだわるようになり、それが結果的には安全で安心な食材を仕入れることにもなつていて。

「今日のお野菜、とつても美味しい。これはどこで採れたものなんですか？」

「人参と蕪は京都のものです。トマトが北海道。あとのものは地元の直売所で買いました」

「新鮮だからかしら？ 野菜がとつても甘い」

「そんなふうに言つてもらえると、農家さんもきっと本望だと思いまますよ」

しばらくして美純が逃げ出すように帰つていつた。それから一時間くらいか、シャンパニューと食事を楽しんだ留利子も満足そうに帰つていく。そうして店内には瑠璃とトオルが残つた。

「……相変わらず、固めの性格な女は苦手か？」

「別に。そんなんじゃないわよ」

「そうか？ お前、あの人來たら一言も口をきかなくなつたじやないか」

「うるさいわね。……ただ、話すのが面倒なだけよ。他に理由なんてないわ」

トオルの言葉に、不機嫌な顔で答える瑠璃。

「もう、いいからさとと店閉めちゃいなさいよ。そつちといつちじや落ち着いて話も出来ないわ」

「おい。営業妨害もいいところだな」

「十分稼いだでしょ。今夜はもつ、終わりよ」

「相変わらず、勝手な奴だな」

あれだけたつぱりと喋り倒しておいて、『落ち着いて話せない』と言えてしまつところがまた瑠璃らしだ。トオルは小さなため息を付くと、入口の明かりを消し、看板をCloseにした。瑠璃はまだまだ話す気らしい。夜は、長い。トオルはエプロンをカウンターの端に放り投げると、冷蔵庫から小瓶のビールを一本取り出し、蓋を開けた。瑠璃の隣の席にどすつと腰掛けると、持っていた一本を瑠璃の顔先にズイッと突き出す。

「サンキュー」

瑠璃は受け取った瓶でトオルの持つ瓶を小突いて乾杯した。口チ、と低いガラスの音が鳴る。そして一人はビールをあおる。

「戻ってきたの、三ヶ月ぶりか？　今回はどうのくらい居るつもりなんだ？」

「決めてないけど、でも、もうすぐじゃない？」

「何が？」

怪訝な顔でトオルが訊ねた。

「忘れたの、真由子の命日……。それまではいるつもりよ」

表情が、少し曇る。

「そうか。もう、四年も経つのか……。早いな」

「そうね。時間が過ぎるのは早いわよね」

それから、しばらくの沈黙があつた。再び言葉を発したのは瑠璃の方で、そのあとはまた相変わらずの内容がトオルを振り回した。夜は、長い。けれどもトオルは、ゆっくりと過ぎる今この瞬間の時間とは別に、あつという間に過ぎていく時の流れを感じていた。

そして、もう一つ。

その過ぎ行く時の流れの中に、少しづつ置き忘れていくよつて薄れていく記憶についても考えていた。

自分は少しづつ忘れて始めているのだ。

真由子の事を

。

つまり人は『忘れる生き物』らしい。

過去の記憶は時間と共に薄れ、やがてゆっくりと消えていく。人はそうやって過去のことを少しずつ忘れて生きていくのだ。

そう……であってほしいと、どこかで思っている。けれどそれは幻想でしかない。ただの願望でしかない。それは多分、『忘れた』という事実の罪悪感を希薄にするための詭弁でしかない。そうであれば美しく、そうであれば止む負えないような認識が人のどこかにあるだけだ。けれど現実はそれほど美しくはない。記憶をしまう場所はどこも出来の悪い重たい扉の向こう側なのだ。その扉は時間と共に錆びて風化し、ある日突然開かなくなってしまう。『忘れる』という現象は本来そういうものだ。まるでパスワードを無くしたフォルダのように扉が開かなくなる。実際、記憶が脳のどこかに存在している実感はあっても、データそのものを取り出すことができなくなる。そんなふうに急になくなるのが、人の記憶だ。

つまり人は『忘れることができない生き物』らしい。

その記憶の扉が一向に開かなくなつて、所謂『忘れた』状態になつても、記憶を構成する事実の存在までは消去することができない。あの時の出会いや、その後の別れの記憶をしまったフォルダは開かなくなつても、その存在と履歴はきちんと残つているのだ。そしてその記憶を『忘れた』自分を苛み、苦しめる。だから人は、記憶が時間と共に薄れ、やがてゆっくりと消えていくモノだと定義する。どんな記憶もいつかはそつなるのだと、自分に言い聞かせる。そうやって『忘れた』自分を擁護する。だが、それは決して悪ではない。

記憶は人を縛り付けるものではない。人を成長させる種だ。

だからたくさんの出会いや別れの記憶も、いつか種となつてそれが芽吹き、木になり、林になり、森へと育つしていくのだ。人間はそうやつて大きくなつていく。開かなくなつたフォルダの数だけ、人間は成長することができるのだ。その開かないフォルダの中身が存在するからこそ使えるソフトも、解凍できるデータもあるからだ。

つまり人は『決して忘れない生き物』なのかもしれない。

次第に上書きされていくデータの山。記憶のフォルダ自体がどこに埋もれたかわからなくなつた頃、開かなくなつたフォルダは突然、第三者によつて開かれることになる。何気なく打ち込まれた単語は、なくしたはずのパスワードだ。突然開く記憶の扉。あふれ出でくる膨大なデータ。そうやつて時々掘り起こされる『過去』と『今』とを混ぜ合わせ、常に更新と最適化を繰り返し造り上げられていく、配合も分量も造つた本人すらわからないその瞬間だけ入れることのできるのオリジナル・ブレンド。

それが『自分』という存在。

大事な『記憶』というエッセンスを、最高のものから目を瞑りたくなるものまで、全部忘れずフォルダにしまつてハードディスクを一杯にしていたからこそ出来上がる、現時点で最高の味が今の『自分』。

人は精神のある生き物だから、それを構成するキーワードである記憶を忘れる訳にはいかないのだろう。自分というものを造り出すため、人は決して記憶を、過去を、忘れない。

だけど人は『忘れるべき生き物』であるのかもしれない。

この生き物は脆弱で、記憶に囚われ、過去に殉じようともする。辛い現実や悲しい出来事を、簡単には払拭できない。ともすればそのため自分的一部を犠牲にしたり、精神を傷付け壊してしまうこ

ともある。人間は肉体より先に心が死んでしまう、数少ない生き物だ。でもそれは多分、生き物の自然な死に方ではない。

記憶は人を殺してはいけない。記憶は人の未来を妨げてはいけない。

『カーサ・エム』の定休日を使って、トオルは出かけていた。都内に向かう電車に揺られ、目指す場所まで一時間ほどの小旅行。窓の外は透き通り、よく晴れた青空だ。

この外出の理由は確かに自分にもあった。けれど、この外出のきっかけは自分ではなかつた。別にそのことに対する不満はないのだが、一抹、腑に落ちないところはある。半ば押し切られるかたちでこうなつた気がするが、本当に嫌ならば断固拒否したはずだ。そうしなかつたのは多分、彼女ということにトオル自身がストレスあまり感じなくなってきたからもあるだろう。この油断すれば親子にする間違われる年の差の少女ということに、彼は最近、案外慣れてきていた。

それでも、やはり腑には落ちない。

トオルは今日、何故か美純と二人で出かける羽目になつていた。彼の目指す場所は銀座だった。目的は古くの仕事仲間の店に顔を出しに行くことだった。そして美純の方にも目的があった。それは7、80年代の洋楽のCDを買いに行くことだった。そして、どうしてもそこにトオルも同行してほしい、と頼まれたのが今回一人で出かけることになつたきつかけなのなのだ……。

確か、初めは『女子高生』=『得体の知れないもの』みたいな認識だった筈だ。そのうち認識は『ちょっと面白い奴』くらいに変化した。先日、関係が済し崩し的に『お抱えコツク』みたいな立場に

なつた。

まあ、それはいい。

しかし何故だ？ ビューチしてかこの少女の学校帰りに待ち合わせ、隣り合わせの席に座り、同じ場所に一人で出かける羽田になつたのか、その辺についての経緯は今更ながらちょっと聞いてみたいなど思つ。だが、さつきから隣に座り込んだ少女は終始同じ格好で正面を直視してゐるし、話しかけても「エツ」とか「エツ？」とかしか言わない。

夏に近づいたせいか、日は長くなり始めていた。まるで時間の過ぎる速度がゆっくりに変わつたみたいだつた。トオルは溜息をつく。別に同行させられることになつた理由をビューチしても問い合わせたわけではない。相変わらず窓の一点を見つめ続ける、美純。考えるのも億劫になつて、自分もゆっくり進む時の流れにたゆたうよつにした。次第に微睡みがどこからか押し寄せてくる。

鼻腔をかすめる香りがする。甘い香り。記憶の中にはあつて、でも深く印象には残つていらない曖昧な覚え。思い出せないでいる

『……と、トオルは今度のお休みの日、予定つてあるの？』

『いや、別に。多分、ゴロゴロしてゐるかな』

『そ、それじやあ！ あ、あの、……い、一緒に行つてほしこころがあるんだけれど……ダメ？』

『はあ？ なんでお前と俺が出かけるんだ。友達と一緒に行けばいいじゃないか』

『だ、ダメなの！！ だ、だつてほら、私……む、昔の洋楽のCDが欲しくて。そういうの、トオルは詳しそうだから。そ、そんなの同じ歳の友達じや、何が良いのかわからないものっ』

『なんか遠まわしにジジイ扱いされてるみたいで、痛いんだが……』

『ち、違うもん、バカッ！ そんなんじや、ないもん！！』

『くくく……いいよ、わかつたよ。じゃあ、ついでに俺の用事にも付き合つてくれ。そうしたら、メシくらこは奢つてやるからさ』

『エッ？！　い、一緒にいはん、食べるの？』

『嫌か？』

『い、嫌じゃない！　嫌じゃないつ！！』

『ははは、わかつたよ。別にそんなに興奮しなくたって……』

記憶がうつすらと蘇る。

そうだ、きっかけは彼女でも、半分は自分が原因みたいなものだ。今更理由なんて思い出せないが、トオルの方から食事の誘いはした。何故だ？　もう溺れかけの微睡みの中、答えは見付からなかつた。ただ、もう一つだけ思い出したのだ。

「Jの甘い香りは彼女のものだ。そ、どおりで心地よいはずだつた……。

二十代の頃、一時期この辺りで働いていたこともあって、よく行くCDショップが何件かあった。大きな店舗は買いたいものがすでに決まっている時に行く程度で、むしろ小さなフロアの一角落るようなショップのほうが、スタッフの好みが品揃えにも偏って反映されていて興味をそそられた。その顧客を選ぶような潔さが、トオルは案外好きだった。

店の休憩時間にぶらつくにはもつてこいの場所だった。ほかじゃ決して聴けないようなタイトルが視聴に入っていたし、ショップのスタッフはたまに食事に来てくれたりもしたから、彼はお礼の意味も兼ねて足繁く通った。そうしている間に、いつのまにか『友人』とまではいかなくとも『仲間』意識は芽生えていたのかもしない。趣味が似ているおかげで、話しかけるとやたらとうんちくで返してくれるショップのスタッフが退社するときには、全然他人にもかかわらず何故か送別会に呼ばれて、朝まで飲んで語った記憶もある。

そうして今、そんなトオルの馴染みのショップはもうどこにも残っていない。残ったのは自分で一番重要度の低かった、楽器の販売やスクールも開催する大店舗だけだった。時代はたったの十年くらいで変わる。今や音楽はネットで購入するものだ。店舗を構えてする商売ではなくなってしまった。

トオルはこの辺りに唯一残る店舗で、美純のために何枚かのCDを選んでやった。彼女は「あの日のこのくらいの時間に流れていたヤツ」とか「雨の日によくかかるアレ」とか、かなり漠然と検索対象の特徴を上げるのだが、その都度二人は四苦八苦して問題の曲を探り当てることになった。検証を重ねても美純が探す曲が本格的にわからないとき、トオルは思い切って彼女に歌うように指示した。美純は顔を真っ赤にして拒否するのだが、結局はトオルの説得に負けて二回ほど彼の耳元で小声で歌った。メロディーだけを口ず

さむように歌うその曲を、美純は多くても数回耳にしたことがあるくらいのはずなのに、彼女は見事なまでに一音も外さず漏らさず記憶していた。トオルはそのことに随分驚いた。

彼女の声は確かにあの日の瑠璃が指摘した通り、よく澄んでいて聴き心地がいい。正確なコピードムーズに響くメロディー。おかげでこの方法はいとも簡単に目的の曲にたどり着くことが出来る有効な手段だった。しかし、美純がどうしても恥ずかしがってそれ以上続けなくなつたのと、他の客からの視線がなんとなく気になり始めたことでこの検索方法はあえなく中止となつた。考えてみれば、公衆の面前で急に10代の少女が一回りは歳上の男の顔に唇を寄せているのだから、その観点から見てみるとこの方法には重大な欠陥があつたわけだ。おかげでその場に留まりづらくなつた二人は、最低限必要な用事だけ済ますとそそくさと店をあとにした。

店を出てからしばらくすると、どちらともなく笑いだした。顔を見合わせると笑いは止まらなくなつていた。自分達のことを伺い見ていた買い物客の表情が幾つも思い浮かんだ。どの顔も見てはいけないものを見たかのように目を見開き、そして目を伏せていた。トオルと美純はゆつくりと朱に染まり出す空の下、普段は決して揉まれることのない人ごみに揉まれ、巨大な交差点を何度も渡つた。街の氣配はビジネスとショッピングの行き交う風から、帰宅と交遊がすれ違う空氣へと変わつていくように感じた。気が付くと街灯が煌々と点いていた。そんなものがなくとも街を照らす光りなんて、道路を挟んで左右に建ち並ぶビルの窓からの明かりと、頭上に光る二色のライトで十分なのに、だ。

トオルはふと、思った。彼らを見下ろす頭上のライトが、一つの色を駆使して人の心を支配している。街のあちこちにはびこるこの憲兵たちは、交差点の四隅で目をひからせ、人間の魂のスイッチを握っているようだ。赤く光れば人々は歩むのを止め、青の許しが出るまで一步も動くことなく立ち尽くす。たくさんの人々が行き交うこの街。同じだけ人々の感情や思惑が絡み合つているはずなのに、

誰の表情からもその本質を見付けられない。この街は無機質。行き交う人は魂を奪われた抜け殻みたいに同じ顔をしている。

トオルは、昔からこの街が嫌いだ。ここは人が留まるには冷たい。彼にとつてここは、ただ立ち寄るだけの場所だ。

二人は人通りの多い場所から離れていった。ビルとビルの谷間に、ところどころ背の低い建物が見え始める。トオルはその中の一つを目指した。路面に落ちる暖かな光が見えた。街を照らす硬質の光とは異なる、人の体温を感じるような明かり。トオル達はそこに向かって歩んだ。ここには今や大企業やチエーン店が主力となつた外食産業に、勝ち目のない戦いに身を投じる仲間がいる。自分と同じ数少なくなつたレジスタンスの一人が、無機質な街から逃げ遅れた人々を匿うようにひつそりと居を構えている。この場所に店を構えて三年。12席ほどの小さなビストロのオーナーソムリエは、トオルがこの業界に入った頃からの友人である古沼平太という男だ。二人は時々こうして互いの店を訪れては生存を確認し合つ、いうなれば戦友のような間柄だつた。

「お。久しぶり」

「ああ」

来店してきた古くからの友人を見付け、平太は接客中だったテーブルから一端振り向いて声を掛けてきた。トオルは手短な挨拶で済まし、通り過ぎる。平太の顔はまたテーブルの客の方に戻り、トオル達は案内してくれる女性スタッフに従つて彼の横を素通りする。

「あの人、知り合い？」

「ああ、結構昔からの。確かに年だったかな？　一時期、同じ店で働いてた」

「ふうん……」

美純は不思議そうにしていた。

「もつとちゃんと挨拶とか、しなくていいの？」

トオルは案内された店の隅の席に腰掛ける。そして目線で向かい

の席に座るよう、美純を促す。彼女はそれに気付いて席に付いた。  
二名分の小さなテーブル席だから、割に二人の距離は近い。

「別に。どうせ、そのうち向こうが来る。それにさつきはあいつが接客中だったからな」

「そうなの？ なんだか、物足りない再会だな」

「お客さんがいる場所では、そんなもんなんだよ。俺達の業界のマナーみたいなもんさ」

トオルはそう言つて答えた。美純はそれでもまだ釈然としない様子だったが、トオルはあまり気にしないことにした。

一人の会話が一端途切れる、頃合を見計らつたようにスタッフの一人が飲み物のメニューを持って現れた。トオルはグラスでシャンパニュを、美純はフレッシュのオレンジジュースを注文した。待つている間、なんとなく二人の間はぎこちなかつた。トオルは、普段『カーサ・エム』で彼女と会うのとは違う、ちょっとした違和感に戸惑つていた。話題を探しても大したもののが浮かばない。

「あ、……あのさ」

美純が何かを言おうとした。しかしそこに、注文の飲み物を持つて現れた平太が割つて入つてきた。

「お待たせ。元気そうだな」

「まあな。そつちはどうなんだ？」

「こつちも問題なし、かな。店も三年経つて少し起動に乗つたし、自分のにもやつとりズムを掴んだ、つてどこか」

平太は目を細め、口元をニッとをやつてみせた。そして持つてきたグラスをそれぞれトオルと美純の前に差し出す。が、その時になつてようやく彼は、トオルが連れている相手が自分の想定外の存在だということに気が付いたようだ。

「お？ 高校生？！」

「…………」

思わずこぼした平太の確認とも質問とも取れる言葉。自分の事を言われて、しかし美純は答えなかつた。平太も美純にはそれ以上言

葉を掛けない。

「なんだあ、トオル。お前、家庭教師のバイトでも始めたか？」

代わりに向き直ると、トオルの方に首だけ傾けて言った。

「あのなあ、俺がそんなこと出来るタイプだと思うか？」

「おい、となるともうこれは……」

ちょっとと考えるみたいに顎に手を当ててみせる、平太。そして今度は体を少しテーブルに寄せ、小声でぼそつと言つ。

「犯罪……って事か？ なあ、トオル、知つてるか？ 都内だと18歳以下に手を出すとだな……」

「馬鹿。この子はそんなんじゃあ、ない。それにその条例は都内だけじゃない」

トオルは虫でも追い払つよう手のひらをはたはたと振り、平太の視線を遮つた。

「ははは、知つてる」

「ちつ」

一人はそつやつてじばらぐ『店員と客』の立場でさり気なく再会を楽しんだ。

「……とはいえ、俺の不信は拭えないぞ。ちゃんと彼女、紹介してくれよ」

平太は腕を組み、トオルを見据えた。観念したみたいな顔でトオルは答える。

「店の常連の子だ。この子の『家族』にもよくしてもらつてる。彼女のお姉さんの頼みで、今は食事の面倒を見るように言われてるんだ」「……よく、わからん」

「説明すると長いんだ。だからもう、気にするな」

トオルは首を振つて、手は『お手上げ』のポーズをしてみせた。

「俺はやつぱり、……お前には両手を勧めるべきかな？」

「だから、違うって言つてるだろ？」「だから、違うって言つてるだろ？」

そんな二人のくだらないやり取りに水を差したのは、さつきから

ちょっと緊張氣味に座っていた美純のくすくすと笑う声だった。



「ん。やつと笑ってくれたな」

「えつ？」

平太の言葉に、美純はちょっと不思議そうな顔をした。

「だって、女の子はやっぱり笑ってくれないとね」

「そ、そんなに固い顔してました、私？」

美純は今度はドギマギとして平太を見た。そしてすぐに視線をトオルに移すと、目顔で確認する。それにトオルは、わざと両方の人差し指で目尻を引っ張つてみせる。

「……こんだつた」

「う、うそつ？！」

美純は顔を赤くしてあたふたとした。平太がその様子をみて吹き出した。

「ははは、お前、悪い奴だなー」

そう言つて彼は遠慮なくトオルの背中を平手で叩いた。トオルは「うつ」と息を詰まらせる。実際、結構な力で叩かれたのだ。

「ね。大丈夫だよ、そんな顔はしないから」

「ほ、本当ですか？　……うつうつ」

安心したのと同時に悔しいのが出てきたらしく、美純は恨めしそうな目でトオルを睨みつけた。トオルはニンマリとして彼女の視線を楽しむ。ところが突然、彼の視界の中から美純の姿が不自然な動きで飛び出していった。　というより、トオルの世界が大きく揺れて回り始めたのだ。見ると平太がトオルの頭をわしづと掴んで、ぐるぐると振り回していた。トオルは慌てて掴む腕を振り払おうとするが、彼はそれを物ともしない。そして平然と平太は美純との会話を続けた。

「いいかい、こんな奴の言つことを鵜呑みにしちゃダメだよ。こいつの性格は捻じ曲がってんだ。たまたま、360°ピッタリで一回

転したから人の顔をして生きていられるだけで、中身はただの悪党さ

「おい……あ、」

トオルが一言返そとすると、平太の腕に力が入った。振り回されるトオルの頭が、回転数を上げた。世界がますます加速していく。「ところで、君、名前は？」

「あ……、美純です。四方美純といいます」

「そう。俺は古沼平太、よろしくね」

「は、はい。こちらこそ、よろしくお願ひします」

美純は平太の紡ぎ出す会話と魅せる表情に、自分でも知らぬ間に緊張を解いていた。彼女の表情はいつのまにかほぐれ、次第にいつものような自然な笑顔もこぼれ出していた。

「ああ、そうだ」

急に思い出した素振りで、平太は動きを止めた。そしてぱつと掴んでいた手を放す。おかげで振り回されていたトオルの頭はようやく開放され、彼はともかく頃垂れた。

「……お前、な」

今度はトオルが恨めしそうにした。が、平太は悪びれた様子もない。おまけに彼はちょっと意地悪そうな顔になると、トオルに向かつて平然と尋ねた。

「（）注文はお決まりですか、お客様？」

「……決まるか。もういいよ、お前に任せる」

「ははは、了解」

面倒臭そうに答えるトオルに、平太はあっけらかんと笑う。そして今度は視線だけを美純に移すと、彼女にも訊ねる。

「美純ちゃん、嫌いなモノはある？」

美純はそれに首を横に振つて答えた。平太は口角を上げて了解のサインを出すと、「ゆっくりしてつてくれよ」と一言残し、二人のテーブルから離れて行つた。

美純の目はしばらく平太の後ろ姿を追つていた。横顔にさつきま

での笑顔の面影が残つてゐる。トオルはそれをぼんやりと眺めていた。そして思った。そういうえば、こんなふうに同じ田線の高さで彼女と過ごすのは、あの日以来かもしれない。

美純と出会つた、あの日の夜以来。

これまで、自分と美純の関係はカウンターを挟んだ上で始めて成立するものだと思っていた。彼がよく通うハンバーガーショップの店員と同じ、店の外で出会えば逆にギクシャクとしてしまうような関係。けれど、実際はそうでもなかつた。確かに歳は離れているし、ちょっと違和感はあるが、かといって別に不自然というほどではない。奇妙な感じがした。うまく言葉にはできないが、彼女のことを許容するある種の感情がトオルの中にあるようなのだ。だが、その感情が何なのかは、彼自身もよくわからないでいた。

「ねえ！」

急に声を掛けられた。それでトオルははたとして声のする方に視線を向ける。すぐ目の前で美純が自分の顔をのぞき込んでいた。彼女は何度か呼んでいたらしく、トオルがなかなか気付かないことにちょっと腹を立てていた。頬をふくらませてむくれていた。

「乾杯、……しないの？」

美純は自分のジュースのグラスをトオルの前に突き出してくる。トオルはそれを見て、我に返つた。息を吐くとそれは思いのほか深かつた。一緒に肩の力が自然と抜けていった。どうも体に力が入つていたらしい。

トオルはゆっくりと自分のグラスを上げた。

「乾杯！」

「乾杯……」

美純はさつきまでとは打つて変わつた満足そうな笑顔を見せた。グラスを傾けるとジュースを一口飲んで、またさらに笑顔をこぼした。

「どうかしたのか？」

トオルが問いかけると、美純は小さく首を振つて「なんでもない

……」と呟いた。その顔は随分と嬉しそうに見えた。

窓の外はもうほとんど夕闇の中に落ちていた。外の世界はライトの明かりに照らされた部分だけが、ポツカリと浮かび上がって見える。時折、その光の輪の中を横切る人がいる程度で、辺りは随分と静かだ。人口過多の交差点はここからわずか数百メートルくらいしか離れていない。ちょっと不思議な感じがした。

「ねえ、トオル」

急に美純がトオルを呼んだ。彼女は俯いたまま、問い合わせてきた。

「うん？」

「私達って、……どう見えるのかな？」

「あん？ どうって何が、だ？」

聞き返すが、しばらく美純は答えない。続く微妙な空氣と沈黙。トオルはちびりとシャンパンバー二ヶを飲みながら、美純が再び口を開くまでの時間を見つた。

「…………」

「おい、美純？」

とうとうトオルは呼びかけた。それで美純は顔を上げ、ためらいがちに言つ。

「その……私達って、さ。はたから見たら、お、親子みたいに見えるのかな？」

「はあ？！」

美純の言葉はトオルをちょっと驚かせ、だいぶ落胆させた。思わず出てしまつた大きな嘆息のあと、トオルはやや不機嫌に言つ。

「あのな、確かに歳は離れているが……お前にとつて、俺は親父扱いか。さすがにそこまで老けてないだろ？？」

「ち、違うよ！ そういう意味じゃなくて……」

美純は両手をぶんぶん振つて、トオルの言葉を全面的に否定する。それでもトオルの表情はむすつとしたままだ。美純はちょっと困った顔になつてしまつ。

「私、そんなこと、思つてないのに」

その声はこころなしか悲しそうな音で響く。美純はポツリと呟き、顔を塞ぎ込んでしまった。それでトオルは大人気ない自分を反省する。

「美純、今のは俺が悪かつた。『ごめんな』

「うん……」

美純は顔を上げ、首を振つた。笑顔を作ろうとしたようだが、その表情は沈んだままだ。トオルはさつきよりも深く反省した。自分は何をそんなに不満に思ったのだろう？ 相手はひと回り以上も歳下の少女で、言葉に悪意はないのだ。トオルはもう一度、「ごめん」と謝つた。それで美純はようやく気を取り直したようだ。今度は口元をそつと微笑ませて、トオルの謝罪に答えた。

が、それからしばらくなつと氣まずい空気が続いた。自分の配慮のなさがそつさせたのだが、それをどうやって解消すればよいかとトオルは頭を悩ませてしまつた。美純は一度笑つてみせたあとは、ずっと視線をテーブルの上に落としたままだった。じつと一点を見つめたまま。トオルはそんな彼女にかける言葉が見付からないでいる。居心地の悪い沈黙が続いた。トオルのグラスは、もうほとんど空になつていた。

ふと、美純の表情が固くなるのを感じた。肩に力が入るのが見てとれる。トオルの方からは見えなくても、その動く様子でなんとかくわかった。彼女が膝の上で拳を握り締めていた。美純は何かを言おうとしていた。唇が何度か開いては、躊躇して閉じるを繰り返した。そして随分とそうしたのちに、とうとう決意が言葉になつて彼女の口をついて出た。

「ねえ、……トオル

「ん、なんだ？」

「……」

「なんだよ、一体？」

トオルはもう一度躊躇した美純の背中を押すように促す。それで

彼女は顔を上げ、言葉を続けた。

「あのさ、……平太さんつて、昔からの知り合いつてことは、トオルのことをよく知ってるんでしょ？」

「まあ、10年ちょっとは交流があるしな」

「そう……」

「どうした？」

美純は大きく一つ、深呼吸をした。表情は一層固くなつて、瞳は真剣そのものだつた。実際、身を乗り出しているわけではないが、まるでそつされているような錯覚さえ覚える、一種独特な緊張感を彼女から感じた。つられてトオルも息を呑んだ。落ち着かなくなつて、椅子の上の腰を少しずらした。

短い沈黙が、いつまでもずっと続くように感じた。トオルは膝を組み替える。視線を一度革靴のつま先に落とし、それからもう一度正面の少女に向けた。美純の視線はそのあいだ中ずっと、自分に向いていた。二人の視線が絡んだのを合図に、ようやく美純が口を割つた。

「そんな、ね……トオルをよく知つてゐる人から見て、一体、私達つてどう見えてるのかなつて思つて。そういう人が見ても家庭教師とか、身内とか、……私達一人つてそんなふうにしか見えないのかなー、つて」

「あんな、美純。違うぞ。家庭教師つてのは、あいつのくだらない冗だ……」

トオルの返す言葉を、ちょっと早口な美純の言葉が押し留める。

「……多分、

彼女の目がトオルをじっと見つめてくる。ずっと深くを見つめてくる。

思わずトオルは唾を呑んだ。

そして

「きつと私達……『恋人同士』

とかには、間違つても見えない

んだらうなー、って……

言つと、すぐに美純は俯いてしまつた。

「…………は？」

思わず言葉を失つたのは、驚きよりも毒氣を抜かれたからかもしない。トオルの思考は、行き場を失つて一旦停止した。

しかし、だ。トオルが彼女の口から出た言葉に啞然としていると、向かいに座る少女の肩がくっくつと揺れ始めるのだ。最初それは控えめだったが、次第に抑えきれなくなる。俯いていた彼女の顔がいたずらっぽい笑みを浮かべ出す。そしてとうとう我慢できなくなると、満面の笑みを浮かべた顔がトオルを向いて言った。

「私達つて、ゼーーつつたい、援交だと思われてるわよね？！

大丈夫よう、私はちやーんと否定してあげるから、ね」

「なつ…………？！」

トオルは再び絶句した。停止したままの思考が、彼女の言葉をうまく飲み込めずにあたふたとしている。美純はそんなトオルの様子に満足そうにニンマリとすると、もう一言。

「安心していいわよ、……ぱ～ぱ～

「…………お前、いい度胸だな」

トオルは満足そうな表情の美純を斜めにみた。テーブルに肘を付き、顔は仏頂面になる。ふつふつと腹立たしいのが湧いてきた。こんな小娘に、自分は一杯食わされたわけだ。傾けたグラスが空なのが、ますます悔しい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1832t/>

---

Love laughs at locksmith. - 年の差恋愛の始め方、続け方 -

2011年10月9日16時04分発行